

リトルバスターズ!

LITTLE BUSTERS!



小椋正雪
ogurai masayuki

イラスト 小路あゆむ
svollavumu

ノードリヤフカ
50 nautical miles Kudryavka





50
ノーマルマイル
ナリヤカ
50nauticalmilesKudryavka

50ノット ナドリヤウカ

50 nautical miles kudryavka

ogura masayuki
小椋正雪

syoji ayumu
イラスト 小路あゆむ

リトルバスターズ!
LITTLE Busters!



「うむー」

いつの間にか報道カメラマンのようにな
一眼レフ一々態勢になつていて采ヶ谷さ
んが、バシヤシヤ、バシヤシヤシヤシヤ!
とカメラを取つ替え引っ替えして僕ら
を激写した。



「ゆいちゃん、よだれよだれ……」

「いやーもう、倒錯した世界でもアリはアリなんですね」

「――ふたりとも子猫みたいで可愛いなっ」
「格好になつていないだろうか。
……今更だけど、僕ら、とんでもない



50

リトルバスターズ!

nautical

mil



プロローグ

3

第一章 亜麻色の髪の、少女

5

第二章 その名は、リトルバスターズ 17

第三章 クドリヤフカという名前の、女の子 92

第四章 50ノーティカルマイルの、空 207

エピローグ 269

リトルバスターズ!

50ノーティカルマイルの、クドリヤフカ

小椋正雪



50
グッド・アイカル・ライルの
アドリヤフカ

能美 グドリヤフカ

クオーターの帰国子女。日本びいきの祖父の影響で、普段の生活にはけっこう馴染んでいるが、苦手な英語をムリに話したりする姿が愛らしくて、よくリトルバスターズの面々に弄られてしまうマスコット的な存在になった。

イラスト：小路あゆむ

カバーデザイン：上田デザイン室

プロローグ



気がついたら、暗闇の中にいました。

光も音も、なにも無い空間。

その空間の中に、私はどのようにいるのか……正直、わかりません。立っているのか、横になっているのか、それすらわからないのです。なにせ、身体の感覚がほとんどないもので……。

それでも……宇宙に浮かぶというのは、こういった感じなのでしょうか。ふと、そんな考えが浮かび上りました。

地上で見上げる夜空は星だらけですが、実際の船外活動、すなわち宇宙游泳では、地球や月、太陽（目が灼かれてしまうので見ちゃいけませんが）以外はよく見えないそうです。だから、いま私がいるこの暗闇は、ある意味宇宙なのかもしれません。そうだとすれば、私は——。そのとき、耳のそばをなにかが通り過ぎて、足もとのさらに下から水滴が水面みなもに落ちる音が聞こえました。

同時に、麻痺していた感覚が少しだけよみがえります。

……ああ、そうでした。

ここは、宇宙なんかじやないです。

地球の大気圏の底の底、つまり私達の暮らす大地に他なりません。

私の場合、そのさらに底の普通の人がまず訪れないようなところにいます。——まあ、仕方のないことなのですが。

そう、私がここにいるのは、ごく当たり前のことなのです。

そして、これもごく当たり前のことです、私はここで闇を——なにもかもが無くなる、本当の闇を——このまま待つ身なのでした。

こうなることが半ばわかつていたはずなのです。

こうなることを半ばのぞんでいたはずなのです。

なのに胸の奥に浮かんでくるものは、まつたく違うものでした。

それは、とっても暖かいものです。

それは、とても愛おしいものです。

私の胸中に浮かんでくるもの。それは——あの懐かしくも暖かい、楽しかった日々でした。

第一章 亜麻色の髪の、少女



——あの日々を思い出すときに浮かぶ最初の光景は、夕暮れ時。そこで私は、決して忘れることがない人と出会ったのです。



クドこと能美^{のうみ}クリヤフカと僕、直枝理樹^{なおえりき}が出会ったのは、桜がまだ散る前の、春の日のことだった。

その日僕は幼なじみでひとつ年上の棗恭介^{なつめぎょうすけ}のミッショソ（「糸電話の糸は、どこまでのばしたら聞こえなくなるのか」というもの。最初は廊下でやっていたのだけれど、校舎内では收まらなくなつたのでグラウンドに出て続行したところ、途中で恭介の妹である棗鈴^{りん}の猫が集団で糸にじやれつてしまい断線し、結果は校舎内で行つた三十メートルに留まつた）を終えて寮に戻ろうとしていたところで、視界の端に段ボール箱を抱えてふらついている小さな女の子が

映つたのがきつかけだつた。

小さい女の子といつても、僕らと同じ制服を来ているからには年はあまり変わらないはずだ。けれども、その子が持つてゐる段ボール箱はあまりにも多く、それを抱える身体はあまりにも小さかつた。

そして――、

「わふっ!?」

段ボール箱が崩れかけ、女の子のバランスが決定的に崩れる。

「おつと」

僕は通りかかつたついでのように装つて、女の子を助けてあげた。

段ボール箱は予想以上に軽いものだつた。たぶん、女の子が自分の手で持てるように中身を調節していたのだろう。

「大丈夫……?」

そこで初めて女の子の顔をまじまじと見て、僕は絶句する。

こう言うと恥ずかしくなるけど、一瞬、妖精かなにかだと思つてしまつた。

何故なら、彼女は――淡い亞麻色の髪と透き通るような白い肌、そして澄み切つた湖のように綺麗な碧い眼の女の子であつたからだ。もし息を止めてじつとしていたならば、精巧な西洋人形だと思つてしまつたに違ひない。

「え、ええと……『だいじょうぶ?』

おもわず、なげなしの知識を振り絞った英語になつて、そう訊いてしまう。すると女の子ははつと顔を上げて……こくりと、なにも言わずに頷いたのだつた。とりあえず反応が得られたので、ほつと溜息をつく。

『どこに、はこぶの?』

返事の代わりに、女の子はすたすたと歩き出した。どうも、先導してくれているらしい。僕も、その後に続く。

その行き先は校舎でもなく、(当たり前だけれども)男子寮でもなく……つて、女子寮!? よく考えたら当然のことだ。なにせこの学校の生徒の大半は寮住まいなのだから。そんな僕の動搖に気づかず女の子は先ほどと同じペースで進む。

「——みつかつちやつたら、そのときに考えればいいか」

日本語で小さくそう呟いて、僕は再び女の子の後を追つた。

本当は男子生徒である僕がそのまま入ると色々とまずいのだけれど、女の子の手前、持つている段ボール箱を手放すわけにもいかず、結果としてそのまま中に入ることとなる。

幸いにして、寮内には女の子以外の女生徒の姿は見えず、誰にも見咎められることなく僕は女子寮の中を進むことができた。

さらについて行くと、家具もない部屋に通される。これから内装を整えるのだろうか、

ずいぶんと殺風景に見えるけれど、入居直後だとしたらこんなものだろう。

女の子が段ボール箱を置いた横で、僕も荷物をおろす。

さて、これからどうしよう。そう思ひながら女の子を見てみると、彼女も似たような表情で所在なげに僕を見ている。

「ええと、転入生ってなんて言うんだつけ——『このがつこうは、はじめて?』」

小さな女の子はこくりと頷いた。

『あんない、いる?』

ふたたびこつくりと頷く女の子。同時に少しだけ表情を和らげてくれる。

『それじや、いこう』

申し出を好意的に受け取つてもらつて、少しだけ気が楽になつた僕は、そう促して女の子の部屋を後にした。ただ、先程から一言もしやべらないのは、日本語が話せないのか、もしかすると、英語すら使わない国の人なのかもしれない。もつとも、女の子の首の動きでイエス・ノーの返事はあるので、どうにか僕のつたない英語が通じているのはわかつて、正直すごく助かっている。

それにしても、こういう時のために日頃から英語を勉強しておけば良かったとつい思つてしまふ僕だつた。おそらく、外国の人に話しかけられた人の大半は、そう思ひんじゃないだろうか。

『こうしゃ、おおきいよ』

『グラウンド、ひろいよ』

『ろうか、せまいよ』

つたない英語と日頃の経験を頼りに、ひととおりを見て回る。

精一杯ながらも、たどたどしく英語で紹介したけれど、小さな女の子は目を輝かせてそれを聞いてくれた。

ただ、未だに声を発していない。それがちょっとだけ心配であり、残念でもあつた。

『ここがしょくどう。おいしいよ』

校内でも、かなりの数の生徒でぎわう場所を紹介する。

今は夕暮れ時とはいえ夕食の時間にはまだ早いからか、生徒の数はそれほど多くなかつた。小さな女の子は、物珍しそうな顔で食堂を見回している。

『めずらしい?』

僕の間に、こくりと頷く女の子。

『にほんのごはん、たべたことある?』

ここで初めて、女の子は首を縦にも横にも振らなかつた。

もしかすると、「日本食」そのものが、よくわからないのかもしれない。
「ええと……『ごめん、むづかしかつた?』」

ふるふると、首を横に振る女の子。

『きっと、おいしいよ』

納得したかのよう、女の子はこくんと頷く。

『つぎ、いこうか』

片言英語を話す男子と、なにも喋らない女子という、端から見たらずいぶんと奇妙に見える二人連れは、さらに校内を歩く。

『……これで、おしまい』

それからさらに色々なところを回つて、僕らは再び女子寮の部屋に戻つた。一応、学校生活に必要な部分は全て見て回れたと思う。

『また、あおうね』

そう挨拶すると、女の子はきょとんとした顔で僕を見る。

どうやら、最後の最後で言葉がうまく伝わらなかつたらしい。

締まらないけど、まあ仕方がないか。そう思つて、僕が踵を返したとき——。ついと、僕の袖を引っ張られた。

引っ張つたのはいうまでもなく、女の子だ。

「うん、なに？」

思わず日本語で応えてしまつたけれど、女の子はそれには構わずに……。



とてもきれいな姿勢で、ぺこりとお辞儀をした。

僕も背筋を伸ばして、お辞儀を返す。

すると女の子はにつこりと微笑んで小さく手を振り、部屋のドアを閉めたのだつた。
……なんというか、不思議な女の子だつた。

日本語が通じないとなると、この学校で勉強していくのはとても大変なことになるとと思うけど……それでも、頑張つてほしいと思う。

翌朝――。

「へえ、小さな女の子ねえ……」

不必要なまでにたくましい両腕を組んで、僕のルームメイトである井ノ原真人いのはらまさとはそう言つた。

「そいつは、筋肉にや期待できそうにねえなあ……」

「うん。女の子に筋肉を期待するのつて、たぶん真人だけだからね」

下手をすれば、失礼になりかねないと思う。

「理樹よりちいせえつてことは、上級生じやねえな」

僕の言葉をまつたく聞かず、真人はそう続ける。

「僕を基準にされても困るけど……それに、小さな女の子だつたから、下級生じやないかな」

「そいつはいいじやねえか。オレたちより一年多く、筋肉を鍛えられるぜ?」

「だからそれで喜ぶのは、真人だけだつて……」

いや、もしかしたら女子レスリング部の部員とかだつたら喜ぶかもしねないけれど、まことにいんじやないかな……。

「でもよ。そุดだとすると、それとは別にちと残念だな」

「え? なにがさ」

「いやだつてよ、オレ達と同じ学年ならずつと一緒にいられるだろ?」

「そうかもしねないけど、それがどうしたの?」

僕が首を傾げてそう訊くと、真人は少しの間、言葉を選ぶように悩んで、

「あー、最初理樹に春が来たんじやね? つて思つてな」

「ほう、奇遇だな。俺もそう思つたところだ」

横からそう言つたのは、真人や恭介、そして鈴と一緒に子供の頃からずつといる仲間、
謙吾けんごだつた。それにしても——は、春つて。

「なに言つてゐるのさ。そういうのは、僕よりも真人や謙吾の方が先でしょ」

「そうか? ……ありがとよ」

「俺は……剣の道があるからな」

いつものことだけれど対照的なふたりだつた。

「しかし理樹よ。その女生徒、少し奇妙ではないか？」

「え？」

謙吾のその一言に、僕は首を傾げる。

「日本語が話せないのだろう？ しかも、英語はわかるもののそれを一言も発しなかつた。だから理樹の見立てでは英語も得意ではない。そうだな？」

「あ、うん。そうだけど」

僕がそう答えると、謙吾は怪訝そうな表情をますます露わにして、

「それでは、いかに学力が高くても、この学校には通えないだろう。英語だというだけでもかなりのハンデだというのに」

「あ、うん。それは僕も気になっていたんだけどね……」

改めて謙吾に指摘されると、確かにおかしいような気がする。

「んだよ。勿体ぶらずにわかりやすく教えるよ、謙吾の先生よ」

早くも僕らの会話に付いていけなくなつた真人が、退屈そうな声を上げた。

「十分わかりやすく指摘したつもりだが……推測するに、その少女は英語を喋ることはできるのだろう」

「んじやなんで話さなかつたんだ？」

当然の質問を、真人。

「そこは判断する材料が足りないからなんとも言えん。単に恥ずかしかつたぐらいしか思いつかないからな」

「なんだよ、それじやなにもわからねえのと一緒にねえか」

「だから判断する材料が足りんと言つただろう」

そこで先生が入ってきたので、僕らはHRを受けるべく、姿勢を正した。

——つて、あれ？

先生のうしろに、小さな人影がある。

学校の制服の上には、見慣れない帽子とマント。そしてふわりと長い淡い亜麻色の……つて、ま、まさか……。

僕は思わず席を立ちそうになつた。

その人影は、どうみても昨日出会つた女の子だつたからだ。

唖然としている僕には気づかず、女の子は丁寧な字で——それも日本語で——黒板に自分の名前を書くと、はきはきとした口調で、

「能美クドリヤフカともうします！ みなさん、よろしくおねがいいたしますっ！」

「おい理樹、さつきお前が話していた女の子つて——

「あ、うん。彼女……みたいだけど」

「めっちゃ日本語話してるじゃねーか」と、驚いた様子で真人。

「そ、そうだね」

僕の声も浮ついてしまう。

「しかも、かなり良い発音だぞ……」

と、謙吾。本当に一体、どうなつているんだろう……。

そこで、教室を見回していた能美さんが、僕に目を留めた。そして小さく首を傾げると、「あ、あーっ！」

教室中に響くほどの大声で、そう叫んだのだった。

「ええと……や、やあ。日本語、喋れたんだね」

クラスのみんなからの視線が僕と女の子の間を交互に行き来する中、気が利いたことを言えない僕。そして――。

「わ、わ、わふーっ！」

小さな女の子あらため、能美さんはそんな可愛らしい悲鳴を上げると……帽子を脱いで、自分顔に押しつけたのだつた。

第二章 その名は、リトルバスターズ



あの暖かい日々は、彼だけがくれたものでしようか？　いえ、違います。彼と、彼と繋がる人たちがいたからこそ、あの楽しい日々を送れたのだと思います。あのときの私は、この時間がいつまでも続けばいいのにと……そう、思っていました。



まるで、再生したビデオを見ているようだつた。

「わふつ！？」

「……おつと」

持っていた段ボール箱が崩れそうになつたところで、後ろから支えてあげる。その動作は——僕もクドも、最初に出会つたときとまったく同じだつた。

「大丈夫？　クド」

出会つてそれほど経つていなかつたけれど、僕は『クド』と愛称で呼ぶようになつていた。ほかでもない本人に『ふらんくりい』に呼んで欲しいのです』とお願ひされたというのもあるけれど、この呼び方が一番しつくりきたというのもある。

「ありがとうございます。直枝さん」

「どういたしまして。その荷物、どうしたの？」

僕がそう訊くと、クドはにっこりと笑つて、

「はい、この前の大雨で壊れていた私の部屋がやつと直りましたので、もう一度お引っ越しをしているところなのです」

「あ、なるほど……あのときの爆弾低気圧、すごかつたもんね……」

あの日は夕方までは普通の天氣だつたのに、夜になつた途端強風と豪雨が吹き荒れていた。

そんな嵐であつたから、僕らはおとなしくしている——はずだつたのだけれど、恭介が突如『ちょっと雨量を測つてくる!』と言つて怪しげな道具を担いで飛び出していつちやうし、真人にいたつては『ヤツに勝てるのはオレしかいねえ!』と訳のわからぬことを言つた上に上半身裸になつて飛び出していつたのは本当に予想外だつた。

そしてふたりとも、全身ずぶぬれになつたあげく、葉っぱやらなにやらを余すことなく張り付けて戻つてきてそのままぶつ倒れたのだから、今回の大雨は相当なものだつたのだろう。

「ありがとうございました」

初めて出会ったときと同じような殺風景な風景——ただし、かなりの改修をかけたのか真新しい木材のにおいがする部屋——に段ボール箱を置くと、クドはそうお礼を言う。

「あのー……」

「うん？」

そこで伏し目がちにそう声をかけてくるクドに、僕は小首を傾げて言葉の先を待つ。

「実は、直枝さんにご相談したいことがあるのですが……お時間の都合はありますか？」
「僕でよければいつでもいいけど、なにかあつたの？」

ちょっと心配になつてそう訊くと、クドは少しだけ目をふせて、

「その、るーむめいとを募集したいのです」

ちょっと恥ずかしそうに、そう言つた。

「ルームメイトって……部屋が壊れる前に、ルームメイトの人は決まつていたんじやなかつたつけ？ その人はどうしたの？」

確かに色々あつて、クドが入居した次の日に来るはずだつたと聞いていたのだけれど。

「それがですね……」

少し困つた顔で、クド。

なんでも、クドと一緒に本来のルームメイトも修理が終わつた部屋に戻るはずであつたのだが、どうも避難先の三人部屋で仲良くなつてしまい、そのまま正式に移住することにしてしま

つたらしい。

「なるほどね。それじや、クドの方はどうだつたの？ その……鈴とさ」

そう、部屋を修理している間にクドがお世話になつていたのは、鈴の部屋だつたのだ。
幼なじみとしてずつと一緒にいた僕が言うのもなんだけど、鈴はかなり人見知りをする。そ
んな鈴と短い間とはいえ一緒にいられたのだから、結構脈はあると思うのだけれど……。
「鈴さんですか？ えっと、そのう……あまりお話できなかつたのです。わふー……」
申し訳なさそうに、クド。

「それならさ、正式にルームメイトになつてもらうよう、頼んでみたらどうかな？」

あの、知らない人間はとりあえず威嚇してしまう鈴が、短期間とはいえクドと一緒にいられ
たのだから、無理ではないと思う。

「そうですね。お願ひしてみましようか」

お互い頷きあつて、僕らは行動を開始した。

「なに？ あたしとか？ 元の部屋に戻らないのか？」

猫達の集まる渡り廊下の横の小さな庭で、完全に虚を突かれた様子で鈴はそう言つた。周囲
には恭介がどこからともなく拾つてきては鈴に世話を任せる猫達がたくさんいて、そのうちの

一匹は鈴にごろりとおなかを見せている。

手に持つてゐるものから察するに、鈴は猫達のブラッシングを行つていたようだ。

「元の部屋には戻りますが、できれば正式にご一緒したいと思いまして……」

と、遠慮がちにクド。

「そ、そうなのか。うーん……」

鈴が悩ましげに考え始めたときだつた。猫たちがクドの姿に目をやつたかと思うと、

「んなーー！」

「ふかーー！」

「なーおーうーー！」

どういう訳か一斉にクドに対し威嚇をはじめた。鈴におなかを見せていた猫ですら、全身の毛を逆立ててゐる。

「わ、わふつ！？」

背中を大きく反らせて爪を立てる猫達に、当然のことながら怯えてしまうクド。
「こらつおまえら！」

鈴が怒ると、猫達は三々五々に散らばつた。だが、距離を取つただけで、その視線はみんなクドの方を向いている。

「ごめん、あいつらどうもクドが苦手みたいなんだ。だから、同室の間あたしのところに来ら

れなくてストレスが溜まつていたらしい」

「そうなのですか……わふー」

残念そうに、クドが呟く。

「あいつらがクドと仲良くなつてくれればいいんだけど……うううー」
悩ましげに、そう唸る鈴。

「いいよ鈴、無理しなくて」

クドには悪いけど、これはちょっと無理だろう。

「……ほんとうに、ごめん」

珍しいことに、鈴が素直に謝った。

「いえ、気になさらないで下さい。鈴さん

と、微笑みを浮かべてクドが慰める。

「その……ルームメイトが決まつたら教えて欲しい

「はい！ わかりました！」

元気よく返事したクドにいくらか表情を和らげる鈴だつた。

そんな鈴と猫達の見送りを受けて、僕らは渡り廊下をあとにする。

「そういえば、私と一緒の間は、鈴さんのまわりに猫さんがいなかつたです」と、クド。

「なんでのなでしようか……」

「なんでなんだろうねえ」

まあ、だいたい想像はついてしまうけれど。でも確信が持てないのとクドをしょげさせたくないため、口には出さないでおく。

「実は……私、どこの国に行つても、何故か猫さんと相性が悪いみたいなのです……」

「鈴のところの猫達だけじゃなかつたんだ！」

「わふ!? そ、そうですけど……」

もう間違いない。クドの場合、雰囲気が犬っぽいのが原因なのだろう。しかし、まさか万国共通の猫知識であるとは思わなかつた。

「そうだ。小毬さんこまりのところに、行つてみようか」

「あ、はい！ 小毬さんなら……大丈夫な気がしますー！」

「ごめんね、くーちゃん。私もうルームメイトがいるんだ」

事情を聞いたクラスメイトの神北小毬さんは、すぐさまクドを拵み倒さんばかりにそう謝つた。普段はほんわか、にこにこしているのでその落差に驚いてしまう。

「あ、そうでしたか……」

同じく予想外だつたのだろう。虚を突かれた感じで、クドがそんな感想を漏らす。

「本当に、ごめんね」

「いえいえ、お構いなくなのです……」

そういう割には、多少がつかりしているクドだつた。まあ、僕もクドと小毬さんなら馬があ
うから上手く行くと思っていたので、同じ気分であつたのだけれど。

「私も、クーちゃんとならすんごい幸せな寮生活がおくれると思うけど……でも我慢なのです。
だつて——」

「だつて？」

ルームメイトがすでにいることは別に、なにか他の理由がありそうなのが気になつて、そ
う訊いてみる。すると小毬さんはいつものにこやかな顔で、

「私がクーちゃんと一緒にいられると、それはとつてもハッピーなのです」

「うん、そう言つていたよね」

それはよくわかるので、僕は頷いてそう答える。

「でも、今の私も今のルームメイトと一緒にいられて、とつてもハッピーなのです」

「なるほど」

「ということは、クーちゃんとまだ見ぬルームメイトさんも、一緒にいればとつてもハッピー
になるつてことだよね？」

「う、うん？」

「そうなるの……かな？」

「ということは、とつてもハッピーがふたつになるということです。ひとつとつてもハッピーよりも、ふたつのとつてもハッピーの方が、いいよね？」

「な、なるほど……」

ある意味とても小毬さんらしい、とつてもハッピーな理論だつた。

「わかりました！ 小毬さん！」

そしてクドがそのとつてもハッピー理論に感動していた。

「私、とつともはつぴーになります！」

「うん、クーちゃんなら絶対になれるよー」

「はい、頑張りますです！」

いや、頑張つてなるものでもないと思うけど……言うだけ野暮かな。がつちりと握手を交わしているクドと小毬さんを見ていると、そう思う。

「それじゃ小毬さん、色々とありがとね」

「いえいえ、お役に立てなくてごめんね理樹君。あ、あとクーちゃん

「はい、なんでしょう？」

「クーちゃんのルームメイトが決まつたら、教えてねー」

「わかりましたなのです！」

そんな小毬さんの見送りを受けて、僕らはその場をあとにした。

「他にはどなたがいらつしやるでしようか……」

廊下を歩きながら、クドは僕にそう訊いた。

「そうだね。僕の知り合いだつたら、例えば……^{くるがや}来ヶ谷さんとか？」

「ふむ、呼んだかね？ 少年」

「わふー！」

まつたく気配も兆候も見せずに、クラスメイトにして神出鬼没で有名な来ヶ谷唯湖さん^{ゆいこ}がクドの背中に抱きついていた。正確に言うと、来ヶ谷さんが背丈があるから、抱きついているというより、抱き抱えていると言つた方が正しい。それにしても、この様子を見ているととても全教科で優秀な成績を修めているようには見えない。それも授業を受けずテストの点数だけれど、だ。

「ふむ、やはりクドリヤフカ君の抱き心地は最高だな」

なにやら怪しげな微笑みを浮かべながら、来ヶ谷さん。対するクドは、どうにかしてその来ヶ谷さんの腕から逃れようとすると、どうにもこうにも上手くいかないようだつた。

「それで、私になにか用事かね？ 少年」

「じたばたじたばたと身体を動かすクドを、ものとも思わずだつこ（という表現が一番しつくりくる。どちらからも怒られそうだつたけど）し続けながら、来ヶ谷さん。

「いや、どちらかというと僕よりクドの方なんだけどね」

「ふむ？」

「とりあえず、当の本人をおろしてあげてくれないかな」

「……うむ。道理だな」

名残惜しそうに、来ヶ谷さんはクドを解放した。

「わ、わふー……：いつか、来ヶ谷さんをぎやふんと言わせるです……」

だつこされている間暴れ続けていたためだろう。目を回しながら、クドはそう言う。
けれどそれはなんというか……見果てぬ夢のような気がした。

「ふむ、その日が来るのを楽しみに待つていよう」

「それ、絶対に楽しんでいるよね」

「もちろんだとも！」

ぐつと親指を上に立てる、今日も平常運転な来ヶ谷さんだつた。

実を言うと、さつきからクドが後ろから飛びかかるうとしているのだけれど、それらを振り返りもせずにことごとく避けていたりする。

つくづく思うけれど、すさまじい運動能力だつた。

「そうそう少年。良いことを教えてあげよう。クドリヤフカ君のボディスタイルは、いわゆる将来有望系だ。あと数年したら私を超えるナイスバディになるかもしれないぞ？」

「いや、それを知つて僕にどうしろというのさ」

「言うまでも無かろうよ。『げひひ、今は青い果実だから我慢しようとするか。げえつへつへつへ』とか妄想しつつその日が来るのをじつと待つていればいい」

「それ、ただの変態だからねつ！」

あと、クドには申し訳ないけれど来ヶ谷さんを超えるスタイルというのが、いまいち想像でききない僕だつた。

「では今度こそ有益な情報を。クドリヤフカ君のおへそのそばにはだな——」

「うわあああああ！　うわあああああ！　わふあああああ！」

突如大声を出して、クドが来ヶ谷さんを止めた。

なにか、僕には話したくない重要な秘密なのだろう。……たぶん。

「な、なんでそんなことを知つているですか、来ヶ谷さん！」

「ふふふ……知りたいかね？」

「……いえ、いいのです」

怪しげに笑う来ヶ谷さんになにか思うところがあつたのだろう。クドはあつさりと追及の手

を緩めた。……もしかすると、僕がいるせいなのかもしれないけど。

「それで、私にどんな用事なのかね？」

「よ、ようやく本題に入れたね……」

そこに辿り着くまでに、僕もクドもくたくたになつていた。

かといって、この場でさようならでは今までの意味がない。僕は、クドにまつわるルームメイトの話を来ヶ谷さんに説明する。

「ふむ、なるほどな」

さすが来ヶ谷さん、僕が簡単に話しただけで、おおよその事情を察してくれたみたいだつた。

「それじやあ——」

僕が声を弾ませたときだつた。

「はつきりと言つておく」

来ヶ谷さんは厳かに宣言する。

「クドリヤフカ君とは無理だ。彼女と一緒に寝たら、私の理性が三日ともたないだろうつ！
とんでもない理由だつた！」

「素直すぎだよ！ もうちよつとオブラーートに包もうよ、来ヶ谷さん……つ」

「ふむ……では、私がもたない。性的に！」

「余計ひどいよ、来ヶ谷さん！」

なんというか、身も蓋もない話だつた。

「まあとにかく、そういうわけで非常に名残惜しいが私は辞退させていただく。クドリヤフカ君のルームメイトが決まつたら教えてくれたまえ」

「うん、色々引つかるところはあつたけど、わかつたよ。それじゃ行こうか、クド」

「あ、はい。ところで直枝さん、せいてきについて、どういう意味ですか？」

途端、来ケ谷さんがむせた。たぶん、クドがその言葉を知つてはいると踏んでいたのだろう。

「いやまあ……クドはまだ知らないことかな？」

たぶん、そうであると思う。いや、そうあつてほしい。

さすがに三回連續で成果が無かつたせいか、クドから元気がなくなつていた。

「先ほどから、すごい勢いで断られてしまつてはいるのです……」

「うーん、そうだね……」

クドと並んで、廊下を歩く。

「なんか、このまま決まらないような気がしてきました

「まだ諦めちゃだめだよ、クド」

僕が、そう慰めたときだ。

「おー、クド公元気ー？」

「わ、わふつ!?」

クドに後ろから抱きついたのは、三枝葉留佳さんだつた。僕らのクラスメイト——ではないのだけれど、どういうわけか僕らのクラスに遊びに来ることが多いので、こうして顔見知りとなつてゐる。クドとは見ての通り、ちょっとした悪戯をする側と、される側だつた。

それにしても、先ほどの来ヶ谷さんといい、今の葉留佳さんといい、どうもクドの背中には抱きつかずにはいられなくなる何かがあるらしい。

……まあその気持ち、わからなくはないのだけれど。

「ああ、よかつた。ちょっと葉留佳さんに相談があつたんだけど」「んー、なに理樹くんー？」

クドの頭に片手を置き、もう片方の手でコマのように回しつつ、葉留佳さんがそう答える。「実はかくかくしかじかで、クドのルームメイトを探しているんだけど、葉留佳さんはどうかなつて」

「うーん、別に構わないけど？」

あつさりと葉留佳さんはそう言つた。クドの帽子を取り、その頭をもみくちゃにしながら。

「ルームメイトとか、大丈夫なの？」

小毬さんの件を思い出して、そう聞いてみる。すると葉留佳さんはあつさりと、

「ダイジョウブダイジョウブ。私のとこ三人部屋だし、特に私物をどつちやりと置いているわけじゃないから、すぐに引っ越せるしね」

クドのほつぺたを縦横に伸ばしながら、笑つてそう答えた。

「すぐにいけるんだ。それじやもう引っ越しのお願いをしても構わないかな?」

「うんいいよ、それじやそういうことで」

クドの顎の下を猛烈な勢いで撫でながら、葉留佳さんは頷いた。

「よかつたよかつた。それじやあクド——クド!?

クドが、滅茶苦茶な状態になっていた。

「わふー……わふ? わふりやー」

既に人語ではない、どこかの世界の遠い国に住む生き物の言葉を話すクド。

ここで僕はようやく、葉留佳さんがしていたことを具体的に認識する。

「ごめん葉留佳さん、今の話無かつたことに!」

「うん、いいよー。クド公のルームメイトが決まつたら教えてねー」

わふふ? わふ? わふつふ……と、呟き続けるクドを抱えて、僕は撤退した。

葉留佳さん

には申し訳ないけど、来ヶ谷さんとは別の意味で、クドが三日ともちそうにない。

「そういうことでしたら、構いません」

中庭の木陰でいつものように本を読んでいた、クラスメイトの西園美魚さん^{にしそのみお}の返答は、簡潔かつ僕達にとつて喜ばしいものだつた。クドとは時折、本の貸し借りをしているらしい。

「わふつ！ 本当ですか、西園さん！」

葉留佳さんの悪戯から正気に返つていたクドが、文字通り飛び上がる。

「はい。わたしの方は問題ありません。今のわたしの部屋にはルームメイトはいませんので」全身で喜びを表しているクドに対し、あくまで淡々と答える西園さんだつた。

「それは助かるよ、ありがとう西園さん！」

「いえ、それほどのことでもありませんから……。それより、直枝さんにも喜んでいただけると、なんだかくすぐつたいですね……」

「大丈夫ですよ、直枝さん」

そんな僕に、にこにこと笑みを浮かべてクド。

「なぜなら、私も十分に舞い上がっているのです。わふー！」

そんな僕らを、西園さんはまるで教え子を見守る教師のような眼差しで見守ってくれる。

「ところで……」

と、一息おいて西園さん。

その瞬間、メガネをかけていないはずなのに、西園さんの眼が日の光を反射して光つた——
ような気がした。

「つかぬことをお訊きしますが、能美さんは十二支のうち、どれがお好きですか？」
「十二支ですか？ それはもちろん、戌イヌです！」

「なんで十二支？」と首を傾げる僕の横で、クドがはきはきと答える。

「戌……ですか？」

対して、何故か少し残念そうな様子で、西園さん。

「その他の十二支はどうでしよう？ 例えば、そう……寅トラや、卯ウサギは好きではありませんか？」

「虎や兎ですか？ 嫌いではないですけど……」

困惑した様子で、クドがそう答える。ちなみに僕にも、西園さんの質問する意図がさっぱり
わからない。西園さんに縁の深そうな動物であるのなら、名前にあるとおり魚に近い辰（竜、
あるいはタツノオトシゴ）であればまだわかるのだけれど……。

「そうですか。ちなみに私の部屋には虎と兎の薄い本が結構あります。もしよければ——」
「西園さん、ストップ！」

ようやく意味がわかつた僕は、そこで止めに入った。

「直枝さん？」

不思議そうに、クドが首を傾げる。



「人の話を遮るのは、少々不作法ですよ。直枝さん」

西園さんがぴしやりとそういうけど、今はそういう問題じゃない。

「その薄い本をクドに読ませて、西園さんはクドをどこの世界にいざなうつもりなのさ？」
比喩を用いてきた西園さんに対し、こちらもちよつとだけ捻つてそう訊いてみる。

「それは……もちろん……」

西園さんは、表情を変えなかつた。けれど、一瞬だけ頬を赤くする。

「話せないんだよね？」

不思議そうに僕らを交互に見るクドを横目に、僕は西園さんにそう言つた。

「直枝さんにはご理解いただけますでしようか。こう、なにも知らない無垢な——」

「いやそれ、来ヶ谷さんと変わらないからね。西園さん」

その一言が効いたらしい。西園さんが、鋭く息をのむ。

「というわけでごめんクド、この件は無かつたことになつたよ」

「えーと……わけがわからないですーー！」

絶句したままの西園さんを困惑しつつも心配しているクドを押し出すように、僕達は中庭を後にした。

「あ、直枝さん。ルームメイトが決まつたら教えて下さい」

小さいけれど、はつきりとした西園さんの声が、僕の耳に届く。

……なんだかんだ言つて、みんなクドのことを心配してくれている。それはとても、嬉しいことだつた。

「結局、るーむめいとは見つかりませんでしたね……」

夕暮れ時、僕の横を歩いていたクドは、ぽつりとそう呟いた。

「そう、だね……」

他にルームメイト候補の人が思い浮かばない僕も、やや声が落ち込んでいるのを自覚する。

「まだ……どなたかいらっしやるでしようか」

と、クド。

「あとは僕とか？」

半分自棄、半分冗談で、そんなことを言つてみる。

「え、えええ？ 直枝さんですか？」

髪を逆立てんばかりに——そして顔を真っ赤にしてクドが驚くので、僕は慌てて手を振り、

「冗談だよ、冗談。……クド？」

言つてはいる途中で気が付いた。クドが半分本気になつていてることに。

それはなんというか、胸が甘酸っぱくなる感じだつた。

「……あの。ほら、クド」

「あ、冗談……ですよね。わふー」

「ちょつと残念そうに、クド。

「とりあえず、最初に貼ったポスターの様子を見に行こうか」「そうですね……」

ルームメイト募集にあたり、女子寮の寮長から許可をもらつた際に、僕らはポスターを一枚もらつていた。そのポスターには紙のポケットがついていて、そこにクドの連絡先が入つた名刺サイズのカードが何枚か納められるようになつていたのだ。

このカードが無くなつてているか、あるいは少なくなつていれば脈があるということなんだけど――。

「あ……」

クドが、息をのんだ。

「うん？」

目をこらすと、僕らが張り付けた掲示板のそばに誰かが立つている。ここからだと、逆光で

顔がよく見えないけど、そのシルエットは――。

「二木……さん？」

間違いない。校内の風紀委員にして、その取り締まりが一番厳しいと評判の二木佳奈多さん

だつた。僕や鈴、小毬さんや真人、そして葉留佳さんがその取り締まりの対象になつたことがある。——その回数は、悪戯好きで通つてゐる葉留佳さんが圧倒的であつたけれど。

「これ、まだ有効？」

いきなりそう言う二木さんの人差し指と中指の間に挟まれていたものは、先ほど僕が言つたクドの連絡先が書かれたカードそのものだつた。

「うん、有効だけど……」

事情がよく飲み込めなくて、しどろもどろにそう言う。

けれど二木さんはそんな僕など興味がないとでもいつた感じで、

「ルームメイトは諸事情でいないわ。荷物はすぐ動けるよう、いつでも段ボールに積められるようになつてゐる。他になにか問題はある？」

「……いや、特にないけれど」

一応クドを見ながら、そう言う。クドも同じなのだろう。大きく頷くだけだつた。

そんな僕らを確認して、二木さんは一度だけ黙つて頷くと、

「二木佳奈多よ。風紀委員長をやつてゐるわ。よろしくね」

そう言つて、クドへ握手をするように手をさしのべた。

「え、ええと……はい！ よろしくお願ひいたします！」

クドが勢いよく頭を下げ、その手を握る。

かくして、意外な形でクドのルームメイトは決まつたのだつた。

「ほう、そうかそうか。二木女史で決まつたか」

「その夜の学生食堂で、もずくの天ぷらに手をつけつつ、来ヶ谷さんは満足げにそう頷いた。

「まあ、なるべくしてなつたというところだろうな」

僕らにとつては偶然以外のなにものでもなかつたけれど、来ヶ谷さんによつてはある程度予想できた結末らしい。でもここまでくると、慧眼けいがんを通り越して超能力かなにかなのかと思つてしまふ僕だつた。

「西園女史は、どう思うかね？」

「そうですね、ありだと思います」

話を振られた西園さんも、持つていたサンドイッチを丁寧に置いてから、同意する。

「ある程度仲が良くなつてからルームメイトになるというが無難なのかもしれません、こういつた新たな出会いも、たまには必要でしよう」

なるほど。西園さんらしい含蓄のある言葉だつた。

「そうかなー、あの風紀委員長ですヨ？」

一方の葉留佳さんは、ナポリタンをフォークに絡ませたまま、すごく複雑な顔をしていた。

こちらは普段から追う追われるの関係だからだろう。もつとも、その原因は葉留佳さんの悪戯にあるのだけれど。

あと、どうでもいいことかもしけないけれど、フォーラークに絡ませすぎたせいでナポリタンが大変なことになつていた。

「うーん、校内のことについては厳しいところもあるけれど、いい人なんじやないかな？」ミックス定食のエビフライを丁寧に切つていた手を止めて、小毬さんがそうフォローする。けれど、葉留佳さんの顔は晴れなかつた。たぶん葉留佳さんには葉留佳さんなりの事情があるのだろう。

「ルームメイトが決まつてよかつたな、クド」

我関せずといった様子に見えた鈴が、カツプゼリーを食べながらぼそつとそう言う。

「はい！ みなさん、ありがとうございますっ！」

そう言つて、深く頭を下げるクドだつた。

「おつと」

被つっていた帽子が月見そばの上に落ちそになつたので、僕はそれをキヤツチする。

「わふつ。直枝さん、ありがとうございます！」

「いえいえ、どういたしまして」

「で、理樹自身はどうなのだ？」

と、おにぎりを静かに食べていた謙吾が訊く。

「うーん、あんまり風紀委員長とは話したことがないからなんともいえないけれど……もしあの場でずっと待っていたのだとしたら、誠実な人だよね」

「あるいはヒンズースクワットで太腿とふくらはぎの筋肉を鍛えていたのかもな！」

と、餅を三つも入れた力うどんをすすりながら、真人。

「いや、それは絶対にないから」

そんな風紀委員長がいたら、筋肉恐怖政治体制を敷きそうで怖いことこの上ない。……真人だつたら、喜んでついて行きそうだけど。

「ま、どちらにしろ能美のルームメイトが決まってよかつたな」と、焼きそばパンをほおばつていた恭介が締めくくつて、僕らは食事を再開した。
それにしても――。

みんなより先に食べ終えた僕は、食後のコーヒーを飲みながら思う。二木さんなら、クドとうまくやれるんじやないだろうか。全く根拠はないのだけれど、そんな気がする僕だつた。

翌日のお昼休み。

「ヘイ、ボーイズアンドガールズ！ チャンバラタイムのお時間ですヨ！」

そう言つて飛び込んできたのは、やはりというかなんというか、葉留佳さんだつた。

教室はまだ学食などに出かけている生徒が戻りきつていない、やや閑散としている時間帯だ。

僕は早々に食べ終えていたクドや小毬さん、西園さんと談笑していたところだつた。

「タイムと時間が被つてゐるよ、葉留佳さん」

「そんなの気にしちゃ駄目だぞ理樹くん！」

こちらの話をまるつきり聞かず、思いつきり僕の背中を叩く葉留佳さん。

「はいこれ、理樹くん、拝領拝領」

「いや、渡す側がそう言つちやいけないんじやないかな……」

僕のつっこみなどお構いなしで、葉留佳さんは新聞紙とセロハンテープを手渡してくる。

「ええと……どうするの、これ」

「どうするもこうするもないのつ！ 丸めて！ セロテープで止めて！ 振り回したら！ は

い新聞紙ブレードのできあがり！ つかー！ 今宵の新聞紙ブレードは血に飢えておる一つ！」

振り回すというのは工程には含まれないと思う。というか、すごく物騒な新聞紙だつた。
「いいかボーアズアンドガールズ！ 耳をかつぱじつてよく聞けー！ ——つて、いつも思う
んだけど『ぱじつて』は、ほじつてのことだと思うけど『かつ』つてナニ？ 気合い？」

いや、そんなことを言われてもすごく困る。

まあそれはともかく、葉留佳さんが言うルールを要約すると、こうなる。

攻撃側は、標的に『かたじけのうござる』と宣言し、攻撃。その攻撃が当たった場合、標的は『無念なり』を叫ばなければならぬらしい。

毎度毎度思うのだけれど、葉留佳さんのそういう遊びに関する創造性は、恭介に迫るものがあると思う。

「ふむ、端的に言えば限定的なチャンバラだな」

葉留佳さんよりあとに教室に入ってきたのに、誰よりも——おそらく、考えついた葉留佳さんよりも——ルールを理解した来ヶ谷さんが、そう呟いた。

「さあそういうわけで我が新聞紙ブレードの鎧になりたいやつは名乗り出ろーー！」

ノリツノリでそう叫ぶ葉留佳さんの新聞紙は、金属でできているらしい。

「よーし、それじゃこっちからいっしゃうぞー！　まずは——」

「かたじけのうござる」

一瞬、周囲が静寂に包まれた。

いつの間にか背後を取っていた西園さんが、葉留佳さんに一撃を打ちこんでいたからだ。
「な、なにーつ？」

信じられないよう後頭部を押されて、葉留佳さん。

「ルールはどうしましたか？」

そんなことはおかまいなしといつた様子で、ゆらりと新聞紙ブレードを揺らし、西園さんが

そう指摘する。

「む、無念なり〜！」

自分で言うつもりはなかつたのか、悔しそうな葉留佳さんだつた。

「お、おかしいです……！」

クドがごくりとのどを鳴らす。

「西園さん、いまのまままで私のそばにいたはずなのです。なのに——！」

一瞬で反対側に回り込んでいた、と。

時々思うのだけれど、西園さんも結構謎な人だと思う。

「むきー！ こうなつたらみおちんに反撃だ——」

「かたじけのうござる」

葉留佳さんがすべてを言い終わる前に、またもや後ろに回つた西園さんが、新聞紙ブレードを一閃させていた。

「む、無念なり〜！」

再び悔しそうに、葉留佳さんが叫ぶ。

「おーのーれーみおちん！ ——と、ここでなにか能書きを垂れる前に先制攻撃！ かたじけのうござるつ！」

そう言つてゐる時点で先制攻撃じやないのにと思つてゐるうちに、葉留佳さんは一撃を繰り

出し——その切つ先は、空を斬っていた。

「あ、あれ？」

「かたじけのうござる」

もうここまで来ると名人芸と言つた方がいいのかもしれない。とにかく、みたび背後を取つた西園さんは葉留佳さんに一太刀浴びせかけていた。

「むむむ、無念なり！」

本当に無念そうに、葉留佳さんがそう呻く。

まあ、なんというか……。

「クド、とりあえずあつちには関わらない方がいいよ——クド？」

軽い気持ちでクドの方に首だけで振り向きかけた僕は、慌てて全身で振り向き直した。

「ふつふつふつふつふ……」

僕のリアクションを見て、我が意を得たりとばかりに、クドが怪しげな笑い声をあげる。「に、二刀流!?」

これは……ちょっと予想外だつた。

「そうなのです。新聞紙ブレードは軽いですから、こういうことができるのですつ。私のように体格が小さくてりーちが短い場合は、手数で勝負なのですつ！」

「な、なるほどつ！」

すごい、わりと説得力がある。

「二刀流……能美さんが両刀遣い……ぼつ」

そんなクドを見て、ものすごい想像力を働かせてしまつてゐる西園さんだつた。

「西園女史——君はつ、なんてものをつ、連想する……！」

そんなことを言う来ヶ谷さんも身悶えていた。おそらく、思いつきり想像してしまつたのだろう。

「はるちゃん、二刀流と両刀遣いつて、なにか違うの？」

小毬さんが、思いつきり首を傾げていた。

「いやあ……こまりんは知らなくていいんじゃないかな、コレ」

葉留佳さんが、悶絶し続けるふたりを呆れ果てた目で見ながら、そう答える。

「それではいくのです！ 直枝さん、かたじけのうござるつ！」

あ、うん。いいけど——つて、想像以上に速い！

一太刀くらいはわざと受けようかと考えていた僕だつたけれど、つい反射的に自分の新聞紙ブレードを真横に構えて、クドの二刀を同時に受け止めてしまう。けれど、クドは受け止められると判断するやいなや、一刀を引いて別の角度から攻撃を仕掛けてきた。

「かたじけのうござるなのですっ！」

これには本気でよけきれず、綺麗な一撃をもらう僕。

「無念なり！」

「わふー！ 直枝さんから一本とれました！」

「すごく嬉しかったのだろう。クドが飛び上がる。

「かたじけのうござる」

そしてその瞬間を狙い澄ましたかのように、真っ正面から来ヶ谷さんの一撃が決まる。

「わ、わふっ！ 無念なりくなのです！」

「返す刀で少年にもかたじけのうござる」

——！ 先ほどのクドの一撃も速かつたけど、来ヶ谷さんは目で追いきれな——。

「む、無念なり……」

そんな思考すら追い越して、来ヶ谷さんの新聞紙ブレードが僕に直撃していた。
そこからは、わりと乱戦になつた。

クドは二刀流を巧みに操り、西園さんは先ほど葉留佳さんにお見舞いしたように、気配を消して相手の背後を強襲するスタイルを崩さず、葉留佳さんは目に付くものに片つ端から斬りかかつてまわり、来ヶ谷さんは気の向くままといった様子で相手を討ち取つていく。

僕はとすると、ひたすら防戦に徹して、仕掛けられたときは徹底的に避けて相手の隙を探り、そこを反撃する戦法をとつてそこそこのスコアを稼いでいた。

それから少し経つて——。

「結構いい運動になつたね」

襟元を緩めながら、僕。

僕は割と上位の方、西園さんとどつこいどつこいという感じで、その後に葉留佳さん、そしてクドと続く。

そして、誰からも一撃をもらわなかつたのは当然というかなんというか……来ヶ谷さんだつた。

そして、ワーストと言えば――。

「あああああう！」

そう、特に戦法というものを持たず、ただひたすらおろおろしていた――。

「かたじけのうござる」

来ヶ谷さんの連撃が七発、小毬さんに炸裂した。

「あうつ、あうつ、あうつ、あうつ、あうつ、あうつ、あうつ……む、無念なり！」

小毬さんが、悲鳴（だと思う。たぶん）をあげる。

「かたじけのうござる」

回避も防御も取らず、ただふらふらしているだけの小毬さんに、来ヶ谷さんはさらに鋭い連撃を叩きこむ。

「ああああああ、あうつ……むむ、無念なり！」

「ふむ……？」

そこで、来ヶ谷さんの連撃が一旦止まつた。そして、「かじけのうござる」どこか緻密な連撃を放つ。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あうつ……むむむ、無念なり！」えーと……。

「——うむ！」

どこか恍惚とした様子で、来ヶ谷さん。察するに、狙つてやつたのだろう。

「涎が出ていますよ、来ヶ谷さん」

来ヶ谷さんと対照的に、冷静な西園さんだつた。
「なるほど、あの早さで連打するとこまりんがエーロティックな悲鳴を上げるようになるわけですね！」

真似しようにも全然できないけど！ と意味もなくガツツポーズを取つて葉留佳さんがそう言う。

「うむ、ではこの連撃を小毬君エクスタシーとでも命名しよう」

「うわーんっ！ 私エクスターじゃないいいいっ！」

割と本気で悲鳴をあげる小毬さんだつた。



そこで、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り響く。

「これで終わりだね。みんなお疲れさま。クド、疲れてない……クド？」
「わふー……む、むねんなりなのですー……」
クドは無念なりドランカーになつていた。

——さて。

先ほどのチャンバラで、確信したことがひとつある。

クドはその見た目の雰囲気に反して、結構運動ができる。

ならば、今僕らがしようとしていることに、うつてつけなのでは……。
そう思つた僕は、クドに相談をもちかけることにした。

「ねえクド、相談があるんだけど

放課後の教室。クラスのみんなが教室の外に出て行く中、帰り支度をしていたクドに、
声をかける。

「はい、なんでしょう！」

「野球、やつてみない？」

「わふつ！ や、野球ですか？ 一体どうして……」

クドの疑問も当然だろう。だから、僕は今みんなと一緒に野球をやっていること、メンバーがあとひとり足りないこと、そしてそのチーム名が、リトルバスターズであることを説明した。

「リトル……バスターズ……」

その名前を反芻するかのように、クドがそう呟く。

「うん。メンバーは、恭介、鈴、真人、謙吾——はまあ、剣道部の練習であまり参加しないけど——、小毬さん、葉留佳さん、来ヶ谷さん、マネージャーの西園さんに、僕。つまり、全員が顔見知り變成になるね」

「わふー……放課後皆さんのが教室からいなくなっていたのは、それが原因だつたのですね」

納得するかのように、頷くクドだつた。

「ごめんね。今まで隠している形になつちやつて」

「いえ、そんなことはないのです」

首をぶんぶんと横に振つて、クドはそう言つてくれる。

「それに、他ならぬ直枝さんのお願いですしちゃう」

顔を上げて、クドは言う。

「わ、私でよければ——お願ひしますなのですつ」

「よし、それじゃあ行こう」

そう言つて、僕はクドの手を取る。

「どこへ行くのですか？」

「グラウンド。みんなそこで練習しているんだ」
なにせ、みんなの意見も聞かなければいけない。けれど、たぶん大丈夫だという自信が僕にはあつた。

「あのなあ、理樹」

クドの姿を見るなり、真人は僕の肩に手を回して諭すように話しかけてきた。

「オレたちは確かにメンバーが必要だけどよ、まさか理樹、お前はクー公が新たなメンバーだつて言うんじやねえだろうな？」

「僕は、そのつもりなんだけど……」

「そのつもりつて——筋肉とはほど遠いじやねえか、クー公はどうするんだよ、こんな女ばつかのチームでよ」

確かに真人の言うとおりなのかもしれない。

というか、筋肉質なクドというのは、あまり想像したくないものだつた。

『へいゆー！ ちよつとこの大胸筋を見ていくのです。わふー！』

……うん、ものすごい想像をしてしまつた。今はしやべり方が普通だつたけど、筋肉質なク

ドだときつと真人みたいに「筋肉筋肉」とか言い出すだろう。いや、普段の口調と合わせれば

『ぐつどもーにんえぶりわん！ 今日も私の僧帽筋を見ていけなのです！ わつふるわつふる！』
……あれ？ マッスルとクドの『わふー』を組み合わせたら、案外可愛くなつた？

「……直枝さん？」

「うん、そうだね。筋肉をつけたクドもありかもしれない——つてなにを言つているんだ、僕
はっ！」

「わふつ!? き、筋肉がどうかされたんですかつ！」

……あ。

どうも、深く考え込みすぎていたらしい。

気が付けば、僕を心配していたのか、すぐそばにクドがいた。

「ごめん、ちょっと変な想像をしていたんだ。やつぱりクドに筋肉はつける必要がないよ」

「いや、クー公はもうちょっと筋肉をつけたほうがいいんじやね？」

「はい、井ノ原さんの言うとおり、筋肉はもうちょっとつけたいのです！」

当の本人が、乗り気だつた。

いやまあ、真人的な意味ではないんだろうけど。

「いや、まかりならん」

そこで横からわり込んできたのは、当然というかなんというか来ヶ谷さんだつた。

「いいかね能美女史、君はそのまでいてくれればそれでいいんだ」「わふー、それはどういう意味でしようか、来ヶ谷さん」

口の先を少し尖らせてそう言つたクドに来ヶ谷さんは返答せず、沈思黙考し……突如、にへらと笑つた。その様子はなんというかその、すごく怖い。

「わふ？ 来ヶ谷さん？」

「ごめん、話題をふつた僕が言うのもなんだけど、話を元に戻そう」

「ああ、そうだな。……なんだつけか？」

さすが真人、搖るぎなかつた。

「話は聞いていたが……」

恭介が、僕とクドを交互に見ながら、まとめてくれる。

「能美は、スポーツをしたことがあるのか？」

それは、クド本人からちゃんと聞いている。

「クド、みんなに昔やつていたスポーツを教えてあげてくれる？」

だから僕は自信たっぷりにそう言つたのだつた。

「わかりました！」

クドの瞳が、楽しげに輝く。

「えつとですね。まずはテニスにセパタクロー——」

「セパタクロー？なんかカッコイイ名前じゃねえか。武器か？かけ声か？必殺技か？」
たぶんクローの部分に反応したのだろう。妙にハツスルした様子で真人が食いついてくる。

「いや、スポーツだつて言つたよね」

「んだよ、武器や必殺技っぽいスポーツがあつたつていいだろ？……んで、クー公。セパタ
クローってなんだ？」

「わかりやすくいうと、足で行うバレーボールみたいなものです。東南アジアの各地で行われ
ているんですよー」

と、丁寧に説明してくれるクドだつた。

「そのほかにも、バトミントン、スカッシュ、フライングディスク、ゲートボール、カーリン
グ、インディアカ、ペタンクなどです！」

「インディアカ？ムチの似合う考古学者さん？」

今度は小毬さんがそんなことを言う。

「それを言うならインディアナジやないかな……」

略称というか、愛称にしたら一緒になるんだろうけど。

「インディアカとは、ドイツで行われる羽根突きみたいなスポーツです。テニスコートみたい
なところでおこなつて、羽子板ではなく手を使って羽を突くんですけど——」

羽根突きを「存じのみなさんだと、ちょっと奇妙に見えるかもしないのです。と、クド。

「なるほどー。おもしろそうだねー」

それだつたら、みんなでできるしね。と、なんだか本氣で習いたそうな雰囲気を漂わせる小説さんだつた。

「最後のペタンクは余裕でわかるね。クド公はペタンク！」

と、葉留佳さんが混ぜつ返す。

「だ、だ、誰がペつたんこですかーつ！」

く、クドが過剰反応した!?

「ペタンクとはそういう意味ではなくて、フランスで行われるスポーツなのです。目標を定めて、そこに金属のボールを投げ、その近さを競うものなのです。けつしてペタンコなにかを競いあうわけではないのです！」

ふんふんといった擬音が似合う表情を浮かべながらも、ちゃんと説明をするクドだつた。
「とにかく、能美がスポーツに堪能だということはわかつた……つていうかすげー量に俺がすげー状態だ」

と、眉間にしわを寄せて恭介。

「あ、あのー。一応申し上げますが、これ全部おじいさまとおつきあいする感じでしていたものなんんですけど……」



本格的というわけではないのです。とクドが念を押す。

「それでもこれだけの種類をやつてきていたんだ。たいしたものさ」確かに、事前に聞いていた僕もそう思う。

「それじや、軽く動いてもらつて適性を見せてもらおう。能美——」そう言つて、恭介はクドにグローブを渡す。

「これがグローブだ。使い方はわかるか？」

「いえ、わかりませんが……今までの経験からするとこれは——！」

クドはきりつとした顔で、グローブを胸に抱いた。

そして、きりつとした顔のままで、それを足に履いた。

「……うわー」

真人がそんな声を漏らす。

「わふー！　な、なんだかこれ歩きにくいいのですー！　片方だけだからでしようかーつ！」

そのままグラウンドを走り出すクドに、僕ら一同言葉もなかつた。

「あー、うん。戻つてこい、能美」

と、再び（そしておそらく別の意味で）眉間にしわを寄せて、恭介。

「理樹。俺が言いたいこと、わかるな？」

「う、うん……」

「なら、どうすればいいと思う？」

どうしよう。クドがここまで野球に疎いとは思つていなかつた。
けれど、あれだけのスポーツを、たしなむ程度とはいえこなしてはいるのだから、素養はある
のだろう。ならば——。

「とりあえず、キヤツチボールからはじめてみたらどうかな？」

僕が苦し紛れに言つた提案は、予想外の収穫を得ることになつた。

「えいつ」

「わふつ」

「とうつ！」

「わふつ！」

「おりやーー！」

「わふーー！」

僕、恭介、そして真人が投げた色々な軌道のボールを、クドは落下地点をしつかりとわり出
して、危なげなくキヤツチしていた。

とにかく、どんなボールでもクドにかかればキヤツチできたのだ。

「これは……一種の才能だな」

続いてリトルバスターーズの女性陣が、好奇心にかられてありとあらゆる方向にボールを投げていき、それらをことごとくキャッチするクドを眺めながら、恭介はそう言つた。

「理樹、こいつは良い掘り出し物だつたようだぞ……！」

「そう言つてもらえると、嬉しいよ」

僕が、ではない。その才能を買われたクドが、だ。

「せいやー！」

「わふー！　——わふー!?」

ほぼ真上に放り投げたボールをクドが追いかけ、投げた張本人の葉留佳さんと衝突する。

「よし、それじやさつそく練習開始だ！」

恭介の号令の元、リトルバスターーズの面々が練習を開始した。

「よし、今日はこれくらいにしよう

クドにとつては初めてだからか、今日の練習は、比較的早めに終わつた。

「みんなー、お疲れさまー！」

小毬さんが疲れを感じさせない声で、そう言う。

「クドは初めてだつたけど、大丈夫だつた？」「はい、楽しかつたのです！」
はきはきと答えるクドだつた。

「ところで直枝さん、このあとお時間はありますか？」

「うん、あるけれど……いつたいどうしたの？」

僕がそう訊くと、クドはちょっとだけ声を潜めて、

「家具をですね。取りに行きたいのです」

「ああそつか。クドの部屋、家具が少し足りなかつたものね」

あの殺風景な部屋を思い出して、僕は深く頷いた。

「でも、使つていらない家具なんてどこにあるの？」

僕と真人の場合は、卒業していった生徒の家具をお下がりでもらい、そのまま使つてているの
だけれど、クドの部屋にはもともとそういういつたものはなかつた。

「それですね、寮長さんに相談したところ、家具部の倉庫から好きなものを持って行つて良いと許可をいただきましたのです」

「か、家具部？」

「はい。なんでも日曜大工部からのれんわけを致しまして、家具だけを作るようになつた部活
だそうです」

なんというか、不思議な部活もあるものだなーと思つてしまふ僕だつた。もつとも、端から見れば僕達リトルバスターZもそのような感じなのかもしれない。どちらにしても、倉庫をもうえるほど作つてゐるのだから、すごい話だつた。

「ただその家具部の倉庫、学校の地下の奥にあるそうですので……」
 「そうなんだ。でもそれだと、僕ひとりだけじやちょっと厳しいかな」
 自分で言うのも哀しいけれど、僕ひとりだと大きな家具はとても運べそうにない。例え、クドと一緒に運んだとしても、だ。

「これは応援が必要かな？」

僕がそう話を振ると、クドは大きく頷いて、

「そうですね。ダンジョン探索には、テセウスが必須なのです！」

テセウスとは、古代ギリシャはアテナイ（アテネ）の王様で、迷宮探索の英雄として有名だ。もつとも、日本では敵役のミノタウルスの方がずっと有名だけれど、「わかつた。手伝えそうな人を探してくるから、ちょっと待つててね」「では、私も色々と準備してくるのです！」

そういうことで、僕とクドはいつたんわかることにしたのだつた。
 さて、僕の知り合いの中で、こういつたことを手伝ってくれるのは……。

「お待たせ」

助つ人を伴つて待ち合わせの場所に戻ると、先に戻つていたクドは目を丸くして、
「テセウスがてんこ盛りでやつてきましたー!?」

素つ頓狂な声で、そんなことを言つた。まあ、確かにそうとしか言いようがないだろうと思

う。

何故なら、声をかけたら部活がある謙吾と所在のしれない恭介以外のリトルバスターズのメンバー全員が来てくれたのだから。

「またまには、こういうのも良かろう」

と、来ヶ谷さん。

「クーちゃんが、困つてているみたいだしね」

小毬さんがのいつもの笑顔を浮かべてそう言う。

「困つたときは、お互い様ですから」

こちらもいつも通りの西園さんだつた。

「ヒヤツホー！ お宝探しですヨ！」

そして葉留佳さんも、いつもの通りなにかが間違つていた。

「クドには、同室の時に世話になつたから手伝いたい」

と、鈴。

「オレの筋肉、しつかり見ておけよ？」

どつちかというと見せることより使うことに専念してほしい真人だつた。

「そんで理樹よ、オレ達はどこに行きやいいんだ？」

……あ。それは僕もまだ把握していない。

「ええと……クド？」

「校舎の地下——こちらの階段からなのです」

そう言つてクドは、どこからともなく（マントに隠していたのだろうか）大きな鍵を取り出した。

「うつわ～……本格的ですネ」

と、葉留佳さん。なんというか、大きなといつてもひとまわりとかふたまわりとか、そういう常識的な大きさではない。ロールプレイングゲームに出てきそうな巨大な鍵だつた。

「この鍵にみあう扉だと、そうとう大きそうだねー」と、小毬さん。

「でかい扉とくりや、筋肉で開けるのが基本だな！ クー公、早く案内してくれ！」

「はい、こっちなのです！」

扉を見たいと言うより、それを筋肉でこじ開けたいという想いが丸出しの真人に促され、ク

ドがみんなを導いていく。

それで、向かつた先は――。

「なんか、普通の扉なのです」

拍子抜けした様子で、クドがぽつりと呟いた。

「本当に、普通だねえ」

困った笑顔を浮かべて、小毬さん。

「鍵穴も、普通の大きさのようだが」と、来ヶ谷さんが指摘する。

「いきなり難問なのです！」

「う、うん……まさか入るのに苦労するとは思わなかつたね……」

どんな意図で、寮長はこんな巨大な鍵を僕たちに渡したのだろう？

「へつ、いきなりオレの出番がやつてくるとはな……」

みんなが考えこむ中、普通の扉だつたからさぞかしがつかりしただらうと思つていた真人が、ゆらりと扉の前に立つ。

「理樹、その鍵を貸してくれ」

「うん、いいけど……」

クドから借りていた鍵を渡す。すると真人はその鍵を大きく一回転させると、

「こういうときはな……おりやあああああ！」

その鍵を槍のよう抱えて、扉に突撃したのだつた。
激しくも、鈍い音が辺りに響く。

「意外と固てーな……」

「固てーな、じやないよつ！ 万一壊れちゃつたらどうするの？」

「いや、勢いで開くと思つてよ」

幸いにして扉はびくともしなかつたけど、そもそも勢いをつけても鍵穴に入るものじやない
と思う。

「おかしいな……入ると思つたんだけどなー」

「こいつアホだ！」

毎度のことながら、的確すぎる鈴だつた。

「うーん、扉の方に仕掛けがあるのかな？」
と、小毬さんが首を傾げる。

「今の井ノ原さんの突撃でも壊れなかつたから、普通の扉よりずつと頑丈なのです」

と、クド。

「でも扉の見た目は普通だよね」

「わかつた！ そのでかい鍵で扉をタコ殴りにして開けるんですヨ！」

真人と思考回路が変わらない葉留佳さんだつた。

「わふ！ それはちょっと野蛮な気がするのです」

「どうかそれだと扉の役割が一回こつきりになつちやうよね。それはちょっと……勿体ないんじやないかな？」

と、鋭い指摘をとばす小毬さんだつた。確かに、そのたびに扉を補修するとは、とてもじやないけど考えにくい。

「触つた限りでは、扉の方には細工の類はないな」

と、扉を一瞥して来ヶ谷さん。こういつた分析にはプロ顔負けの才能を發揮する来ヶ谷さんが言うのだから、まず間違いないのだろう。

「とするとやっぱり鍵の方カナ？」

葉留佳さんがクドの持つ鍵を振りまわしたげに見つめながら、そう言う。

「そうですね……持ち手に、変なでつぱりはあるのですけど——」

「うん？ ちょっとまつて。クーちゃん、その鍵貸してくれるかな？」

「あ、はい」

小毬さんに言われて、クドが鍵を渡す。

「うーん……これかな？」

そう言つて、鍵の持ち手の方をいじる。すると驚くべきことに後ろの方がかたつと開き、中

から常識的なサイズの鍵が出てきた。

「おおー、さすがは小毬さん……」

思わず、そう賞賛してしまう。

「どうかな？ どつちにしてもありがとう、理樹君」
どこか嬉しそうな小毬さんだつた。

「それでは、おーぶんせさみ！ なのですっ」

クドが鍵を差しこむ。

すると、真人の突撃にびくともしなかつた扉は、なめらかに開いた。
奥の方を、のぞき込んでみると、そこは少し狭い通路だつた。

そしてその先には、今僕らが開けたのと同じ形の扉がある。

「なんか……雰囲気的に先が長そうなのです……」

通路をのぞき込みながら、クドが不安げにそう呟く。

「大丈夫、みんながいるからね」

クドの隣に立つて、僕はそう言つた。

「そうでした……そうなのです」

「さてと——」
クドが僕の手をぎゅっと握つた。その不安と信頼に応えるように、僕はそつと手を握り返す。

クドの手を握つたまま、奥の扉の前に立つたときだつた。

『かくして君たちは家具部の迷宮へと至る扉の前に立つた。君たちは、迷宮を先に進んでもいいし、あるいは装備を確認するため校舎に戻つてもいい』

すぐそばで聞こえたその声に、僕は視線を上へと向ける。

すると、狭い通路の左右の壁に片手と両足を突つ張らせた恭介が、天井に張り付いていた。

「……恭介、なにをやつているのさ」

今まで、どこを探してもいなかつたというのに……。つていうか、最初から中にいたことは指摘してもいいのだろうか。

「ナレーターだ。俺の存在は気にするな」

マイク片手にウインクしてそう言うけど、無茶な話だつた。あと、暗いというのにサングラスをかけているのは……恭介のことだ『カッコイイから』なんだろう。

『どうやら君たちの準備は万端のようだ。さあ、家具部の迷宮に挑みたまえ！』

とりあえず気にするなと言うので、扉を開けてみんなで進むことにする。

そして全員が扉をくぐつたところでスタッフという音が響いたので振り向くと、恭介が普通に歩いてついてきていた。

「えーと——」

「だから、俺の存在は気にするなつて」

「あ、うん……」

だから、無茶な話だつて。そう言い返したい僕だつた。

扉を開いて先に進んだ僕らを待つていたものは、縦横無尽に走る狭い通路だつた。壁と天井にはなにに使つているのかまつたくわからない様々なパイプが走つてしたり、照明はほの暗い上に一部が消えていたりと、とても学校の施設には見えない様相となつてゐる。

「なんか……本格的だねえ」

ぽつりと、小毬さんがそう言つた。

「うん。校舎の地下が本格的なダンジョンつて、なんかおかしな氣がするけどね」
恭介から貸してもらつたごつい懐中電灯のチェックをしながら、そう答える。

「なんだか、思つていた以上に不気味ですー」

クドが、ちよつとだけ怯えた口調でそう言う。小毬さんも同じような感じらしく、クドとそつと肩を寄せ合つていた。

一方、この状況を楽しんでいる人もいる。

「ヒヤツハー！ ダンジョンだー！」

言うまでもないかもしけないけど、声の主は葉留佳さんだつた。



「ダンジョンと言えばトラップ！ 槍が降つたり天井が落ちたり、突如後ろから丸い岩が転がつてきたり！ そういえば、あの丸い岩つて作るのが結構手間な気がしない？ それに転がつていつた後、どうやって回収しているんですかネ？」

「いやまあ……」

「言いたいことはわかるけど、僕としては遭遇したくはない。」

「ま、それにことごとく引っかかるのがダンジョン探索の醍醐味なんですよ」

「いや、ひつかかっちゃダメじやないかな……」

特に今葉留佳さんが言つたものは、どれも命にかかるトラップのような気がする。

「でもこれじや、行きも帰りも迷いそうだねえ……」

と、心配そうに小毬さん。

「そこはご安心くださいなのです！」

自信たっぷりに、クドがそう言つた。そしてスカートのポケットから円柱状にまとめられた毛糸の玉を取り出す。

「クド、その毛糸の玉はなに？」

「これはですね、アリアドネの赤い糸にあやかつて用意した毛糸なのです」と、誇らしげにそれを掲げてクド。

「これを入り口に結びつけておいて、少しずつ毛糸を伸ばしていくば、帰りにはそれをたどつ

て迷うことなく帰ることができるのですよ」

「なるほど……」

原理は単純だけど、その分有効そうだつた。

「なので、ちょっと結びつけてくるのです」

そう言つて、クドは毛糸の玉を抱えてぱたぱたと駆けていつた。ややあつて——。

「おまたせしました。最初の扉のドアノブに結びつけてきたのです！」

全速力で戻ってきたのだろう、頬を上気させて戻つてくる。

「今更いうことじやないんだけど、進む前にくくり付けておけばよかつたんじやない？」

クド

誰もが思つていた指摘を、葉留佳さんがした。

言われた方のクドはと、数秒ほどなにも言わずと考え込み——、

「そ、そうなのでした！」

真つ赤になつて、そう叫ぶ。

「わふー。二度手間になつてしまつたのです……」

「いやまあ、いいんじやないかな？」

その様子にほほえましいものを感じつつ、さらに先に進む。すると……。

「——！」

まず、この中で一番勘の鋭い鈴がなにかに反応した。

「なにか……聞こえるのです」

その後に僕、続いてクドも反応する。

そう。クドの言うとおり後ろから、声とも物音とも付かないなにかが聞こえてくる……。

「なんだろう——つてあれは」

懐中電灯の光を向けた途端、いくつもの目が僕らを見た。

「わふ！ ひひひ光ったのです！」

クドをはじめ、何人かが身体を固くする。けど、僕はその目に見覚えがあつた。

「落ち着いて、クド。あれは猫の目が光を反射しただけだよ」

そう。鈴の猫達が、こちらにやつてきていたのだ。

……その、クドが用意した毛糸にじやれつきながら転がるようになつた。

その時点である程度予想できたけど、案の定毛糸はすべて猫達に絡まつている。

「おまえら、あたしの後を追つてきたのか!?」

驚きながらも、がんじがらめになつた毛糸をといてあげる鈴。

すると、それを肯定するかのように猫達はそれぞれが短く鳴いたのだった。中には、一步先に進んで鈴の足下でじやれつく猫もいる。

「気持ちは嬉しいが、ここは危ないから戻れ。いいな？」

鈴の号令の元、猫達はすごすごとおとなしく戻つていった。

「……ええと」

なんというか、コメントに困る話だつた。

「わふー……。アリアドネの赤い糸がいきなりなくなつたのです」
クドが、少しだけしょげてしまう。

「ご、ごめん……」

申し訳なさそうに、猫達の代わりに謝る鈴だつた。

「いえ、鈴さんのせいではありませんし……」

「なに、生き残つて帰つてくれればいいのだよ」

と、来ヶ谷さんが言う。

「そうですね！ みなさん生きてこの迷宮から帰りましょう！」

氣を取り直して、クドが元気にそう言う。

「ま、駄目だつたら『女房想いの、いい奴だつた』つて墓碑に書いてもらえばOKですよ」
三枝さんはそれで良いのかもしれません、わたしの方は大問題です。薄い本専用時限焼却
装置のスイッチを入れておくのを忘れてしまいましたので……」

「いやいや、ここ学校の地下だからね」

迷つて帰れなくなるようものがそんなところにあつたら、色々な意味でまずいと思う。

通路を進んだ先にあつた扉をくぐると、そこはちよつとした広い部屋になつていた。ドアは四方にひとつずつ付いていて、それに鍵穴はない。そしてその壁には――。

「これは……」

「不規則なタイルが貼つてありますね」

と、西園さんが呟いた。

「わふー、なにか意味があるのでしようか」

「うん、そうだね。なんだろう……」

「はつはつはつはつは！　謎は全て解けた！」

クドの疑問に、僕も首を傾げたときだつた。

そんなことを高らかに叫んで、葉留佳さんが背中からちよつとした長さの木でできた棒を取り出した。どうやら、制服の上着とブラウスの間に、ずっと仕込んでいたらしい。

「こういうダンジョンはですね、壁を叩いて叩いて叩きつくすのがポイントなんですよ！」

「え、そうだつけ？」

同じポイントでも、絶対にやつてはいけない方に含まれるような気がするんだけど……。

「というわけで叩くぜ叩くぜ叩きまくるぜー！ あちよー！」

そう言つて葉留佳さんは、手にした棒で目の前の壁を派手に叩き始めた。

「あの葉留佳さん、学校の一部だからいきなり崩れることはないだろうけどさ——」
「あ」

クドが乾いた声を上げた。

「うん？」

葉留佳さんが叩く手をやめないまま、声がした方を振り返る。そして怪訝に思いながらも作業続行といわんばかりに正面を向き直つて——。

「あ」

本人も、ひきつった声を上げた。

「ご、ご、ご——」

誰かがタイルを指さす。葉留佳さんが叩いたタイルが落ちて、その後ろ側から、黒くて平べつたくてじめじめしたところを好む六本足のすばしつこいものがわらわらと——。

『『おおつと！』』

ノリノリな恭介のナレーションの後、クドと僕は顔を見合させて、

「こ、こ、こ、こくろっちですー！」

「ゴ、ゴ、ゴ、（自主規制）だー！」

ふたりして、絶叫してしまつた。

「クーちゃん、それ良い発音だよ！ つて、そういうばあいじやない～！」

小毬さんの悲鳴の後、たちまち総崩れとなる僕らリトルバスターズだつた。

「待避！ 全員待避！」

僕はそう叫ぶと、クドを脇に抱えてみんなと一緒にダツシユで地下の廊下を突き進む。

「ぎいやああああ！ 集団で出てきたー！」

真つ先に走り出して先頭へと躍り出た葉留佳さんが、振り返りつつもすごく良いフォームで走りながらそう叫ぶ。

「焼き払うか」

ひとり踏みとどまつた来ヶ谷さんが、物騒なことを呟いた。手にしているのは……かつて恭介が蜂の巣を撤去するときに使おうとした（そして実際には真人に使って火だるまにした）、スプレーとライター！？

「やめて！」

延焼したら大変になるし、万が一火がついたままこちらに突進してきたら、怖いどころの騒ぎじやなくなる。

どれくらい、走つただろうか。

「ど、どうにか振り切れたみたいなのです……」

クドがそう呟いた。

「み、みんな無事？」

息を整えながら、訊いてみる。

「欠員はないようだが……やはり、焼き払えばよかつたのではないか？」

ひとり息をきらしていないう来ヶ谷さんが、そんなことを言う。

「あの場面では普通に殺虫剤が有効だと思いますが」

依然物騒な来ヶ谷さんの案に対し、的確なつっこみを入れる西園さんだつた。

「いやー、ダンジョンのトラップって怖いですね。みんなはおいそれと怪しいものに触らない
ように！」

「うん、特に葉留佳さんがね」

あのとき葉留佳さんがなにもしなければ、あの名状しがたい集団は出なかつたのだから。

「……えーと、もしかして私のせい？」

自覚のない葉留佳さんが自分を指さす。

「来ヶ谷さん」

「うむ」

西園さんの一言に来ヶ谷さんが呼応し——一瞬にして、武装解除される葉留佳さんだつた。

パチンコ、トリモチに水鉄砲、そして大量のビー玉……全身くまなく、あやしげかつ懐かしい道具をもつていた葉留佳さんに思わず絶句してしまう。

「ううー、ひどいですよ姉御」

「今回ばかりは文句を言えないぞ、葉留佳君。ちなみに今度同じことをしたらその手の道具を隠し持てぬよう下着姿にする。たとえ少年の前であろうとも、だ」

「りよりよりよ了解しましたっ！」

当たり前の話だけど、嫌なのだろう。びしっと敬礼して葉留佳さんはそう答える。

「あの、直枝さん……」

そこで、クドが控えめな声で僕に声をかけた。

「どうしたの？」

「あの、その、こうやつて抱き抱えられないとその……恥ずかしいのですけど……」

「あ、ご、ごめん！」

今になつて、ずっとクドを抱えたままだつたことに気付き、そつとクドを降ろす僕だつた。

「いえ、気にしないで欲しいのです。あそこでうつかり転んでしまつたら大変なことになつてしましましたから。ところで……」

不安そうに周囲を見回しながら、クドがそう呟く。

「……ここ、どこですか？」

「え？ あれ？」

気がつけば、懐中電灯と一緒に恭介から渡された地図に描いてある場所とは、異なるところに出ていた。よくよく見れば地図の一部には省略を示したり、黒く塗りつぶされているところがある。どうも僕らは、そういつたエリアに迷い込んでしまつたらしい。

「携帯の電波も通じないよー」

と、小毬さん。

「鈴の帰宅本能を使えばいいんじやね？」

ごく気軽な感じで、真人がそんなことを言う。

「そんなもんあるかー！」

「それを言うなら帰巣本能だからね、真人」

かろうじて意味はあつていたけど、残念ながらそんな能力は鈴には無かつた。

「あれ、帰巣本能ならクド公の方がすごそうじやない？」

「わふ！？ わたしですか？」

葉留佳さんの指摘に、自分自身を指さして、クド。

「カンでいいから言つてみクド公。それがきつと答えだから」

「そ、そうでしようか……」

いまいち自信がなさそうなクドだつた。まあ、それも当たり前のことだろうけど。

「まあ他にあてもないし、なんとなくで進んでみてもいいんじゃないかな」

「僕の言葉にクドは決心がついたのか、ひとつ頷くと、
「わかりました。では、こちらの方へ」

通路の一方を指さしたのだった。

「よし、それじゃみんなではぐれないよう移動を——」

『おおつと!』

そこで恭介が突如叫んだ。

「え、なに? なんかモンスターでも出た?」

僕がそう訊くと、恭介は上着の内ポケットからなにかを取り出そうとしたながら、
『どうやら君たちは家具部の迷宮の未踏領域に足を踏み入れたようだ! さあ、これを使い
君たちだけの地図を作り上げたまえ!』

そう言つて恭介が手渡してくれたのは、方眼紙と鉛筆、そして消しゴムだった。

「まさか学校の地下でマッピングすることになるとは思わなかつたよ……」
ちなみに、初めてではなかつたりする。

以前にも恭介が学校の裏山に洞窟を見つけて、僕と真人と謙吾と鈴の五人で探索をしたこと
があつたからだ。あのときも僕が地図の作製を引き受けたのだけれど、まさかそれを再びやることになるとは思わなかつた。

とりあえず、人ひとりが立てるスペースをヒトマスとして、周辺の地図を作っていく。

「わふ、なんだか面白そうなのです」

方眼紙を埋める僕に対し、すごく興味深げにクド。

「まあ、楽しいと言えば、楽しいかな？」

いきなりでなければ、もつと楽しかったと思う。

「でも、ここつて一体どこなんだろうねえ」

先ほどのクドと同じように周囲を見渡して、小毬さんが呟く。

「移動速度と時間から考えて、学校の敷地内の地下にいることは確かなはずですが」

「こんな状況でも冷静な西園さんが、そう指摘した。

「そうだとしても、なにに使っているんだろう」

僕がそう呟くと、みんな考え方むように口を閉ざす。

「こんなに荒れているわけですから、単純に考えるのなら既に使われていない設備なのでしょう」と、至極真っ当に西園さん。

「いや、その指摘は少々疑問だ。まず、まだ照明が生きている。次に、ここを歩いていても息

苦しくないということは、空調も生きているということだろう。つまり、この周辺は何らかの

施設として稼働しているということだ」

「……なるほど、おつしやるとおりです」

「……なるほど、おつしやるとおりです」

来ヶ谷さんの指摘に対し、西園さんはこくりと頷く。

「そう言えば聞いたことがあるよ。ヨーサンシツとかなんとか。すんごく古いんだつて」と、葉留佳さん。

「室はともかく、ヨーサン?」

クドが首を傾げる。

「ヨーサン、養蚕……? 蚕、産、算……もしかして、電算室でしようか」

「そうそれ! クド公冴えてる!」

両手をぱんと打ちならして、葉留佳さんはそう叫んだ。

「なるほど、古いコンピュータを地下に格納しているわけか。昔の大学などでよく見られたパターンだな」

来ヶ谷さんが、そう解説する。

「その手のものは一度設置したら後はメンテナンスに必要な部分以外はそれつきりになるそういうからな。結果として、こうやつて迷宮化したのだろう」

「なるほどね——うん?」

懐中電灯を当てながら進んでいた僕は、首を傾げた。

「どうした? 理樹」

すぐ隣にいた真人がそう声をかける。

「この崩れかけた壁の向こうに、通路がありそなうなんだけど」
 懐中電灯の角度を色々と変えながら、そう答える。角度によつては、ずいぶんと遠くに光があたつたような……気がするのだ。

「ふむ、最後の分岐からだいぶ離れているな」

「と、来ヶ谷さん。

「そしてこの先はどう考へても行き止まり——なのです」

クドがそう指摘する。

「これは——」

引き返そと僕が言い掛けたとき、

「ぶち抜けばいいんだな？ よつしやまかせろ！」

僕が止める前に、真人は壁に向かつてショルダータックルを仕掛けた。
 「おりやあああ！」

真人渾身のタックルにより、あつけ無く壁は崩壊した。けれど……。

「うおつ……！ は、はまつて動けねえ……」

その崩壊した部分に、真人がすっぽりはまつて動けなくなつていた。
 「これ、ちょっとやばくね？」

「発破するか」

さもそれが当然であるかのように、来ヶ谷さん。

「何で爆破する流れになつてゐるの！ それに、いくらなんでも真人が耐えられないよ
いや、オレは構わないぜ？」

「なんでそこで真人が返事をするのさ!?」

「こんなことで自己犠牲の精神を發揮されても、ものすごく困る。

「まあ、現状を打破する手段が他にあるのなら譲るが」と、来ヶ谷さん。

「もう一度言うが、オレは構わないぜ」

「う、うーん……」

結局、来ヶ谷さんがたまたま持つていた発破用の爆薬（……なにに使うつもりだつたんだろう。
というか何故持つっていたのだろう）を使用して、周囲の壁を崩すことになつた。

「それではゆくぞ。点火！」

途端、轟音とともに壁が崩れ落ちる。——真人と共に。

「ま、真人——!?」

「やはり巻き込んだか」

「やはりじやないよつ！ 真人！ 真人つ！」

巻き上がつた粉塵に向かつて、叫ぶ。

「ふいー、ちょいとびつくりしたぜ。ありがとよ、来ヶ谷」

「なんで平然と起きあがつてくるのっ!?」

「え？ 駄目だつたか？」

豪快に崩れた壁に埋もれたはずなのに、ぴんぴんしている真人だつた。

その後も、背後から突如転がつてきた発泡スチロール性のローラーっぽいなにかを鈴が蹴飛ばして撃退したり、壁から飛び出てくる竹槍のようなもので小毬さんのスカートが大変なことになつたりしたものの、僕らは欠員なく先に進むことができた。

やがて、重厚な扉の前にでる。その上にはご丁寧に大きな看板が掲げられており、達筆で書かれているのは――。

「――『家具部倉庫』！」

「わふー、ようやく辿り着きましたか……」

クドが、へたり込みそうになる。

そんなクドを、僕は抱き抱えるように慌てて支えたのだつた。

「な、長かつたね……」

破れたスカートを安全ピンで留めた小毬さんが、ため息と共にそう呟く。ちなみにそれでも

中身が見えるので、来ヶ谷さんがたまたま持っていたブルマを着用している。——たまたまと
はいえ、なんでブルマなんかを持っていたのか、はなはだ疑問であつたけれど。

「ふむ、なかなかにスリリングだつたな」

「あくまで楽しそうに、来ヶ谷さん。

「そうですね。割と頭を使いました」

西園さんも、そんなことを言う。

「うんうん、トラップもいつぱいあつたしね！」

ちなみに、そのトラップに片つ端から引っかかっていたのが葉留佳さんだつた。正確にはつ
ついて回つたと言つた方が正しく——さすがに下着姿は免れなければ上着は没収されていた。
「ここからだと見えないが、今頃真人の笑顔が大空に浮かんでいることだろう」

「勝手に犠牲にするんじゃねえ！」

両腕を組んだ鈴に真人がツツコミを入れるけど、それとは別に大空が暑苦しくなると思う。
「まあそれらは置いておくとして……さあ、行こうか」

そう言つて、僕が家具部倉庫の扉に手をかけたとき——。

ぽーんとひどく間の抜けた音がして、扉の横に隠れるようにあつた自動ドアが——正確に
言うのなら、エレベーターのドアが——開いた。そこから出てきたのは……
「あらどうしたの、こんなところで。しかもすごい人數ね」

じょ、女子寮の寮長？

「いやあの、それよりも……」

「え、え、エレベーターなのです？」

僕とクドが交互にそう言うと、寮長はひとつ頷いて、

「ええ、そうよ。これがないと、家具を上に引き上げるのが大変でしょ？」

……まったくもつてその通りだつた！

「ちなみに私、整備委員なんぞ知つてましタ！」

びしつと敬礼して、葉留佳さん。

「整備委員ではないが、私もだ」

と、来ヶ谷さんも腕を組んでそう言う。

え、ええと……。

「わふー……」

クドが、気の抜けた声を上げた。

『君たちは、このエレベーターを使って一足飛びで帰つてもいいし、元来た道を辿つて帰つてもいい』……

全力疾走しようが部屋の半分が吹き飛ぼうが決してマイクを手放さず、最後までナレーション役に徹していた恭介が、そう締めくくつた。



第三章 クドリヤフ力という名前の、女の子



暖かい日々が、かけがえのない日々になつたのはいつのことでしょうか？……おそらくそれは、きっと、私が勇気を出してその名前を呼んだときだつたと思います。あの日あのとき、何度も深呼吸をした後に私は――。



「リキ」

急にクドにそう呼ばれて、僕は慌てて振り返った。

——なにか、いまちょっと引っかかったのだけれど、その正体がよくわからない。

「え？ あ、うん。どうしたの？ クド」

僕がそう訊くと、クドは何故かすごくほつとした顔で、

「わふー、よかつたです……って、あ、あの、すみません。お買い物につきあつてほしいので

す

「僕でよければ、喜んで」

「ありがとうございます、リキ！」

……うん、やつぱり。

違和感の正体に気づく。

そう、クドは今まで『直枝さん』と名字で呼んでいたのを、『リキ』と名前で呼ぶようになつていたのだ。

それはなんというか……少し、くすぐつたかつた。

「それで、なにを買いに行くの？」

放課後の校舎から出て、ふたりで商店街へと歩きながら僕はそう訪ねる。

「はい、レターセットを買いたいのです」

「レターセット？」

どうも行き先は郵便局みたいだ。

でも、便せんや封筒なら、それこそ学内の購買にも売つてゐるはずだけど……。そう思いな

がら郵便局の外で少し待つ。

「お待たせしました」

「ああ、なるほど」

クドが購入したのは、国際郵便用のレターセットだつた。

おそらく、外国にいる家族の誰かに送る為のものなのだろう。確かにこれは、色々なものを取りそろえていることが自慢の購買でも、取り扱っていないだろう。

「クドの家族つて、みんな海外なんだつけ？」

「はい。おとうさんは世界中を飛び回つてるのでどこにいるのかわかりませんが、おかあさんとおじいさんは今テヴァにいるのです」

テヴァ——聞き慣れない名前だつた。

「さて……ちょっと時間が余つてしましましたね」

「あ、そういえばそうだね。どこかでお茶でもできればいいんだけど……」

あいにく、僕はそういうところには疎い方だつた。真人と一緒にいる時はカツ丼屋で大丈夫なんだけど……。

「あの、それでしたらおすすめの場所があるのですが……」

と、控えめにクド。

「それじや、そこにしようか」

「はいっ！ 一名様ご案内なのですっ！」

まるで飲食店のウエイトレスのような口調で、クドが僕の袖を引っ張つていく。

「ここは……」

クドに案内された先は、校内にある女子寮の旧館と渡り廊下で繋がった平屋建ての一室だった。確かに、そもそもは寮の管理室だつたはずだ。そう僕が指摘するとクドは大きく頷いて、「はい。リキの言うとおりなのです。でも今は、家庭科部の部室なのですよ」と、少し誇らしげにそう言つた。

「家庭科部？」

その聞き慣れない部活に、思わずそう訊いてしまう。

「はい。女子寮の寮長さんが主催する部活なのです！」

「へえ……どういうことをしているの？」

「それはですね、お茶を淹れたり、お菓子を作つたり、それを食べたりなのです！」

「いきいきとそう答えるクド。それだけ楽しいのだろう。

「あ、そうです。もしリキもよかつたら、一緒にやつてみませんか？」

「え？ 僕？」

クドの思わぬ提案に、少しだけ声が裏返つてしまう。

「いいのかな。僕で」

「大丈夫なのです。私のときも寮長さんにそれっぽい素質があるからっていう理由だけで入部

できましたので！」

それって、ただ単に部員が欲しかつただけじゃないかな……と思つたけれど、とりあえずは頷いておく。

「さつそく寮長さんに入部届なのです、わふー！」

「いや、わざわざ動かなくとも寮長がここに来たときでいいんじやないかな」
その方が効率的であるし、第一僕が女子寮をうろうろすると色々な意味で面倒なことになる気がする。

「うーん、でも寮長さん、最近寮長のお仕事が忙しくて、こちらには滅多にいらっしゃらないのです」

「え？」

それつてつまり……。

「じゃあ、この家庭科部の活動は、クドひとりで？」

「はい。寮長さんから色々任せたというお言葉をいただいているのです！」

えつへんと言わんばかりに、胸を反らすクド。でもそれつて——単に、家庭科部そのものを押しつけられたんじや……ついついそんな邪推をしてしまう僕だった。

「それじゃとりあえず、仮入部つてことでどうかな？」

「はい、大歓迎なのです！ わふー！」

嬉しそうにはしゃぐ、クドだつた。

「それでは早速、お茶を淹れますね。ちよつとだけ、待つていて欲しいのです」

「あ、ありがとうございます」

奥に引っ込んだクドから目を離し、室内を見回してみる。

なんというか、家庭科部と言うより茶道部とか華道部と言つた方がしつくりとくる内装だつた。もつとも、使い古されていながらも造りのしつかりしたちやぶ台があるため、そのどちらにも当てはまらなかつたけれど。

どちらかといふとこれは……そう、古き良き一般家庭、それも新婚ほやほやの——つて、なにを想像しているんだ、僕は！

「お待たせしました——リキ？」

「あ、いや。なんでもない、なんでもないんだ」

ひとりで悶絶していた僕に目を丸くしたクドに、慌ててそう答える。

「そうですか……それでは、どうぞなのです」

そう言つてクドが僕の目の前に置いたのは、普通の紅茶と、小さなお茶碗のような容器に入つていたジャムだつた。ちゃぶ台とセットにするとちよつとちぐはぐにも見えたけど、これはこれで似合つているような気がする。

「これは？」

「ロシアンティーなのです。カップが無かつたので湯飲みになつてしましましたけど……」
すごく綺麗な姿勢で僕の真向かいに正座して、クドはそう答える。

「ええと……ジャムを紅茶の中に入れるんだつけ？」

「本当は入れなくともいいのです。もちろん、リキを入れたいというのでしたら構いませんが、せつかくの紅茶の風味が、ちよつともつたいたいかもしません」

「なるほどね」

クドのアドバイスに従つて、紅茶に入れずに添えられていた小さなスプーンでジャムを食べてみる。見た目はイチゴジャムのような色をしたブルーベリージャムみたいだつたけど、その味は――。

「あ、これは――」

「お口にあいませんでしたか!?」

心配そうにそう訊くクドに、僕は首を横に振つて、「ううん、美味しいよ。なんというか、食べたことがない不思議な味がしたから……」
僕がそう言うと、クドはほつとした様子で、

「コケモモのジャムなのです。日本に来る前に、私が作つておいたものなんですよ
よどみなく、そう解説してくれた。

「へえ……これがコケモモの味なんだ」



昔童話かなにかで読んだときには、コケモモというから桃みたいな味だらうと想像していたのだけれど、実際には結構酸味の強いリンゴみたいな味だった。それを砂糖の甘味が優しく包み込んでくれて、ほどよい甘酸っぱさになつてゐる。そして、最後に飲んだ紅茶が、豊かな香りと共に、口の中をさっぱりさせてくれた。

「うん、この味僕は好きだよ」

紅茶の入つた湯飲みをそつと置きながら、僕。

「それは……とつても嬉しいのです！ わふー！」

文字通り、飛び上がりそうになつて喜ぶクドだつた。

そして、その夜。

「コケモモのジャムか……うまそうだな」

家庭科部でのお茶会のことを、僕は同室の真人に話していた。

「まあ紅茶はいいとして、問題はジャムだな。食い放題なのか？」

「ううん、これくらいの小さなお茶碗みたいなのに入つていた分だけだね」

五百円玉大の大きさを親指と人差し指で再現しつつ、僕。

「なんだよ……ひと瓶丸ごとじゃねえのかよ……！」

「いやいや、普通そんなに食べるるものじゃないからね」

まあ確かに、真人の場合はあの小さな容器に山盛りにしてあっても、満足しないだろうけど。「いいなあ……オレも家庭科部ってやつに入ろうかなあ」

「え、真人が料理とかお菓子を作るの？」

思わず驚いて、そんな質問をしてしまう。

「うんにゃ。もちろん、食う専門で」

「いや、それは駄目なんじやないかな……」

呆れながらも、そう指摘したところで、誰かが部屋をノックした。

「はーい、今開けます」

僕が席を立つてドアを開ける。すると——、

「理樹君、大変なのです」

珍しいことにノックされたから（僕らに用事のある人は、まずノックをしないからだ）お客様はどうとは思っていたけれど、そう声をかけてきたのは、さらに予想を反して小毬さんだった。……いや、ここは男子寮なのだから、小毬さんがここまで来れていることが若干驚きではあつたけど。

それにしても、大変つて。なにがなんだかわからなくて、きょとんとしてしまう。そこへ、「大変なのですー！」

小毬さんの隣にいたクドまで、そんなことを言う。

「とりあえず、ちょっと来てもらえるかな？」

「来て欲しいのですー！」

そういうつて、それぞれが両手で僕の袖を片っぽずつ引っ張る。

「いやうん、小毬さんやクドがそう言うなら行くけどさ」
大変という割には、ふたりともすごく楽しそうな顔をしているのが気になる僕だった。

「ええと……。真人、悪いんだけど——」

「ああ、わかってるよ。点呼の時はごまかしておくから気にすんな」
手をひらひらと振つて、真人。

「真人君、ありがとうつ！」

「ありがとうございますなのです、井ノ原さん！」

「おう、ちゃんと理樹に筋肉をつけてやつてくれよ？」

そういう話では、決してないと思う。

通された先は女子寮で、何度も訪れた場所だつた。
「ここは、クドの部屋？」

「なのですっ！」

——つて、本来男子禁制である女子寮の中に見慣れた場所があるつて、なんだかものすごい話になつてゐるような気がする。

それにしても、部屋は大分女の子の部屋っぽくなつていた。この前、家具部の倉庫から色々な家具を仕入れたためだらうか、随分と賑やかになつてゐる。

そしてこの部屋に……リトルバスターズの女性陣が、全員揃つていた。

「あれ、ルームメイトの二木さんは？」

「二木さんは今日、委員会の仕事とかで、校舎の方に泊まり込みだそうです」

あの子達のことを聞きたかつたんですけど……と、気になることをクド。それよりも――。

「なんというか、大変だねえ……」

いくら風紀委員でも、学校に泊まり込んでまでする仕事があるのだろうか。いらぬ苦労を背負つていなければいいのだけれど……と、ついつい心配してしまう僕だつた。

「ま、風紀委員のことなんて、どうでもいいのですヨ！」

そう言って割り込んできたのは、いつもどおりノリノリの葉留佳さんだつた。ただ一瞬、風紀委員と言つたときになんともいえない表情を浮かべたのがちよつとだけ気になつたけど、おそらく氣のせいなのだろう。

「ふむ、来たか少年」

西園さんと何事かを談笑していた来ヶ谷さんが、両腕を組んで鷹揚に頷く。

「なにをする気なのさ、来ヶ谷さん」

「ふふ……なにをするかだと？ 決まつているだろう」

いつもの氣怠い感じを微塵も見せず、来ヶ谷さんは大きく息を吸い込み、「それはもちろん、パジャマパーティーだ！」

ガツツポーズを取つて、そう宣言した。

「ば、パジャマパーティ？」

聞き慣れぬ単語に、思わず聞き返してしまう。

「なんだ少年、芋煮会の方がお好みかね？」

「いや、それ絶対にここじやできないでしょ」

室内でやつたら熱気がこもるし、において大変なことになると思う。

「ちなみにおねーさんは、スケスケのネグリジエも好きだがシンプルなパジャマも大好きだ」

「ああうん、観る方つてことだね」

「ほう、なんだ少年。だんだんとわかってきたじやないか」

「うん、そうだね……」

できればわかりたくなかったような気がする。それと個人的には、来ヶ谷さんはワイシャツ一枚がよく似合うような気が——いやいや、いやいやいやいや！

「なんだ少年。まるで私の寝間着がワイシャツ一枚だと胸の谷間や太腿が露わになつてムホツス！　たまらんツス！　とでも言いたげだな」

「そ、そんなことないから！」

「なんでそこまで細かく推理できるんだろう。

「まあよかろう……さて、お集まりの諸君、ガールズトークに突入する前に——」

「僕のこと、忘れないでね」

「『ガールズトーク、それと少年』に突入する前にシャワーを浴びてくるとしようか」

「それと”扱いの方がひどいような気もするけど、指摘するとさらにひどい扱いになりそうだつたので、納得したことにする。」

「一斉に行つたらシャワーが埋まつてしまふから……そうだな、二名ぐらいがいいだろう」

「どうも男子寮のそれと同じく、シャワールームは公用の脱衣場といくつかの洗い場とに別れているらしい。来ヶ谷さんの先の発言は、他の女子のことを考慮したものなのだろう。」

「それではまずは……」

来ヶ谷さんが指名しようとしたときだつた。

「はーい、私とりんちやんでいつてきまーす！」

真つ先に元気よく手を挙げて、小毬さんがそう言つた。

途端、鈴が毛を逆立てた猫のようになつて背筋を伸ばす。

「あ、あたしはいいつ！」

「だめだよー、りんちゃん。せつかく理樹君が来てくれたんだから、こういう時はお風呂に入らないと駄目なのです」

まるで聞き分けの悪い子供に言つて聞かせる母親のように、小毬さんは鈴にそう言う。

「いーやーじやー！ 理樹、助けろつ！」

「いや、これはお風呂に入ろうとしない鈴が悪いんじやないかな」

「な、な、なにい！」

昔から、そうなのだ。僕も恭介も、鈴をお風呂に入れようとして結構苦労した憶えがある。

「それじや、いつきまーす！」

「だからいやじやー！」

お風呂に入るのも、さらには誰かと一緒に入るのも恥ずかしくて嫌なのだろう、鈴が暴れに暴れる。

「よし、こんなこともあろうかとこんなものを用意しておいたんだ」

そこで怪しげな微笑みを浮かべ、来ヶ谷さんが背中から取り出したのは……。

「くらうがいい。 超！ 巨大猫じやらし！」

「うわあ……」

思わずそんな声を上げてしまう僕だった。

「葉留佳君、鈴君を拘束しろ」

「イエスマム！」

すごく楽しそうに、葉留佳さんが鈴を羽交い締めにする。

「姉御、確保しました！」

「よろしい。さて、鈴君——」

「や、やめろくるがやー！」

そんな鈴の悲鳴も虚しく……。

「ほーれほれほれ、ほーれほれほれ……」

「うにやー！」

「ううにやう……」
どういう理由だかわからぬけど、反応せざるを得ないらしい。鈴が超巨大猫じやらしにじ
やれつく。

「はーい、汗をかいたからお風呂に行こうね！」

そして散々じやれついてぐつたりとした鈴を、ずるずるとひきずつしていく小毬さんだつた。
……案外、腕力があるのかもしれない。

「……行つたか」

来ヶ谷さんが、重々しく呟く。

「みたいだけど」

「よし少年、のぞきに行くぞ」

「いや、行かないから」

「何故、ナチュラルにさらつと言えるのだろう。」

「仕方がないな。では、私ひとりだけでも——」

「いけません」

「駄目ですヨ」

「駄目なのです！」

続けてなにか言う前に西園さんと葉留佳さんとクドに怒られる来ヶ谷さんだつた。

「なんだ、君たちは気にならないのか？ 小毬君の、あの豊満な——」

「なおさら目に毒なのですっ！」

自分の胸をぎゅつと押さえて、クドが即座に反論した。

「つていうか、姉御には自前のがあるじやないですカ」

呆れたように、葉留佳さんがそう言う。

「自分のを見てなにが楽しい。可愛い女の子のものを見る方がいいに決まつているだろう

……！」

「男性だつたら、完全にセクハラですね」

ため息混じりに、西園さんがそう呟く。
しばらくして――。

「ただいま！」

いつもほんわかさせている顔をさらにほんわかさせて、小毬さんが戻ってきた。

「ううう」

同時に、ぐつたりとした鈴も帰つてきた。湯あたりに見えなくもないけど、顔だけ赤いといふことは、単に恥ずかしかつただけなのだろう。
「りんちゃんに入れて楽しかつたよ！」

と、嬉しそうに小毬さん。

「ついでに、てつてつ的に洗つちゃいました！」

「て、徹底的につて……」

どちらへんを、どうやつて洗つたんだろう。思わず想像してしまいそうになるところを、全
力で押さえこむ。

「たいへんだつた」

訊いていないのに、鈴が僕に向かつて教えてくれる。

「普段洗わないところまでごしゃごしゃ洗われた」

「いや、身体は満遍なく洗おうね」

「痛かつたり、くすぐつたかつたり、むずむずしたりして大変だつた」

「——いやまあ」

できうる限り想像しないよう、理性を総動員する。

「あと、こまりちゃんのは、けつこうおつきかつた」

「なんでそんなのとこ見てるのさつ」

理性に大ダメージをくらつてしまい、思わずそんなつつこみを入れてしまう僕。
「ちがう。見てなんかいない」

「じゃあなんでおつきいつてわかるの？」

「洗われているときに、背中に当たつたんだ。こう……ぽよんぽよんって」

そう言つて、自分の背中を模した手のひらに、なにかを模した握り拳をぶつけて、鈴。
「やはり、そとか……」

すごく悔しそうに、来ヶ谷さんが胸の前で握り拳を震わせる。

「ゆいちゃん、顔怖い！」

半ば本気で怯える小毬さんだつた。

「まあこまりんのぼよんぼよんは置いておいてデスね、次は……私と姉御かな？」

と、葉留佳さん。

「ふむ、いいだろう。クドリヤフカ君と行つたら鼻血を噴いてしまうからな」

「え？ なんでなのです？」

いや、クドは知らなくていいんだ……。

「んじやちよつくら行つてきますよ。アディオス！ アミーゴ！」

なぜかメキシカンな葉留佳さんの挨拶とともに、ふたりはシャワールームに。「三枝さん、来ヶ谷さんになにかしないといいんですけど……」

クドが心配そうにそう呟く。

「僕はむしろ、葉留佳さんが来ヶ谷さんになにかされやしないかが心配かな……」「というか、はるかがくるがやに手を出したら返り討ちだな」

鈴も、僕と同意見のようだつた。

「あのおふたりなら、大丈夫でしよう」と、どこか悟った顔で西園さん。

「みおは、みんなをよく見ているな」

鈴が、そんな感想を漏らす。

「わふー、そうだといいのですけど……」

「うん、そうだね……」

「ただいま。いやあ……」
そんな僕とクドの心配をよそに、葉留佳さんと来ヶ谷さんはすぐに戻ってきた。

お風呂上がりだからだろう。いつもよりもしつとりとしたお下げに手をやつて、葉留佳さんは小さく息を吸い——、

「いやもう姉御のすごいっス！ ロケットですヨ！ ロケット！」

「うん、なにを見たのかはだいたい想像が付くけど……想像以上にすごいたとえだつた。

「しつかもしつかり張りがあつて、すつこしも垂れていないの！ いやー、あれは同性でも見ほれざるを得ないですよいやマジで！」

「——ロケットでしたら、ブースターを全部切り離してしまえばいいのです。そうすれば残りは小さな人工衛星か再突入カプセルのみなのです」

さつきも気になつたのだけれど、なにかが黒いクドだつた。

「ふむ、賞賛として受け取つておこう」

そんなクドとは違ひ、こちらはたいして氣にもせずに、来ヶ谷さん。

「では次は私と——西園さんです？」

そこで、準備を済ませたクドがそう言つた。

「申し訳ありませんが能美さん、私はここに来るまえにシャワーを浴びてきましたので」と、クドに小さく頭を下げる西園さん。

「むう。さすが西園女史、隙がないな」

顎に手を当てて、少し悔しそうな様子で来ヶ谷さんがそう呟く。

「なにをするつもりだつたのさ」

「それはもう、色々とだな」

「セクハラですよ、来ヶ谷さん」

来ヶ谷さんが思わず息をのむほど、ひんやりとした声で警告する西園さんだつた。

それにしても、前もつてシャワーを浴びておくなんて、さすがといふかなんといふか……。

「あ。だからいつもより良い香りがするんだね、西園さん」

僕がそう指摘すると、西園さんは少し間をおいて、

「——直枝さん、それもセクハラです」

少し頬を膨らませて、そう怒られてしまう。

「……え？」

「そ、そういうなの？」

「なんていうか、理樹くんつて時々無自覚にこつちをドキッとさせるよね」

ため息混じりに、葉留佳さんがそう言つた。

「うーん、時々、ちょっとだけデリカシーが足りないと思つちゃうときはあるかな？」

でも、

本当に時々なのでおつけーなのですよ——」

どうやら、小穂さんもそう思つてゐるようだつた。

「理樹は鈍い」

身も蓋もなく、鈴もそう言う。でもこれは、ちよつと気を付けないといけないかな。

「だが、それがいい……！」

「うん、本気で改めよう。にやりと笑う来ヶ谷さんの一言でそう思う僕だつた。

「では、ひとりで行つてくるのです……」

少し寂しそうに、クド。

「ふむ、ひとりでは味気ないようだな。よろしい——」

がたつと立ち上がつた来ヶ谷さんを、みんなで押しとどめる。

「なんだ、人をセクハラ課長のように」

「課長はともかく、セクハラはあつていますので」

容赦なく、西園さんが断言する。

「もう……ならば能美女史、少年と行くか？」

「わ、わふー!?」

「えええええ!?」

「ななななんだつてー！」

クドだけでなく、小毬さんと葉留佳さんも悲鳴を上げた。

鈴にいたつては驚きを通り越して石のよう硬直している。

そして、西園さんはほんの少し自分の身体を傾げていた。その様子と僕の背筋に少しだけ冷

たいものが走つたことから察するに、なにかよからぬ想像をしてしまつたらしい。

「……直枝さんの、未成熟な——！」

うん。聞かなかつたことにしよう。そうしよう。と、小毬さん化する僕だつた。

「え、ええとですね……」

絞り出すような声で、クドが言う。

「り、り、リキがよければ悪しきにもあらずなのですが……」

「いやいや、いやいやいやいや！」

全力で手を振る。もちろん横方向に、だ。

「乙女にそこまで言わせると、羨ましいぞ少年」

そう言つて僕の肩を掴む来ヶ谷さん。こころなしか、指にかかる力が強すぎる気がするのだけれど……まさか本気？

「さあ選ぶがよい。能美女史と一緒にシャワーを浴びてくるか、それともその役目を私に譲るか、だ！」

「それ、どつちも駄目だよね!?」

ものすごく駄目な理由で、来ヶ谷さんと対峙する僕だつた。

「クーちゃんクーちゃん、騒ぎがエスカレートする前行つておいで」

「はい、そうしますなのです！」

小穂さんの一言で、ぱたぱたとシャワールームに急ぐクドだつた。

「やはり私も気になるから一緒に——」

「言い終わる前に、小穂さんと葉留佳さんと西園さんに無言で止められる。

「なんだ、人をエロスの権化みたいに」

珍しいことに少しだけ口の先を尖らせて、来ヶ谷さん。

「来ヶ谷は、えろい」

ぱつりとそう呟く鈴だつた。

「しかしだな。少年も見たくはないのかね？」

聞くところによればクドリヤフカ君は各国を渡り歩いた結果、我々より年下だそうではないか。そんな彼女の入浴シーンは、おそらく妖精郷もかくやという光景になると思うのだが

「それを見ちゃつたら、僕、男子生徒として大変なことになるよね？」

少なくとも、ちょっととしたお茶目とかで済む問題ではないと思う。

……その、もし見たくないのか？ と問われてしまふとすごく困るのだけれど……。

「むう、みんなロマンがないな」

やや不満そうな来ヶ谷さんだつた。

「来ヶ谷さんが、特殊なケースなのでしょう」

西園さんがそう断じる。

「ほう、では君はクドリヤフカ君の入浴にときめかないと——」

「はい」

来ヶ谷さんが最後まで言う前に、断言する西園さんだつた。確かに、クドに対して西園さんがときめく構図は——うまく想像できない。

「もつとも、能美さんがそのままの容姿で男性でしたら——」

小毬さん、鈴、葉留佳さん、来ヶ谷さんの視線が、一齊に西園さんに向く。

「——なんでもありません。忘れてください」

失言を恥じた様子で、西園さん。

「君もなんというか、業が深いな」

やや複雑な顔で、来ヶ谷さんがそう言つた。そんな微妙な空気のさなか、

「おまたせしましたー」

クドが戻つてきた。よく見ると肩の上にタオルをかけて、その上に髪を乗せている。

「あ、おかえ……り……」

「どうしたのです？ リキ」

「あ、いや……」

「なんでだろう、お風呂上がりというただそれだけのことのはずなのに、クドが可愛く見える。
「ど、どこかおかしいですか？」

髪の毛を触りながら、クド。

「い、いやその、なんか……いつもよりふんわりとしているような気がしたからさ」なんかいつもより柔らかそうというか、来ヶ谷さんや葉留佳さんが抱きついている気持ちが少しだけわかつた気がする。

「あ、ありがとうございます……わふー」

「それに良いにお——おつとつと」

慌てて、自分の口をふさぐ。

「直枝さん。セクハラは相手がそうだと思わなければ大丈夫ですよ」

西園さんが、そんな注釈を入れてくれた。気のせいか、その視線が微笑ましげに感じる。

「——そうですよね？ 能美さん」

「あ、は、はい。ちょ、ちょっと恥ずかしいと思つただけなのです」

照れたように下を向いて、クド。

「そ、そ、うなんだ。ごめんねクド、変な気をつかわせて」

「いえ、おかまいなくなのです。……わふー」

「十分ギルティだな」

羨ましいぞ、少年。と、照れるクドを横目に訳のわからないことを言う来ヶ谷さんだつた。「さて、最後は少年というわけだが」

「あ、そうか。僕だけ入らないのは……駄目だよね」

思わず苦笑してしまう。いくらなんでも女の子の部屋で清潔が保てないのは問題だ。

「それで、少年は誰と行く？」

「誰もなにも、ひとりで行くから！」

そういう趣味は僕にはない。

「いや、そうもいかん」

「……え？」

意味がわからなくて、思わず聞き返す。

「もし、少年が入つたときに他の生徒が服を脱ぎ着しているところだつたら……あるいは、シャワーを浴び終えた少年が全裸で脱衣所に戻ってきたときに他の生徒がいたら、少年は一体どうするのかね？」

「そ、それは——」

そんな事態に遭遇するのは、ものすごく遠慮したい。

「だからその共用部分に対する見張りは必須ということなのさ」

教師が生徒に言つて聞かせる感じで、そう締めくくる来ヶ谷さんだつた。

「で、少年は誰を連れていく？」

え、ええと……。

「それじやあ……来ヶ谷さんにお願いするよ。いざというときに頼りになるし」

ぱたぱたぱたぱたと、僕と来ヶ谷さん以外の全員がクツショーンやベッドに座り直した。つて、なんでみんなきなり立ち上がるうとするの……！」

「まあ、妥当なところだな」

いつも通りのクールな表情を浮かべている来ヶ谷さんだつたけど、ちょっとだけ勝ち誇つているように僕には見えた。

「それじや、ちょっと行つてくるね」

そんなわけで、来ヶ谷さんと一緒にシャワールームに向かう。

「使い方は男子寮とたいして変わらんだろう。いささかセキュリティというか、プライバシーがきつくなっているかもしれないが」

「そこはまあ、なんとかするよ」

それに一から十まで頼り切つていたら、シャワールームの中にまで入つて来かねない。

「あ、でも入り口の見張りはお願ひするね。女子の誰かが使おうとしたら大変なことになるから」

「いや、少年なら誰も驚かないと思うが」

「そんなことはないし、仮にそしだとしたらすごく哀しいんだけど、僕は。第一それなら、来ヶ谷さんがここに來た理由そのものが無くなるよね？」

「はつはつは。ちょっとした冗談だよ。とにかく、見張りは私に任せておくがいい。それと、これを」

「そう言つて来ヶ谷さんが渡してきたのは……耳栓？」
「なにこれ？」

「超小型の無線機だ。耳の奥に詰めるように装着すれば、骨伝導の原理でマイクが不要になるちょっととした逸品だよ。もちろん、防水加工済みだ」

確かにそれは、すごいような気がする。

「いくら見張りに立つていたとしても、他の生徒がシャワールームを使うのを止めるることはできないのでね。なにかあつたら連絡の取り合いはいるだろう」

そう言われてみると確かに、そうだつた。

「そういうわけだ。さあ、少年は思う存分自らの身体を熱いお湯で解きほぐしたまえ」「ああうん、ありがとう」

その表現にちょっと言いたいことがあつたけど、クドたちを待たせるのも悪いので急いでシヤワーを浴びることにする。

共用の脱衣場に入ると、想像していたとおり女子寮のそれは男子寮のものよりずつと綺麗に整理整頓されていた。

そして汗くさい男子寮のとは違つて、どことなくいい香りがする。

ああ、これが女の子の香りなのかな……と考へたところで、僕は激しく頭を横に振つた。どうも、先ほどの話でちょっと意識してしまつてゐるらしい。

通信機を耳の穴にはめ、制服を手早く脱ぎ、シャワーを浴びる。
あんまりのんびりして他の生徒と鉢合わせというのが御免だつたので、手早く身体を洗つて
いると――。

『少年、聞こえるかね？　ああ、返事は小声でいい。それで十分聞こえるようになつてゐる
「うん、よく聞こえるけど、どうしたの？」』

『たつた今、脱衣場に人が入つた。一年だ』

『了解』

必要以上に、声を潜めてそう答える。

『ちなみにかなりスタイルのいい子だ。おねーさん好みだな』

『いや、そんなこと訊いていないから』

そんな情報を伝えて、僕にどうしろと言うのだろう。

『下着のセレクトも趣味が良いな。実際に春らしいミルキーグリーンだ。しかもわりと鋭角で、
エクスター度も高い。これはなかなかの逸材だな。しかも胸が――おおつ!?』

『だからそういうこと訊いてないってば！』

『――声が大きいぞ、少年』

愉快そうにそう返してくる来ヶ谷さんに、僕は頭を抱えたくなる。

「ええと……それで、いつ頃あがればいい?」

『身体は洗い終えたかね?』

「頭も身体も終わっているよ」

『よし、では大丈夫だ。観察対象が洗い場に入つた。あがりたまえ』

「つて、一年生の子がシャワー中なんじやないの?」

『そのとおりだが、女性で鳥カラスの行水というのはあまりないからな。少年がすぐに出してくれば問題はないさ』

そういうことならば、大急ぎで出なければならないと思う。

「すぐそこにいたり、していいよね?」

『そうしたいのは山々だが、少年の悲鳴を響かせる訳にはいかないからな、廊下に出たところで待つていよう』

「ん、了解。他の人が入りそだつたら、すぐに知らせてね。服を持って洗い場に飛びこむから」

『そうしよう。もつとも、着替え終えればその必要はないと思うがね』
そんな声と共に、ぶつつという小さな音が聞こえた。おそらく、来ヶ谷さんが通信機の電源を落としたのだろう。

さて、来ヶ谷さんはちゃんと外に出たのだろうか。消えたように見せかけることもできるんだろうけど、でも……眞面目なときはそういうことをしないだろう。そう判断した僕は洗い場から出た。

なるほど、来ヶ谷さんの言うとおり、少し離れた場所からシャワーの水音が聞こえる。僕は、そちらの方はなるべく見ないよう気を配りながら、着替えを……。

「そういうことか……」

先ほど来ヶ谷さんが言つた、着替え終えれば心配する必要がないという言葉の意味を知つて、僕は深く嘆息した。

「む……！」

シャワールームを出た僕の格好を見て、来ヶ谷さんは絶句した。

「似合わないのはわかっているよ、来ヶ谷さん。そんなことより僕の制服は？」

「い、いや、似合わないわけではないが……そんな顔をするな少年。制服だな？」 そつちはランドリーにかけた。明日の朝には少年の部屋に届けておくから安心すると良い

「あ・の・ね・え……！」

そつちはラ

思わず来ヶ谷さんに詰め寄つてしまふ。その際、短いスカートの裾が太腿をなでて——僕はもじもじと足を動かしてしまつた。

そう。僕は今、女子の制服一式でその身を包んでいた。入るときに脱いだ制服が、いつのまにかそれにすり替わつていたのだ。

「なんだ？ 下着も女子のものがよかつたか？」

「……ありがたく、着させてもらうよ」

ぐつと奥歯を噛んで、僕。

いまだつて、ニーソックスの太腿を覆う感触に違和感を覚えているのだ。間違つても、下着まで女子のものを着けたくはない。

「ただいま——」

そう言つて来ヶ谷さんと一緒にクドの部屋に戻る。

途端、室内の空気がぴんと張りつめた。

その様子を察するに、この来ヶ谷さんの企みはこの場にいる女性陣全員が把握済みのようだつた。

「ほわあ、本当に着ちゃつたんだねえ」

驚いた顔半分、困った顔半分と言つた様子で、小穂さん。

「でも予想以上に似合つていますヨ、理樹くん！」

葉留佳さんもそう言う。ただ、いつものように笑顔のままでというわけではなく、少しだけ目をそらして赤くなつてているのがちょっと気になるところだった。

「ほれるやつが、いるかもな」

「……うん。鈴、それよく意味がわからないまま言つてはいるよね？」

「たとえ意味がわかつていなかつたとしても——」

そこで言葉を挟んできたのは、意外にも西園さんだつた。

「お似合いですよ、直枝さん」

そう言いながらも、僕の全身をくまなく見回す。

「あの……西園さん？」

「どうかそのままでお願いします。その照れと恥ずかしさを押し殺した表情が、素敵なので……」

——うん。なんというか、西園さんだけ他のみんなと感想のベクトルが違うような気がしてならない。

「ええと、みんなそろそろいいよね？　どう考えたつて不気味だし」「いや、そんなことはない」

「鈴が即座に否定した。

「これだったら、女の子だと思われるよね？」

おそらく無自覚なんだろけど、なかなか厳しいことを小毬さんが言う。

「いやいや、女子の制服を着ただけじゃればちゃうから。第一おかしいでしょ、こんなに髪が短かつたら」

だが、そんなことは来ヶ谷さんにとって予想済みであつたらしい。

「そんなこともあろうかと、こういうものを用意しておいた」

そう言つて僕に手渡したものは、女子の髪型——長い髪を左右にわけて結つたもの——を模した……、

「……カツラ？」

「ウイッグというのですよ、直枝さん」と、西園さん。

「それ、確かに意味が一緒だよね？」

「それでも、ウイッグというのがコスプ——いえ、業界での習わしですから」

なにかを言い直した西園さんだつたけど、そこはひとまずおいておく。

「というわけですから、それを早く装着して下さい」

「うん、わかつたよ……」

よく考えなくても、万一ばれたときに色々とまずいことになるのは僕自身だ。であれば、そ
うならないよう努力するのが最善だろう。

「えーと、これどうやつて着けるの？」

「額とウイッグの前髪部分を合わせて下さい。そうしたら、あとは後ろから帽子を被るように
すればいいんです。直枝さんは髪が短いので、ヘッドキヤップはいらないでしよう」
ヘッドキヤップとは、時代劇の役者さんがカツラの下に着けるものだろうか。そう思いながら、僕は言
われた通りにしてみた。

「こんな感じ……かな？」

その瞬間、クドの部屋に流れていた時間が、完全に止まつた。
……ああやつぱり、似合わないことをするから。

「ほわあ！」

小毬さんが、そんな声を上げる。

「理樹くんマジパネエッス……！」

続いて葉留佳さんもそう——今、なんだつて？

「うむ……これは、予想以上だな」

てつきり爆笑すると思つていた来ヶ谷さんですら、珍しいことに視線を泳がせながらそんな
ことを言う。

「うん。よく似合つてゐるぞ、理樹」

両腕を胸の前で組み、とても満足したと言つた様子で、鈴がそう言つた。

「——計画通り」

そしてとどめとばかりに、どす黒いオーラとともにボツリと西園さんが呟く。

「あのねえみんな、冗談は程々に……」

「ううん、嘘じやないよ？ 理樹君とつてもお似合いなのです」

と、ちょっとだけ顔を赤らめて、小穂さん。

「いやでも……」

「もつと自分に自信を持て、少年」

ぽんと、僕の肩を叩いて来ヶ谷さん。

「今の少年は、十分美しい。いや、可愛い」

「そんなことに自信を持つてもぜんぜん嬉しくないし、言い直しても全く意味がないからね、

来ヶ谷さん！」

「言うまでもなく、僕にそつちの趣味は全くない。

「クドは、どうかな？ やっぱり変でしょ？」

それがちょっと気になつて、僕はそう訊いてみる。

「…………」

クドは答えない。ただ僕をじつと見つめて——いきなり赤面した。

「あのー、クド？」

「ごめんなさいですリキ。その、すごく可愛らしいと思つてしまつたのです。わふー……」

それはなんというか、すごくリアクションに困る感想だつた。

そんな僕に対し、クドは手近なクッショングで顔の下半分を隠すと、

「少なくとも、私なんかよりずっと可愛いのです」

「いやいや、そんなことはないから。クドの方がずっと可愛いって」

……なんか今一瞬、クド以外の全員からなんとも言えない無言の圧力を受けたような気がする。

「さて、西園女史」

そう言つて、どこからともなく取り出したデジタルカメラを西園さんに手渡そうとする来ヶ谷さん。

「来ヶ谷さんにお任せします。わたしは、そちらの方に疎いので」

「そうか。わかつた」

そう言つた途端、ものすごい勢いでパチパチと僕を連続撮影する来ヶ谷さんだつた。

「あとで、焼き増しをお願いいたします」

「データのコピーだな、了解した。他に欲しいものはいるかね？」

僕以外の全員が、元気よく手を挙げた。つて――。

「クドも……欲しいの？」

「え、あ、はいなのです……」

恥ずかしそうに顔をふせて、それでも首を縦に振るクド。

「よろしい、ならば後で全員のメールアドレスに添付して送信しておこう」

「くれぐれも、流出させないでね……」

まかり間違つて全校生徒に送られたら、眞面目に転校を考えなればならないと思う。

「いや、今の状態ならまずばれないと思うが……そんなことより少年、座つたままよつと上を向いてくれ」

「ええと……これでいい？」

「うむ。ああ、そのままでいい。いわゆるおねーさん座りのままでいてくれたまえ」

そう言つて、来ヶ谷さんは立ち上がりつて上から僕の姿を写真に撮つた。

「理樹くん理樹くん、ちょっと人差し指で自分のほっぺたをぶにつとつついてみて？」
続いて葉留佳さんが、ちょっと照れくさそうにそんなことを言う。

「こ、こう？」

ちょっと変わつたりクエストに、拙いながらも答えてみる。

「なるほど、多少あざといのもありだな」

そう呟きながら、来ヶ谷さんがその様子を撮影していた。

「理樹君、内緒だよって感じで人差し指を唇に当てて、ちょっと首を傾げてみて～」
わくわくした様子で小穂さんからそんなリクエストが飛ぶ。

「ええと、これでいい？」

「一体このポーズがなにを意味するのかよくわからないまま、言われた通りにしてみる。

「……簡単なポーズで見事に魅力を引き出してみせたな。さすがはコマリマックス！」

そんなことを言いながら、来ヶ谷さんがその様子を写真に収めた。

「理樹、両手を軽く握つて手首を少し曲げる。そうしたら脇を締めて肘を曲げるんだ」
今まで黙つていた鈴が、腕を組みながらそう言つた。

「こう、だよね？」

「うん。猫の行進、にやんにやん！　だな」

満足そうに、鈴。

「おのれ、ネコミミカチューシャを用意しておくべきだつたかっ……！」

何故か顔を赤くしながら怨嗟の声を上げる来ヶ谷さんだつた。そして、この様子も当然だと

いわんばかりにしつかりと撮影している。

「そろそろ、よろしいですね……？」

そこで、西園さんがガタツと立ち上がつた。

「直枝さん、ツーテールの片方を手に持つてください」

「あ、うん。わかつたけど西園さんなんか怖——」

「そうしたら、それを持ったまま、手を口許に持つて行つてください」

「僕の声はまるで聞いていない——というか、鬼気迫った様子と言えるほど集中した感じで、西園さんは続ける。

「こ、これでいい?」

「来ヶ谷さん、今です」

「うむ」

いつの間にか、コンパクトデジタルカメラからプロのカメラマンが使うような一眼レフに持ち替えていた来ヶ谷さんが、バシヤバシヤと僕を激写する。

「クドリヤフカ君。君もなにカリクエストはないのかね?」

「ええと……それでは、リキと一緒に撮つて欲しいのです」

「わかりました。ではまず能美さんの髪型を直枝さんとのとあわせてください」
いきなり割り込んで撮影指揮を取り始める西園さんだつた。

「はい。リキと同じつーさいどてーるですね。んしょ……」

「お願ひします、小毬さん」

ルームメイトの髪を梳いたことでもあるのだろうか、小毬さんは慣れた手つきでクドの髪型を僕に——正確には、僕が被つているウイッグに——あわせる。

「うん、やつぱりクーちゃんの髪はさらさらで綺麗なのです！」

「これでどうかな？　みおちゃん」

「……完璧です」

「いいぞ！　すごくいい！」

何故かクド単体を来ヶ谷さんが高速撮影する。

「それでは直枝さんは先ほどと同じように座つてください。能美さんは膝立ちでお願いします。そして、こちらの方を見ながらお互の頬を寄せてください。ただし頬同士はくつつけず、握り拳ひとつ分の距離で止めてください。——はい、それでいいです。あとは直枝さんの右手と能美さんの左手を、お祈りするように組み合わせてください。片方は頬と同じ高さに、もう片方は膝あたりまで下げてください」

「こ、こう——」

「ですか——？」

僕らは、西園さんに言われた通りにした。
「来ヶ谷さん……！」

「うむ！」

いつの間にか報道カメラマンのようになつていていた来ヶ谷さんが、バシヤ
シャ、バシヤシャシャシャ！とカメラを取つ替え引っ替えて僕らを激写した。

「すばらしい、すばらしすぎる！」

「ゆいちゃん、よだれよだれ……」

「いやーもう、倒錯した世界でもアリはアリなんですね」

「——ふたりとも子猫みたいで可愛いなつ」

……今更だけど、僕ら、とんでもない格好になつていいだろうか。

「よし、メモリーカードいっぱいまで撮つたぞ」

カメラからメディアを引き抜いて、来ヶ谷さん。つてそれ、なんか16ギガバイトつて書いてあるんだけど、何枚撮つたのだろう……。

「はい、お疲れさまです。直枝さん、能美さん」

ものすごく満足した様子で、西園さんが僕らをねぎらう。

「わふー、なんだかドキドキしたのです」

「ぼ、僕もかな……？」

ここまでクドと近づいたのは初めてだつたので、ドキドキしたのは確かだ。ただ、頭の中の一部分が冷静に告げていた。それ以上先に進んではいけない、もどれなくなるぞ！——と。

「なんですかネ、この百合ん百合んな空気」
葉留佳さんが、遠い目をしてそう言つた。

「うーん、ぜんぜん禁断じやないのに、禁断の恋みたいに聞こえるのは、なんでだろうね」
頬を赤くして、小毬さんがそんなことを言う。

「さておのおの方、今の撮影データだが……液晶画面でよければ、見るかね？」

「見るよー」

「見よう」

「見ますヨ！」

「見せてください」

来ヶ谷さんの一聲で、即座に集まる小毬さんたちだつた。

僕とクドも、みんなの後ろからその撮影データを眺めてみる。
「うわあ。写真でみるとなんか……」

じつとカメラの液晶画面を見つめて、小毬さん。

「これヤバいつす！ 激ヤバッス！」

おなじような感じで、葉留佳さんもそう言う。

「まるで姉妹みたいだな」

と、鉛。

「……次は水着とか、用意しましようか」

そら恐ろしいことを、ぽつりと呟く西園さんだつた。

僕自身に言わせてもらえば——今すぐそのデータを胸に抱いて可能な限り遠くに逃げ出しあくなる写真ばつかりだつた。いや、クドはすごく可愛いんだけど——だけど……。

「理樹君、なんか顔が赤いよ?」

小毬さんが、そんなことを言つた。

「え、あ、いや——」

クド以外のみんなが見つめる中、僕は咳払いをしてごまかす。

そ、そ、う。とにかく、僕の方がひどい。ひどすぎるんだ。

「クド、これは転送の必要はないんじや——クド……?」

クドは答えない。ただただ、真つ赤になつて液晶画面をじつと見つめている。

「来ヶ谷さん……」

「なんだね、クドリヤフカ君」

「この写真、絵はがきとかにはできないでしようか?」

「それくらいだつたら可能だが、何枚刷ればいいかね?」

「そうですね……では三枚お願いします。私と、おじいさまと、おかあ——」

「ちよつとまつて、ちよつとまつて! クド、それは自分のだけにして!」

慌てて止めに入る僕だった。

ワールドワイドに僕の女装写真が出回るのは、なんとしてでも避けたい。

「駄目ですか？」

「ごく自然に首を傾げて、クド。」

「うん、僕が女の子ならなにも問題はないんだろうけどね」

「いやでもこれは……」

葉留佳さんが、まじめな顔で考え込んでいる。

「その手のフォトコンテストに出せば入賞は堅いのではないのでしょうか」

その後を引き継ぐよう、断言する西園さんだった。

「いやいや、そういうのって、男が出ちゃまずいんじゃないかな？」

ただ僕の名前は女性でもありえなくはない名前なので、もしかすると気づかないと言う怖い可能性が残っていた。

「じゃあその時は理樹くんを女の子ということにして登録するということです」

「ちょっとまってよ！ なんかおかしいよ、それ！」

「あ、いかん。少年のパンチラがあつた」

データを確認していた来ヶ谷さんが、なんの脈絡も無しにそう言つた。

「消してー！ いますぐ消してえ！」

「んなもん見てもなんも嬉しくないですヨ。どうせ普通のトランクスでしょ？」
葉留佳さんがそんなことを言う。

「いや、理樹は子供の頃からずっとブリーフだ」
鈴が、とんでもないことを口走つた。

「なん……」

「……だと！」

西園さんと葉留佳さんが、相次いでそう呟く。

「直枝さん。今の棗さんの発言は、本當ですか？」

「どこか啞然とした様子で、西園さんがそんなことを訊いてくる。

「の、ノーコメントかな？」

逃げを打つことにする僕だった。

「む、これもいかんな。この角度だと普通に女性用下着を着けているのと区別がつかん——」
「けしてええええええええ！」

かつてこれほど絶叫したことがない僕だった。

「あなたたち！ 少し騒ぎすぎよ！」

そこで、寮長さんがいきなり僕らの部屋に踏み込んできた。おそらく、寮長権限で所有できるマスターキーを使用したのだろう。

「……つて、あれ？」

「まずい、ばれた!? 僕は身体を硬直させる。

「あなた、見ない顔ね?」

と、小首を傾げて寮長さんはそう言つた。

「自宅通いの子だ。委員の仕事が長引いたのでクドリヤフカ君の部屋に泊めたのだよ」まつたく淀みのない口調で、来ヶ谷さんがそう言う。

「あら、そうなの。それじや盛り上るのは仕方がないけど……程々にしなさいね?」

「お騒がせして、もうしわけありませんです」

部屋の主であるクドが深々と頭を下げる。

「わかつてくれればいいのよ。それじや、ごゆつくり。でも夜更かししそうで次の日寝坊しないようにね」

そう言つて、寮長さんは帰つて行つた。

「ば、ばれていたなかつた……?」

思わず止めていた息を一気にはいて、そう呟く。

男性である僕を、わかつた上で見逃すということはないだろう。つまり……。

「だから言つたろう」

今の少年はまずばれぬよ。と、来ヶ谷さんが自信に満ちた顔で、そう言つた。

「さて、そろそろ寝るとするか」

その来ヶ谷さんの一言で、みんなが部屋を片づけ、布団を敷きはじめる。その手慣れた具合と布団の量から察するに、普段からこういつた会を開いているのかもしれない。

……そういえば。

「まさか制服で寝ろつてことはないよね？」

「おねーさん的にはそれもありなんだがな」

ちよつと残念そうに来ヶ谷さんがそう答える。

「ほら、誰も袖を通していないジャージだ。女子用だがそれほど困らないだろう」

「うん。ありがとう、来ヶ谷さん」

確かにこれならば、色々と大丈夫だと思う。

「ちなみに上は共通だが、下はジャージ、スペッツ、ブルマと揃っているが、どうするかね？」
「ジャージで！」

「え……」

なんでそこで、西園さんが残念そうな声をあげるのさ……。

「さて、我々は着替えるので後ろを向いてくれたまえ。私はいつこうに構わないがな」

「いや、そこは構おうよ。来ヶ谷さん」

「うーん、理樹君なら大丈夫かな？」

小穂さんまで……」

「うーん、私はちょっと恥ずかしいかなあ……でも理樹くんなら、いいかなあ……」葉留佳さんも葉留佳さんで、そんなことに悩まないで欲しい。

「……十分に堪能いたしましたので、そのお礼と言うことでしたら」

こちらははつきりきつぱりと、自分を見失っている西園さんだつた。

「いや、みんなさ……もうちょっと自分を大事にしようよ」

なんか言つていることが先生みたいな感じだと自分でも思うけど、あえてそう言つてみる。

「だがまあ、減るものではないからな」

「あたしはいやじやーー！」

「わ、私もですーー！」

来ヶ谷さんに対する鈴とクドの反応に、すごくほつとする僕だつた。

「では鈴君とクドリヤフカ君、もしも少年とふたりきりだつたらどうするね？」

「……なに」

「わふ……」

「いやいやいやいや。なんでそこで考えこむのさ、二人とも」

「それだつたら別に構わない」

「だ、断言しちゃうんですかー！ 鈴さん！」

衝撃を受けた様子で、クドが悲鳴に近い声を上げる。

「と、とりあえず精神衛生上とても悪いから、僕はトイレで着替えてくるね」

「いえ、そういうことでしたら……！」

真っ赤になつた顔のまま、クドは目をつぶつて、

「どうぞここで、着替えていつてくださいなのです！」

「いやいやいや！ 自棄になつちや駄目だから！ 自分大事にして、クド！」

——正直、他の人だつたら背中を向ければ我慢できるけど、クドだと絶対に意識してしまふだろう。

そんなわけで、共用トイレの個室に籠もつてごそごそと着替えることにする。……よく考えてみたら、これも滅茶苦茶な話だなあと思うけど、ここまで来たら仕方がないだろう。

「こつちは着替え終わつたけど、そつちはどう？」

どうにかうまく着替え終わつて、クドの部屋をノックする。すると即座に、「んー、おつけーだよ理樹くん。こまりんが、パジャマのズボンをまだはいていないけどは、ははははるちゃん！」

小穂さんの悲鳴が、扉越しに響きわたつた。

「……うん。短絡的にドアを開けなくてよかつたと、心から思うよ」

その後すぐに中に入れてもらつた際に、思わずそんな感想を述べてしまう。

「まあ私は構いませんがネ」

たぶん立場が逆になつたら、そうは言つていられなくなると思う。

「私は構うううー！」

いやそれにしても、よく考えたら男の人にパジャマをみせるのつて、なんだか恥ずかしいね
……」

シンプルな薄紅色のパジャマを着た葉留佳さんが、照れたようにそう笑う。

「う、うーん……そ、うかな？ 着替えとか見られたら確かに嫌だけど……」

こちらはたいして抵抗がなさそうな、白いふわふわのパジャマを着た小毬さん。

「いまさらだな」

猫の足跡にアレンジされている水玉模様の黄色いパジャマを着た鈴にいたつては、そんな感じで切つて捨てていた。確かに子供の頃は一緒に寝泊まりすることもあつた関係だから、本当に今更だ。そして――。

「クドのパジャマ、なんだかちよつと変わつているね」

「はい。色々な国の寝間着を合わせて、さらにちよつとだけアレンジしてみたのです」
上はチャイナドレスというか、ベトナムのアオザイぼくて、下はドロワーズだった。もつとも、ドロワーズは下着のはずであるから、それっぽいズボンなのだろう。

「おそらく、能美さんのパジャマがこの中で一番可愛いという表現が似合うのでしょうか」

そう言う西園さんのパジャマは空色のシンプルなパジャマだつた。

「そして、来ヶ谷さんが一番お色気満点といったところでしようか」「うん、できるだけ気にしないようにしていただんだけどね……」

可能な限りそちらを見ないように、僕。

「ほほう？」

来ヶ谷さんが、挑発するように胸を張る。その格好はパジャマではなくて、素肌の上に少し
だぶだぶなワイシャツだけを羽織つていた。

「いや、あのさ……下になにかはこうよ、来ヶ谷さん」

「はつはつは。だが断る！」

これ以上は決してはかぬよ。と訳のわからないことを来ヶ谷さん。

「大丈夫ですヨ理樹くん、ちゃんともう一枚、はいていますカラネ」

「マイクロスパツツつていうんだよー。裾がほとんどないから短いスカートをはいたときに便利なのです」

と、葉留佳さんと小毬さんが解説してくれた。

「こら、いきなりネタバレはないだろう」

「いや、僕にはすごくありがたかつたよ」

「もう、もう少し少年をときめかせておきたかったのだがな」

少なくとも、そういうのでときめかされるのは、やめてほしいと思う。

「いいから、ねろ」

眠たいのか、少し不機嫌な様子で鈴がそんなことを言う。

「確かに、そろそろ明日に障りますね」と、西園さん。

「それでは、電気を消すのです……」

そう言つて、クドが部屋の照明を切つた。

おやすみの挨拶を交わすと、あれだけ元気にはしゃいでいたせいか、みんなすぐさま静かになる。

僕も先ほどのシャワールームの一件やら大撮影会の一件やらで疲れていたので、徐々に眠気が……。

といつたところで、誰かが僕の布団を踏んだ。

「ふふふつ」

「——なに笑つているのさ、来ヶ谷さん」

おもいつきり声を低くして、そう指摘する。

「いや、クドリヤフカ君を襲おうとしたんだが」

「なをさら悪いからね、それ……ほら、戻つて戻つて」

「仕方がないな。次の機会を待つとしよう」

「いや、そんなものないから」

念のため小毬さんか西園さんに、それとなく注意するよう伝える必要がありそうだった。でないと、来ヶ谷さんがこつそりとクドの布団に潜り込んで……。

「むぐ……わふー……」

「そうそう、そんな感じに——え？　え、えええ!?」

突如、身体に温かくて柔らかいものが触れた。艶やかな亜麻色の髪と、白くきめ細やかな肌——つまりクドが、どういうわけか僕の布団に潜り込んできたのだ。

……。

こ、これは起こすべきだろうか。でもそうしたら他のみんなが起きてしまうかもしれないし

「おかあさん……」

ぽつりと、クドがそんな寝言を呟いた。

そのひとことで僕は硬直していた身体を解き、そつとクドを抱いた。

ぼくのしたことは、たつたそれだけ。でもそれだけで、クドは安心したかのように小さな寝息を返したのだつた

とりあえず、しばらくはこのままでいようかな。

クドの体温を全身で感じながら、そんなことを思う。

翌日の早朝、来ヶ谷さんに起こされたときにはもうクドは元の場所で眠っていた。再び寝ぼけて戻ったのか、それとも気づいて戻ったのかはよくわからなかつたけど、もし気付いていたら——と想像するだけでドキドキしてしまうので、訊かないことにしたのだ。
そして数日後の、放課後。

「あの、リキ」

「うん、なに？ クド」

その日はリトルバスターーズの練習が無かつたのでどう時間をつぶそうかと考えていた僕に、クドはちょっと遠慮がちに、「すいません、あの家具部の倉庫から家具を追加したいのですけど……」

「あ、そうか。もうあの迷宮は攻略しなくても良いけど、家具を運び出すことはひとりじや難しこんなね」

「いえ、今回は小さなものだけなのです。ただその——量が」

現実問題、僕ひとりでも結構きついところがあるんじやないだろうか。

「了解。それなら僕ひとりでもなんとかなりそうだね」

「そう言うわけで、ふたりで許可をもらうべく、女子寮の寮長の許を訪れる。

「失礼しますなのです。あの、寮長さん。家具部の倉庫からまたいくつか持つてきたいのですけれど、いいでしょうか？」

「ええ、構わないわよ」

あつさりと許可してくれる女子寮の寮長さんだつた。

「ありがとうございます！」——あ、そうでした。寮長さん、これ。リキの入部届なのです

「入部届って、家庭科部の？　へえ……」

めずらしいものを見たと言わんばかりに、僕が書いた入部届を手に取る寮長さんだつた。

「直枝君も家庭科部に入るの？」

「ええ、まあ……」

なし崩し的なところもあるけれど、そう頷く。

「えつと、やつぱりまずいでしようか」

「ううん、そんなことないわよ。もちろん部室以外をうろついていたら問題だけど……ん？」

そこで、寮長さんが僕を見つめたまま首を傾げた。

「えつと、なんでしょう？」

なにかその様子が気になつて、僕はそう訊く。すると寮長さんはちょっと困った顔で、「直枝君は知らないかもしねないけど……この前ね、直枝君にちょっとだけ似た子が能美さんの部屋に泊まつたのよ」

「へ、へえ……そうだつたんですか」

クドと一緒に、愛想笑いを浮かべてしまう僕だつた。

「似ていると言つても、雰囲気程度かな。すつごく可愛い子だつたんだけど、よく考えたら、校内で見たことがないのよねえ。能美さん、なにか知らない？」

「え、ええ、ええと……来ヶ谷さんのお友達らしいのですっ！」

その場にいないう来ヶ谷さんに、上手くパスを回すクドだつた。

「そつか、来ヶ谷さんか……あの人のお友達じや、よくわからないわよねえ」

「そ、そうですね……」

背筋に冷や汗が浮いてしまう。顔をまじまじと見られて思い出したらどうしようと、つい余計なことを考えてしまつたからだ。

「それじや、気をつけてね」

そう言つて、寮長さんは倉庫の鍵を渡してくれた。

「ふう……」

寮長の部屋を出て、額の汗を拭う。このまま謎の女生徒として話題になることは是非とも避

けて欲しいところだけど……どうなるのだろう。

「大丈夫ですか？ リキ」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、クド」

「それなら良かつたのです」

「それにしても、あのときのリキは可愛かつたのです。寮長さんのお話で思い出してしまいました」

「あ、うん。ありがとうございます……」

クドの嬉しそうな顔を見ていると、できれば忘れて欲しいと言えなくなる僕だつた。

余談ながら、あの鍵はまたも、例の巨大な鍵にみえるケースに収められていた。寮長曰く、無くさないから重宝している……らしい。

「うええ～！ 理樹くん助けて～！」

家具部の倉庫から出てきた僕らを待っていたのは、涙目の葉留佳さんだつた。
その袖になにかをぶら下げている。いや、正しく言うならば……。
「ちつさいわんこが袖くわえて離さないんですヨ～！」

クドが鋭く息を飲む中、重そうに袖を僕らの方に見せて、葉留佳さん。そこには、小型犬くらいの黒い犬が、葉留佳さんの言うとおり袖に噛みついたままでいた。

「ど、どうしたの。それ」

「例によつて風紀委員から逃げていたら、袖をがぶりとやられたの。それから、ぜんつぜん離してくれないんだよ！」

「いやまあ、それはおとなしく風紀委員に出頭した方がいいんじゃないかな……」

確か、風紀委員が校内の巡回に専門の犬を導入していると聞いたことがあるけど、それはきっとこの子なのだろう。たぶんだけど、葉留佳さんが出頭するまで、この子は袖から口を離さないと思う。

「ちなみに、なにをしたの？」

「え？ イキのいいウナギを生きたままもらつたんだけど、捌きさば方がわからなくて姉御を捜している間、水が入つたままのでつかいビニール袋を持つていたら重いつたらありやしないから、とりあえず共用の洗濯機に入れておいただけですヨ？」

そこをなにも知らない女生徒が洗濯機を使おうとふたを開けて——大変なことになつたらしい。

「……うん。それはおとなしく投降した方がいいと思うよ？」

「ええー、理樹くんまでそんなこというの？」

葉留佳さんには申し訳ないけど、誰に言つてもそう答えると思う。

と、そこへ背後から重低音を効かせた犬の吠え声がした。振り返れば、大きな犬がいつのまにかすぐそばに佇んでいた。その目は袖に食らいついた小さな犬——いや、葉留佳さんをじつと見つめていた。

「で、でつかいのまできたー！ こうなつたらクド公、持ち前のその犬っぽさでなんとかしてう！ ……クド公？」

葉留佳さんが声に疑問の色を混ぜる。そういえば、先ほどから特に反応が無かつたけど——と思つた次の瞬間、

「ヴエルカに、ストレルカ！」

小さい犬と大きな犬を交互に指さして、クドはそう叫んだ。

「あれ、もしかして知り合いなの？」

「知り合いもなにも、ヴエルカもストレルカも、私が育てたのです！」

胸を張つて、クドはそう言つた。

「へえ、そうだつたんだ……」

「ルームメイトになつたときから、風紀委員の二木さんに訊こうと思っていたのです。でもまさか、お仕事中に会えるとは思いませんでした！」

どこか嬉しそうに、クドはそういう。

「それなら話は解決だネ！ クド公ー！ このわんこたちなんとかして！」
 助かつたとばかりに、葉留佳さんがそう言う。けれどクドは首を横に振つて、
 「駄目なのです。仮に私が離しなさいと言つても、ヴエルカとストレルカは離さないのです」
 きつぱりと、そう答えた。

「クド公、それってなんか悲しくないの？」

「いえ、むしろちゃんとお仕事をしている証拠ですから、誇らしいのです！」

はつきりとそう言うクド。その仕草は、なんというか……どこかお姉さんっぽかつた。

「というわけで三枝さんは風紀委員に出頭するべきなのです。それまで、ヴエルカは決して口
 を離しませんし、ストレルカはどこまでも追いかけるのですよ？」

そのクドの忠告が決定打だつたらしい。

「わかったよう……はるちゃん死すともウナギは死せず！」

そんなことを言いながら、葉留佳さんは校舎の方に戻つていった。

「ヴエルカ、ストレルカ！ あとで一緒にお茶を飲みましょう！」

それに返事をするように、二頭の犬はしつぽを一度だけ振つたのだつた。

「あら、出遅れたようね」

そこへ、入れ違いのように二木さんが現れる。
 「葉留佳さんを捜していたの？」

「ええ。かわいそうに、一年生の子のTシャツがウナギのぬめりで汚れちゃつたからね
それは——もう弁護のしようがない気がする。

「それで三枝葉留佳は？ ヴエルカを抱えたまま、また逃げたの？」

呆れ半分と、何故か自嘲気味の苦笑を浮かべてそう訊く二木さん。

「ううん、諦めて風紀委員のところに行くつて言つていたよ」

僕がそう答えると、

「へえ、あの三枝葉留佳が……か」

どこか驚いた様子で、二木さんはそう呟いた。

「それはまたなんというか——貴方たちのおかげなのかしらね？」

「きつとヴエルカとストレルカのおかげなのです」

誇らしげに、クドが胸を張つてそう答える。

「だとしたら、あの子たちと貴方たちのおかげなのかもね……さてと、そうと決まれば戻らないといついけないわ。それじや

「あ、二木さん！」

いつものことだけど、僕らと話す時間はあまりないらしい。さつと踵を返そうとする二木さんを、クドは大きな声で呼び止めていた。

「どうしたの？ クドリヤフカ」

「すっかり忘れていました。これをお渡ししようと思つていたのです」

そういうつてクドがポケットから取り出したのは、自分のもので見慣れている部屋の鍵だつた。

「別にいいのに。私は委員の仕事で、あの部屋を空けがちなんだから」

「いえいえ、そういうわけにもいきませんです」

即答するクドに、二木さんはちよつと考えると、

「まあ、クドリヤフカがそういうのなら、受け取つておくわ」

口許だけで微笑んで、そう答えたのだつた。

「それでは、せつかくですからキーホルダーにつけていつてください」

そう言つて、クドがマントのポケットからじやらじやらと出してきたのは——マスコットのついたキーホルダーの束だつた。その数は、両手の指では足りないだろう。

「……色々持つているのね」

「はい。色々な国に行つたときに集めたものなのです。二木さんには——これが特にお勧めなのです！」

「こ、これは……」

そのキーホルダーを見て、僕はおもわず絶句してしまつた。そのマスコットは、かなりリアルな熊の造形なのに、体毛が黄色になつていて、おまけに鼻先が鋭いクチバシになつていたのだ。



「ヒヨコグマというのです。かわいいのです！」

えー、と言いそうになるのを、かろうじてこらえる。

その、クドには悪いけれどリアルすぎてあまり可愛いとは言えない。というかぶつちやけてしまうと結構怖い。

「……可愛いわね」

ええっ！

思わず言葉に思わず飛び上がりそうになってしまった。

いま、二木さんはなんて言つた？

「せつかくだから、これにするわ」

「はい、可愛がつてあげてくださいなのです！」

クドがぺこりと頭を下げる。そんなクドに二木さんはもう一度口だけ笑みの形になると、キー ホルダーにクドから貰った鍵とスカートのポケットから出した何かの鍵を束ねると、大事そ うにしまつて、校舎に入つていったのだつた。

……うん。なんというか、二木さんの意外な一面を見ることができたような気がする。

國らずもクドがこの学校に転入した理由の一端を知つた僕であつたけど、それから少しして

クドのコンプレックスまで知ることになる。それは、いつも通り野球の練習を行つていたときのこと——。

「うーん」

来ヶ谷さんとキヤツチボールをしていた葉留佳さんが、突如悩ましげな声をあげた。

「どうしたのかね、葉留佳君」

キヤツチボールそのものは継続したまま、来ヶ谷さんがそう訊く。

「いやあ……どうしたら姉御みたいになれるんですかねえ。特にその胸！」

いきなりとんでもない話題が飛び出していた。

「わふー……。今のは聞き捨てならないのです……」

そこへ、僕とキヤツチボールをしていたクドが妙なオーラを身にまとつて、ふたりの前にゆらゆらと近づいていく。

「そもそも三枝さん！ それだけあつてさらに欲しいとは、贅沢なのです……！」

なるほど、確かに葉留佳さんは制服の上からでもそれとわかるほど胸が豊か——つて、なにを言つてゐるんだ、僕は！

「姉御姉御、今一瞬、理樹くんの視線がいやらしかったような気がしますヨ！」

顔に出たというより、視線から気づかれてしまつたらしい。葉留佳さんが来ヶ谷さんにこれ見よがしに囁きかける。

「少年は発じよ——いやいや、思春期なんだ。大目に見てやつてくれたまえ」
 「今とんでもないこと言おうとしたよね、来ヶ谷さん」

「はつはつは。生き物の本能としては至極真つ当なことだ。あまり恥じる必要はないのだよ、少年」

こつちが赤面しそうな台詞を堂々と言えるのが、ある意味羨ましいと思えてしまう。

「うーん。まあ胸見られても直接見られた訳じやないしネ。いつかいつか」

妙にさばさばした様子で、葉留佳さんはそんなことを言う。

「つかこまりんの方がおつきいし！ ほれほれ！」

「ほわああああ！ いきなり羽交い締めにしないで！」

偶然だと思うけど、葉留佳さんがそうしているおかげで、余計に強調されてしまう小毬さんだつた。

「『こ』、これは……その豊かさ、その張り！ 最高だよ、小毬さん！」

「——来ヶ谷さん、僕の声音を真似てなに言つているのさ」

しかも真つ正面に回つてガン見しているし。

「つていうか姉御、姉御がこの中じやトップじやないですか」

と、やつている側だというのにあきれられた様子で葉留佳さんがそう言う。
 「ん？ ああ。そういえばそうだつたな」

あいにく自分のものには興味がないんだ。と、来ヶ谷さん。まあ、確かに自分のものに興味があつても困るけど……。

「能美さん……」

そこで、こちらも奇妙な気配を身にまとつた西園さんがクドに握手を求める。

「我ら生まれたときは違えども、死すときは同じとき、同じ場所であることを願わん……」

「——なのです！」

ひとり足りないのに、桃園の誓い!?

今ここに、傍目から見るとなにがなんだかわからない——いや、ある意味一目瞭然? ——
な同盟が締結された。

「さあ、鈴さんも……!」

「あたしはおっぱいに興味はない」

「いや、女の子がおっぱいとか言うのはやめようね」

それでもストイックなところは共感が持てる鈴だつた。

「では直枝さんで」

「僕に賛同を求めてどうするの!?」

それは確かに、リトルバスターズの男性陣で、一番胸囲が無いのは僕だけ! 自分で言つていてちょっと悲しくなつたけど!

「まあ、ちょっとしたジョークです」

「そうであつてくれてとても嬉しいよ、西園さん」

「どのみち、鈴さんや直枝さんの協力が得られずとも負けるわけがありませんから」

「その割にはしつかりとカウントしていたんだ!?」

時々思つてしまふのだけれど、リトルバスターズの女性陣は僕を男性として見ていないんじやないかと思うときがある。

「おお？ やる気かみおちん！ こつちの方が人数多いぞー！」

「お願いだから私を数に入れないので〜」

半泣きの小毬さんだつた。

「……ふつ」

「鼻で笑うかー！」

珍しく挑戦的な西園さんに、葉留佳さんがヒートアップする。

「皆さん大事なことを忘れていてます。要はどちらが優位かというよりも、どちらが好まれるか、ということに」

「ほう、それはつまり……」

それだけですべてを察したのだろう。来ヶ谷さんが愉快そうに笑う。

「つまり、少年好みを確認することだな？ 大きいのが好みか、小さいのか好みか

——あれ？ こつちに飛び火した？

身構える暇もなく、鈴以外のバスターーズ女性陣の視線が僕に突き刺さる。

「リキ……リキは、どつちが好きなんですか？」

クドが、上目遣いになつて訊いてくる。こ、これは……。

なんとも言えなくて、僕はどうまぎしてしまう。

「あれ？ 理樹くんが赤面していますよ？」

と、葉留佳さん。

同時に、西園さんが小さくガツツポーズを取つた。

「うむ……！」

そして、敵方（？）だというのに僕とクドを交互に見ながら来ヶ谷さんが満足そうに頷く。

「なるほどー、理樹君は優しいねー」

来ヶ谷さんと同じように僕らを見た小越さんがそう言つたところで、僕はすべてを察した。

それはつまり、僕の考えが思い切り顔に出ちゃつてるということで……。

「できればその、はつきりと言つて欲しいのです」

「クドが真っ赤になつて、そんなことを言う。

「い、いやあの……鈴、助け——つてなに聞き耳立てているのさつ」

「う……うつさいわぼけー！ そもそも助けを求めるのはあたしの役割だろつ！」

そう言われてみればそうだけどでも……本人の目の前でクドのバストサイズが好みですって、言える訳ないじやないかつ！

「ん？ でもクーちゃんって飛び級で転入したんだよね？ まだ成長の余地があるんじゃないの？」

困った僕を救つたのは、そんな小毬さんのひとことだつた。

「あ……！ そうなのです！ そうなのです！」

その指摘を受けて、喜色満面になるクド。つて、それは――。

「たつた今、関ヶ原の合戦にて小早川秀秋に裏切られた石田三成の気持ちが、痛いほどよくわかりました……」

先ほどとは別種の、それでいてさらに強烈なオーラを漂わせて、西園さんがクドに背中を向けた。

「勝つた！ 第三部完！」

葉留佳さんが勝手にシリーズを終わらせようとした。

この『スーパー・バスト大戦』（言うまでもなく命名者は来ヶ谷さん）から僕とクドは、お互い

を意識し始めていたんじゃないかと思う。

その日も、クドの枕がどうしても合わないというので専門店へと歩いているところだつた。今クドが使つている枕はおじいさんがプレゼントしたもので、実物を見せてもらうと、なんと時代劇で見るような木製のものだつた。クドは今までその枕で、よく我慢できただと思う。

「あ、少し待つていただけますか？ リキ」

郵便局の前で、クドはそう言つた。そしてマントのポケットから、封筒を一通取り出す。

「それって、エアメール？」

「あ、はい。 そうなのです」

エアメール特有の模様が付いた封筒を胸に抱き、クドは小さく笑う。

それはきっと、この前買つたレターセットによるものだらう。

「それでは、ちょっとだけ待つていてほしいのです」

「うん。急がなくていいからね」

そう言う僕にペこりと頭を下げて、クドは郵便局に入つていつた。

——しばらくして。

「おまたせしました」

「ううん、そんなに待つていなかつたから」

実際、五分も経つていなかつたと思う。

「それでもごめんなさいなのです。ちょっと郵便物をポストに入れてこなければいけないこと

を、思い出しまして」

「なんだ……」

「それは家族への手紙なんだろうけれど、なんと書いてあるのかが、少し気になる僕だつた。
「それで、目的のお店はあとどれくらいなの？」

再び歩き出しながらそうたずねる。

「はい、もうすぐなのです。——ほら、見えてきたのです！」

クドの指さした先には古き良き洋裁店といった感じのお店が建っていた。ただ、その看板には枕のイラストが描いてあつたから、本当に枕専門店なのだろう。

早速、ふたりで店内を散策してみる。

「色々な素材があるんだねえ」

店内の自作枕コーナーで僕はそう呟いた。定番と思われるものから、こんなものも使うんだ
と思つてしまふものまで、色々なものがある。特にストローを小口切りにしたようなものに驚
かされたけど、クドに言わせると通気がよくて、夏場に向いた素材であるらしい。

「最近の枕だと、低反発素材とかが流行つていてるつてきいたけど、他にも色々あるんだね」
「おじいさまの枕より前に一通り試してみましたけど、私はソバガラのが一番あうのです」

「ソバガラ？」

「はい。文字通りおそばの粋殻もみがらなのです。さらさらして気持ちいいんですけど、少しずつ補充しないといけませんし、定期的にすべて入れ替えないといけないんですよ」

「それはなんだか、大変だね」

「はい。でも、その不便さを楽しめるようになれば、それはとっても素敵だと思うのです」

「そうか……うん、そうだね」

それは、いわゆるスローライフというものだろう。

「なんかいいね。そういうの。すごくクドに似合っていると思うよ」

「わふー……。そう言つていただけると、すごく嬉しいのです。リキ」

「そう言つてもらえると、僕も嬉しいよ……」

——そこでお互い、照れてしまう。

なんというか、デート中の会話みたいだつた。

「せ、せつかくだから、僕も買ってみようかな？」

それがちょっとすぐつたくて、話題を変える僕。

「そ、そうですね。それでは、リキはどれにしますか？」

クドも、そう思つていたみたいで、店内にあるいくつかの枕を指さしてみせる。

「そうだね……これにしようかな？ お店のお勧めみたいだし」

先ほどの低反発素材の中から、自分の頭にあつたサイズのものを選び出す。

「低反発素材ですか……」

「クドは、試したことある?」

「はい。この国に来る前に一度試したんですけど、寝ている間にうつかりうつ伏せになつてしまつて、息ができなくて大変だつたのです」

「それはまた……なんというか」

ある意味器用なクドだつた。

「おじいさまも言つていたのです。クーニャにはまだ早かつたようだねつて……」

「うーん、早い遅いというより、あうあわないの問題だと思うけど——クーニャつて?」

「あ、それはおじいさまが私のことを呼ぶときの名前なのです」

「へえ……なんかすごく良い響きの呼び方だね」

「あ、ありがとうございますなのです……わふー」

——ああつ、なんだかまたデートっぽくなつてる!

そんな感じのつかず離れずといつた僕らの仲は、それからもうしばらく続いた。その間にリトルバスターズの試合があつたり、みんなでホットケーキパーティを開いたりしたけれど、その間も僕らの仲は特に変わらなかつたのだ。

だから、普通にある学校行事で大きく変わるなんて、思つてもいなかつた。それは、一緒に枕を買ってから二週間ほど経つたときのこと。

その日のホームルームで、実力試験のアナウンスがあつた。

試験と聞いて喜ぶ人はごく少数だと思うし、現に僕のクラスで楽しそうにしている人は皆無だつた。リトルバスターズの中でも、ため息をつくメンバーの方が多かつたと思う。そのなかでも、クドの落ち込み具合は半端じやなかつた。

「リキは……どうしました？」

昼食時の食堂で、三回呼吸する度にため息を一回混ぜながら、クドは僕にそう訊いてきた。

「僕は、もう申し込みまで済ませておいたけど」

そう、僕は早々に申し込んでいた。この試験を受けなくとも成績には響かないけれど、その場合、考查対象が学期末の試験だけになる。であれば、リスクを分散させるために、受けておいた方がいいと判断したのだ。

「実力試験……ですか」

ふたたび、ため息をつくクドだつた。

「私は、テストという勉強形式が苦手でして……」

減点方式にどうしても慣れられないのです。と、クド。

「クドつて、本番には強そりだけどなあ」

「そ、そんなことないのです！」

わたわたと手を振つて否定する。

「むしろ、本番にあがつてしまふ方なのです。特に、英語が……わふー」

「ああ……」

僕も一番最初に誤解していたけれど、クドは日本語ほど英語が上手くない。本人もそれを気にしているようで、一生懸命勉強しているのだけれど……。

「あれ？」

そこで声をかけてきたのは、上級生の女子三人組だった。

僕にもクドにも面識はない。だというのに、その三人は好奇心丸出しの目でクドを見て、「見てみて、かわいい！ 外人の女の子！」

いや、外人つて……。

「わー、すっごいかわいい」

「あれ、この子ひじき食べてると!?」

「え、でもあれつて外国でも食べるの？」

——ちよつと。

「ねえねえ、日本語わかる？」

「英語じやないの？ えつと『どうして日本食食べているの？』」

……もう、我慢できない。僕が立ち上がろうとしたときだつた。

「失礼します」

割り込んできたのは、二木さんだつた。

「先輩方は、東スラヴ語群つてご存じですか？」

「え？」

三人組のうちのひとり、やや遠目に見守つていた上級生が、さつと顔を青ざめた。

「それって、どういう……」

意味がわからなかつたのだろう。クドに質問していた方の上級生が、質問に質問を返す。
「では、質問を変えます。先輩方は、アジア人だからと言つて、アジア各国の言葉を話せます
か？」

「あ……」

それで通じたらしい。残りのふたりも、やつと意味がわかつたようだつた。

「ごめんなさい、私達、そういうつもりじゃ……」

「気にされなくとも、大丈夫なのです」

笑顔を浮かべて、クド。

でもそれは、弱々しかつた。

「本当に、ごめんなさいっ！」

深く頭を下げて、上級生たちは去つていった。

「——ありがとうございました、二木さん」

「……当然のことを、したまでよ」

僕を一瞬だけ見て、二木さんも立ち去つた。

「クド……」

「今の人たちは本当に、悪くないのです」

ゆつくりと箸を置いて、クドはそう言う。

「この髪と目の色です。そんな私がこういう風に生活していたら、どうしても、変に見えてしまうのです」

「そんなこと……ないのに」

「少なくとも、リキが苦しむ必要はないのです……」

情けないことに、逆にクドに慰められてしまう僕だつた。

「でも、そのリキの気持ち、とても嬉しいのです」

僕の目を真つ正面から見て、クドは言う。

「ありがとうございます、リキ」

——僕はクドを抱きしめたくなる衝動に襲われた。けれどここは食堂。みんなの目がある手前、どうにかそれを抑えつける。

「そんなことよりも、今は実力試験のことを考えましょう」

正直、そつちの方をなんとかしないといけないのです。と今度こそ困った顔で、クドは言う。

「なにか、僕にできることはないのかな」

「えっと……特に思いつかないので。英語が苦手なのは確かですけど……効果的な勉強方法が思いつきません」

効果的な勉強方法？ それなら……。

「それじゃあ、リトルバスターーズのみんなに習つてみるっていうのはどう？」

「それは……とても心強いのです！ でも、いいのでしょうか？」

「大丈夫だよ」

心配そうに僕を見上げるクドに、確信を持つて言う。

「お互いがお互いの苦手なことを習つて、得意なことを教えればいいんだからさ」

そう、恭介や真人、謙吾に鈴と一緒に居たときは、こうやつて勉強してきたのだ。

それをみんなと——そしてクドと一緒にできれば、きっと楽しくなる気がする。

結論から言うと、この僕の提案はリトルバスターーズ全員から賛同を得ることができた。

そのときのクドの表情は、今までの中で一、二を争うほど、すごく嬉しそうで……僕も思わず笑顔になってしまうほどだった。

「簡単に言つてしまおう」

英語の講師を引き受けた来ヶ谷さんの第一声が、それだつた。場所は空き教室を勝手に拝借している。そして講師役の人が教壇に、それ以外のリトルバスターズのメンバーが、机と椅子を用意してそこに座るという算段になつていた。

「英語というものはだな、言つてみれば自転車と同じだ」

「じ、自転車ですか？」

クドが素つ頓狂な声を上げる。

「そう、自転車だ。いいかね、能美女史。誰しも最初は自転車に乗れない。これはわかるかね？」

「あ、はい。そうですね」

「だが、練習を繰り返すうちに、ある日乗れるようになるわけだ」

「それはわかるのです。私もそんな感じでした」

「ここで思い返してみて欲しい。その後自転車に乗る乗らないに関わらず、君は再び自転車に乗れなくなつたりしなかつただろうか？」

「それ……は……」

クドが考えこむ。

「私の場合、自転車を走らせられない山岳地域の国に数ヶ月住んでいたことがあります。でも、

そのあとに住んだ国で自転車に乗つても、バランスを崩すことはありませんでした

「そうだろうな。……ああ、安心したまえ。おそらく大数の人間がそうだ。つまり私が言いたいのはだね、能美女史。英語も自転車と同じく、研鑽を積んでいればある日を境に喋られるようになり、そして一度身につけたらそう簡単には忘れることがないということだ。『そうだろう？ 小毬君』」

来ヶ谷さんの言葉の最後は英語になつていた。少し時間をかけてそれを翻訳する僕であつたけど、話を振られた小毬さんはそんな様子を微塵も見せずに、

『うーん、それはちょっと極端じやないかなー？』

丸々英語で答えていた。

『そういう割には、きつちりと話せているようにみえるのだが？』

『えー、そんなことないよー。それにゆいちゃんんだってちゃんと話せてるし』

『ふむ、小毬君にそう言つてもらえると光栄だな。だが見てみたまえ、少年達は呆然としているぞ？』

『え？ そうなの？』

こつちをみて首を傾げる小毬さん。僕はかろうじてニュアンスがわかつたけれど、クドは

「な、なにをおつしやつているのかさっぱりわかりません……」

既に、目を回しかけているところだつた。それでもそれは眩しく映るらしく、「でもおふたりとも、まるでねいていぶみたいですよー！」

賞賛100パーセントの視線で、クドは来ヶ谷さんと小毬さんを絶賛する。

『ふむ、では。能美女史と×××したり××な×××を×でねつとりと×××××たい……』
『ゆいちゃん！ 通じないからってなに言つてているのー！』

『うむ、言つて少し興奮した』

『そこは恥ずかしがるの！ ふしだらは、めつ！ だよーー。』

『……すまない、もう一回言つてくれ』

『ふしだらは、めつ！ だよーー！』

『ぐはっ……これはたまらん』

『ぐはっ……これはらまらん』

わざわざ二ヵ国語放送になつて悶える来ヶ谷さんだつた。

「わたしはヒアリングしかできませんが……」

と、西園さん。

「おふたりが英語で普段と同じように話せることは、そう簡単にできるわけではないことはわかります」

「みおちゃんも、言いすぎだつて」

すこし照れた様子で、小毬さん。

「なんだかよくわからんが——」
「ぼそっと、鈴が言う。

「英語は、慣れか」

「うん。要点はすごくあつてているよ。すごくあつてているけど、ノートに『なれろ』とだけ書くのは問題かな……」

それで英語ができるようになるのなら、誰も苦労しないと思う。

「よつしや！ 英語はこれでクリアですヨ！」

どこまでも他力本願な葉留佳さんだつた。

「ぐかー……」

そして、初っぱながら熟睡している真人だつた。

「歴史は繰り返す……と言いますが」

と、歴史を引き受けた西園さんは淡々と言う。

「古来から、男性同士のトラブルというものは——」
「ストップ！ ストップ西園さん！」

いきなり暴走を始める西園さんを止めに入る。

「なんでいきなりそつちの方に持ち込もうとするの」

「趣味と実益を兼ねています」

「ぶつちやけちゃうんだね……でも、できればマイルドにならないかな？ その、クドもいることだし」

「——失念していました」

小首を傾げるクドを見て、小さく咳払いする西園さんだつた。

「……続けます。その、男性同士でなくとも、古代の英雄は判断を誤るときがあります。時には——それが破滅をもたらすこともあるのです」

実例を挙げれば枚挙に暇がありません。と、西園さん。

「実はこれ、実力テストの日本史、世界史においても適用されます」

そう言つて、西園さんは黒板に丁寧な字で該当するものを書き記していく。

「おおー、結構あるんですね」

と、葉留佳さん。

「つまり人間は、いつまで経つても進化できない、エロスな生き物だということだな」

来ヶ谷さんが、身も蓋もないことを言う。

「うーん、それはちょっと違うような」

「神北さんのおつしやるとおりです。人間は、歴史という形で過去の過ちを蓄積し、予防、改善ができるのですから」

「なるほど、な」

感慨深そうに、来ヶ谷さんが腕を組んで深く頷く。

「ですから、皆さんもなにかの決断を迫られたときには、よく考えてください。それが自分のためだけになるのか、相手のためだけになるのか、それとも両方の幸せに繋がるのか——を」

その西園さんの言葉に、みんなが頷いて応える。

「すがー……」

そして、初っぱなから熟睡している真人だつた。

「これだけは自信があるのですつ！」

クドが急に活き活きとなつた科目は、地理だつた。

「では、まずはヨーロッパの気候からなのです。私の住んでいたロンドンですが——」

それから、色々な国の色々な都市、町、村の話が飛びだしてきて驚かされる。外国暮らしが長かつたとは聞いていたけれど、ここまでたくさんの国を転々としているとは思つてもいなかつた僕にとって、それは一種のカルチャーショックであつたのだ。

それにしても、クドは教えるのが上手だつた。やはり、知識だけで知ることと、實際に行つたことがあることとは大きく違うらしい。それだけクドの説明する各国の風土や氣候、そしてなにより雰囲気には、臨場感を伴つていた。

「質問いいかな？」

「はい。なんでしょうか、リキ」

「クドは、どこで生まれたの？」

「テヴアなのです！」

さらに活き活きとなつて、クドはそう答えた。

「ここがテヴア共和国なのです。大抵の地図には載つていませんが、キリバスからこれくらい、サモアからこれくらい、そしてツバルからこれくらい離れているのです！」

黒板に張り付けた大きな世界地図の（手が届かないでの踏み台を使って、それでも少し足りないので精一杯背伸びして）太平洋上的一点を指さし、クドはそう説明した。

「ちなみに今は独立していますが、もとはロシア領でした。だから私も、ロシア系なのです」

「はいはいクド公先生、質問！」

早速葉留佳さんが手を挙げる。

「ロシアの領土だつたつてことは、ロシアの人がたくさんいたつてこと？」

「はい、そうですよ。最盛期には人口の半分以上が『るーすき』——ロシア人だつたのです」

さすがというかなんというか、クドは葉留佳さんの質問に淀みなく答える。

「でもそれってちょっと変じゃない？ ロシアって北の国でしょ？ なんで南の島に領土があつたの？」

「それは別に変ではないのです」

丁寧に答えるクド。

「大航海時代や帝国主義と呼ばれる時代に、列強と呼ばれる大きな国々が、次々と領土を拡大していくのです。テヴァアが元ロシア領なのも、その名残なのですよ」

「ふ、ふーん……」

あきらかにわかっていない様子の葉留佳さんだつた。

「クドリヤフカ君の説明を補足しよう。例えば映画『南太平洋』の舞台にもなり、リゾート観光地として有名なタヒチは、現在もフランス領だと、来ヶ谷さん。続いて西園さんが、

「先ほど能美さんがおつしやつたサモアですが、こちらはアメリカ領となっていますし、インドから少しだけ南にあるチャゴス諸島はイギリス領となっていますね」

そう説明してくれる。

「お二方とも、ありがとうございます！」

クドが来ヶ谷さんと西園さんに礼を言つた。

「葉留佳さん、わかつた？」

「ううん、ぜんぜんわかんない！」

……ああ、やつぱり。

「テヴァーの主産業は、観光と宇宙開発なのです。特に宇宙開発は、ロシアの長い宇宙開発ノウハウをそのまま惜しみなくつぎ込めたため、すごく発達しているのですよ」

もつとも、知名度はそれほどでもないですけど……とクド。

「そのクドんちがなんでロケット打ち上げで賑わっているの？」

葉留佳さんの質問は、僕も疑問に思つたことだつた。元とはいえ、ロシアからあまりにも離れているのに不便なんじやないかと思うのだけど……。

「それも簡単なことなのです。打ち上げ基地が赤道に近ければ近いほど、地球の遠心力を利用できるからなのです」

——あ、なるほど。

「……なぬ？」

でも、葉留佳さんは理解できなかつたようだ。

「雨の日に傘を回転させると雨粒が外側に飛び出るでしょ？ それと一緒に、地球も回転する一番外側——つまり、赤道付近だと遠心力が強く働くんだ。それとロケットの推進力を足せば、ロケット自体を軽く、燃料を少なくすることができる。……そうでしょ？ クド」

「はい！ その通りなのです」

さすがはリキなのです。と、クド。

「むがー！ わつからーん！」

暴れる葉留佳さんだつた。

「まあクド公んちが、すごく複雑な歴史を持つているつてのは、わかつたかな？」

「それで十分なのです」

そもそも、地理でテヴァが出てくることはまずないですから、と少し寂しそうにクド。

す

そう締めくくるクドに、僕らは深く頷いたのだつた。

「オレは覚えたぜ……ぐー」

真人がそんな寝言を呟く。

「クーちゃん、クーちゃん」

リトルバスターーズの勉強会が終わつた後、小穂さんがクドを呼び止めていた。

「はい。これどうぞー」

「小毬さん、これは？」

手渡されたりングでまとめられたカードの束を胸にして、クドがそう訊く。

「英語の単語帳だよー。さつきの勉強でクーちゃんが苦手そうだった単語をまとめておいたの」「わふーー！　あ、ありがとうございますなのです。小毬さん！」

感きわまつたような声で、クドがお礼をする。

「いいのいいの。実力テスト、頑張ろうね」

「はい。小毬さん、ありがとうございました！」

何か用事があるのだろうか、屋上の方へと小毬さんは歩いていった。

「——リキ、私頑張るのです」

小毬さんの背中を見つめながら、クドは静かにそう言う。

「うん。そうだね」

おそらく、今のクドは自分のためだけではない。こうして応援してくれる小毬さんや、授業をしてくれた来ヶ谷さんや西園さん、そして一緒に勉強をしたリトルバスターズ全員のことを考えているのだろう。

——その中で、僕はどの位置にいるのだろう。クドにとつて、僕はどんな存在なのだろう。そもそも、僕はクドに——。

ふと、そんな詮無きことを考えてしまう。

「あの、リキ。お願ひがあるので……」

そこで、僕は現実に引き戻された。

「あ——うん。なに？」

そんな僕のおかしな様子に気付かず、クドはちょっと伏し目がちに、「もしよかつたら家庭科部で補習をしませんか？」

「え……あ、うん。それはいいね」

なんとなく僕のいるべき立ち位置がわかつて、少し声が弾む。

それに本音を言うと、もうちょっとクドの話を聞きたかったのだ。

そういうことで、僕とクドは家庭科室の部室にやつてきたのだつた。
「……色んな国に行つたのです」

いつものようにお茶を飲みながら、懐かしそうにクドは言う。

「雲がいつも空を覆つていて、滅多に日の射さない国もありました。逆に、雲ひとつ無い青空がずっと続く国もありました。いつも暖かい雨が降り注ぐ国もありましたし、冷たい雪に閉ざされている国もありました。木々だけが生い茂る国もありましたし、見渡す限り砂と岩の荒れ地しかない国もあつたのです」

ひとつひとつの国を思い出すように、クドは言葉を続けていた。

「目を奪われるような自然を持つ国、圧倒されるような大都會を擁する国、それらが調和され

た国とかも見てきました。それでも、私にとつて一番好きな国は……テヴァなのです」

「はい、そうなのです。テヴァにいた時期が一番長いのです。もつとも、ずつとということではなくて、とびとびで……ということになりますけど」

僕の質問に、クドはそう答えてくれた。

「それほど広くはない島ですが、よく晴れた日には遠くの島々を望めますし、広くはありませんが白い砂浜もあるのです。植物はそれほど多様化していませんが南国特有の大木に繁る葉は強い日差しを遮ってくれますし、産業はそれほどでもありませんが、宇宙開発はやっぱり随一なのです」

その風景を思い出すように、クドは目を瞑つて続ける。

「特に、ロケットの打ち上げは壮観なのです。轟音と共に白い煙がずっと——そう、宇宙にまで届くかのように続していくのは一度みたら忘れられません。あれを見て、私は——」

そこでクドは、はつとしたように目を開いた。そして僕の顔を見ると、はにかむように笑つて、

「話が長くなりました。勉強を続けましょう」

「あ、うん……」

正直、もつと聞いていたかった。

いや、正確にはどこか遠いところを目指すようなクドに、見とれていたのだ。もつと、その蒼い澄んだ瞳を見つめていたかつたのだけど……それはまたの機会にしようと思う。とりあえず今は、実力テストの攻略が最優先だつた。

それからの数日間は、あつという間に過ぎていつた。放課後はみんなで勉強会。さらにその後に僕とクドだけでこつそりとおさらい。それを繰り返していくうちに、クドは実力をめきめきと上達させていく。そして――。

「リキ、やりました！ 全教科、赤点回避なのです！」

試験本番から数日後、帰ってきた得点表を手に、クドは全身で喜びを表しながら僕にそう報告してくれた。

「おめでとう、クド」

試験当日の時は朝食まで岩のように固まっていたクドであつたけど、直前で随分とリラックスしていた。本人は本番に弱いと言つていたけど、そうではなかつたらしい。

「なにか、ほしいものある？」

「ご、ご褒美ですか？」

「うん、そうなるかな?」

僕がそう言うと、クドはしばらく難しい顔をして考え込み——ふと、表情を緩める。

「リキ。ご褒美でしたら、もういただいたのです」

「え?」

「試験当日の朝『クドならきっとできるよ』ってリキは言つてくれました。だから私は、下手に力を入れなくて済んだのです。だから……リキからはもうご褒美をいただいているのです」

氣付かなかつた。

本番直前でクドがリラックスしたのは、僕の一言だつたんだ……。

「それじや、もうひとつおまけにどうかな?」

少しかがんでクドと視線を合わせ、僕はそう訊いてみる。

「も、もうひとつ……ですか? え、えーと……その……」

再び難しい顔で考え込むクド。

「——それでしたら、その——で、でででーとがいいです……」

「デート!?

思わぬ単語に、思わずそう聞き返してしまった。

「やつぱり駄目でしようか?」

「いや、そんなことないけど……」

どうしよう、僕は基本的に誰かについていくことが多かつたから、とつさにエスコートでき
そうな場所が思いつかない。

「あの、リキ」

そんな僕を知つてか知らずか、クドは再び僕に声をかけていた。

「それっ！」

クドが勢いよく、フライングディスクを投げる。

するとストレルカが、人のいないグラウンドを矢のように駆け抜けて、危なげなくキヤツチ
した。

矢のようにと言つたけれど、ストレルカの名前の意味はまさに『小さな矢』であるらしい。
教えてくれたクド曰く、名付けたときはヴエルカよりもずっと小さかつたそうだ。
「さすがストレルカなのです！」

クドが小さく飛び上がる。

そこへ、ヴエルカが自分にも投げてほしいとばかりに鋭く吠える。

「順番なのですよ、ヴエルカ。……ほら、ストレルカが戻ってきたのです。行きますよ……

それっ！」

再び勢いをつけてディスクを投げるクド。

途端、ヴエルカのその名前に反した黒い体躯が——ヴエルカは『白』という意味だそうだ
——弾丸のように飛び出していき、ストレルカと同じく危なげなくキヤツチした。

「僕も投げていいい？」

こちらに向かつて駆けてくるヴエルカを迎えながら、クドにそう聞いてみる。

「もちろんなのです。ヴエルカとストレルカ、どつちに取つてもらいますか？」

「そうだね……それじや、クドに」

「わふつ!?

本人には自覚が無かつたようだけれど、クドは先ほどから飛んでいくディスクをそわそわし
た目で見つめていたのだ。

「いくよー」

ヴエルカからディスクを受け取つて、投擲の体勢に移りながら、そう言う僕。

「え、あ——ヴエルカ、ストレルカ！ あのディスクは私が取るのですっ！」

了解したとばかりに二頭の犬が鋭く吠える。僕はそれを確認すると、先ほどクドが投げたも
のよりは遅めになるように調整して、

「それっ！」

ディスクを投げたのだった。

「わふーっ！」

先ほどの二頭ほどではないけど、それでも結構なスピードでクドがディスクを追いかける。「キヤッチなのです！ わふつ！」

大きくジャンプして、クドは目的を達成した。

着地するときに制服のスカートがめくれて白いあらぬものが見えたけど、気にしなかつたことにしようと思う。

「今日は楽しかったのです」

「うん、僕も楽しかったよ」

日が暮れると、自然とお開きとなつた。

ヴエルカとストレルカはそのまま校内の巡回を始め、僕はこうしてクドを送つていた。

既に辺りには夜の帳が落ち始め、星が静かに瞬きかけている。

「あ、リキ。靴ひもが解けそうなのです」

「おつと」

慌てて屈み、気付く。僕は今日革靴を履いている。当然、靴ひもなんて付いていない。それなら、クドは一体どうして——。

そう思う間もなく、クドの唇が、僕のそれにそつと触れた。

「な、な、な、な……！」

絶句する僕に対し、クドは微笑みを浮かべて、

『私は、あなたが本当に大好きです』

「……え？」

それは、英語とは違う別の言語だつた。

「ロシア語なのです」

はにかみながら、クドはそう言つた。

「どういう意味なの？」

やー・るぶりやー・ていびやー。音だけだと、それはすごく響きのいい魔法の言葉のように聞こえた。

「ええと……それは……秘密なのです！」

両手を後ろに回して、クドはそう言つた。

「そうか——」

それでも、なんとなくその意味はわかる。キスと共ににある言葉。それはきっと……。

「僕も、君が好きだよ。クド」

途端、だいぶ暗くなつたというのにクドの顔が真つ赤になつたのがわかつた。

「——よく考えたら、意味を伝えずにキスをしたら変な人だつたのです……」

「もじもじと、クドがそう呟く。

「でも、僕は嬉しかったよ？」

「そう言つていただけると……とても、とても嬉しいのです！」

その言葉と一緒に、どちらからともなく抱き合つて——僕たちは、再びキスをした。
——こうして僕とクドは（その、言葉にすると恥ずかしいのだけれど）恋人同士になつた。

当初はつきあつていることが知られるとお互い恥ずかしかつたため、リトルバスターズのみ
んなには内緒にしていた僕らであつたけど、次の日のうちに全員に気付かれてしまつっていた。
恭介に言わせると、僕とクドが顔を合わせた途端赤面してしまつた時点でバレバレであつた
らしいし、そういう風になるのではないかと思つてもいたそだ。

そしてそれから数日後の休み時間のこと。

「小毬さん、何をしていらっしゃるんですか？」

「うん？ 占いですよ。トランプで出来る簡単なものが雑誌に載つていたからやつてみたの」

「へえ……」

なんか、小毬さんと占いつて、珍しい取り合わせのような気がする。

「でもちよつと自信ないかも」

「どうして？」

「さつきからみおちんにやつてあるんだけど、ずれるんですけどヨー」

「さつきからみおちんが教えてくれた。」

「なんでだろう……なぜかみおちやんだけ結果がふたつ出てくるの？」
当の西園さんは、少し困った顔をしていた。

「結果がふたつになるのはわたしだけですから、気にしない方がいいですよ」と、西園さんが苦笑気味に慰める。

「あたしのとはるかのは当たつていたしな」

さらに小毬さんを援護するように、鈴。

「うーん、そうかなう……ようし！」

いつもの調子で、テンションを持ち直す小毬さんだつた。

「それじや、クーちゃんも、やつてみる？」

「はい、お願ひしますなのです！」

「うん、おつけくですよ。それでは、まずは誕生日を教えて？」

「誕生日ですね。誕生日はえーと……今日なのです！」

……思わず、全員で黙り込んでしまつた。

「ええええええええ！」

「小毬さんが、素つ頓狂な声をあげる。
「わふっ、どうしましたか、小毬さん！」

「どうしましたもこうしましたも、びっくりだよ～！」

「そう、それしかない。僕だつて今、顔に出していなだけでかなり驚いているのだ。
「これは、至急準備しないといけませんね」

西園さんが淡々と言う。

「食堂に行つてくる。おばちゃんに場所が借りられないか話してみる」
早くも、鈴が行動を起こしていた。

「はるちゃん、ゆいちゃん探してきて！ 私はお料理とかの準備しないといけないから。それで見つかつたらお手伝いして欲しいって伝えてくれる？」

「おつけーまかせろー！」

鈴に続いて、葉留佳さんも食堂から飛び出していく。

つて、いつまでも見てているだけというわけにもいかない。僕も動かないと。

「恭介！」

「おうつ！」

僕の呼びかけに、恭介が上の階から飛び降りてきた。——毎度毎度、僕に用事があるとき

は上階の教室から飛び降りてこつちにやつてくるんだけど、僕から呼んで来て貰ったのは、これが初めてであつたりする。

「実は、かくかくしかじかなんだけど……」

「まるまるうまうまだな、了解だ。謙吾！」

「承知した！」

再び窓から外へと飛び出ていく恭介。その後を謙吾が追う。

「わふー、みなさんすごいのです……」

「そうか？」

一部始終をみていた真人が、クドの小さな肩に自分の大きな手を乗せながら言う。

「仲間の誕生日なんだ。これくらいはしなきやな」

「井ノ原さん……」

そうに違いない。僕は、強く頷いた。

クドの誕生日会は、盛大なものになつた。

催し物が一発芸大会みたいになつて、来ヶ谷さんが居合い抜きを披露したり、葉留佳さんと小毬さんが漫才を披露したり、鈴が猫のお腹をなでてその鳴き声で演奏を行つたり、西園さん

が腹話術を披露したり（何故か腹話術の人形は妙にテンションが高かつた）、僕ら男性陣が上半身裸になつてマッスルバンドブラザーズになつたりしたけれど、とても楽しいものだつた。

「こんな誕生日、生まれてはじめてなのですっ！」

なにより、クドが喜んでくれた。これが、一番嬉しいことだつた。

「ところでリキ。今晚、お時間は空いていますか？」

「あ、うん」

「では後でメールを送りますので、それを見て欲しいのです」
どうしたんだろう。急に改まつて。

「こんばんは、クド」

「こんばんはなのです、リキ」

その後すぐに送られてきたメールに書いてあつたのは、夜遅くに校舎の裏庭に来て欲しいと
いうものだつた。

なので、僕はこうして男子寮をぬけだして、クドに会いに来たのだ。

「それで一体、どうしたの？」

「えつとですね、テヴァに伝わる儀式のお手伝いを、お願ひしたいのです」

「儀式？」

「はい。ちょっと特別な儀式なのです」

そう言つてクドはマントのポケットから、小さな水筒とお弁当箱を取り出した。
そして、お弁当箱に水筒から水を注ぎ、指でそつと混ぜ始める。星灯りしかないからわかりづらかつたけど、その色と匂いは――。

「これは、ココア？」

「はい。それに小麦粉を足したものなのです」

と、クド。

「本当はちゃんとした染料があるんですけど、ここでは用意できませんでしたから――あ、準備ができたのです。リキ、すみません。上着を脱いでいただけますか？」

「あ、うん」

クドに言われるまま、上半身をはだける。

「えつと……もしかして？」

「はい。これからリキの身体に紋様を描くのです」

「どうやら、そういう儀式らしい。」

「それじゃ――どうぞ」

「はい。ではリキ、背中から描いていきますので……」

「うん」

クドの言葉に従い、背中を向ける。

「それでは、いくのです……」

緊張したクドの言葉と共に、クドの細い指が僕の背中をそつとなぞり始めた。クドが作つたココアの染料による冷たさと、クドの指の暖かさが相まつて、なんだかとても不思議な感じがする。

——しばらくして。

「リキ、おわりました」

クドにそう言われて、僕は自分の身体を見てみた。背中の方はよく見えないけれど、上腕にはなにか歯車のような幾何学模様が描かれている。

「クド、これは……」

「ストルガツキー・オリジナル……私の紋様なのです。お母さんが考えてくれたのですよ」
どこか誇らしげに、クドはそう答えた。

「ちなみに、意味は『世界の良き歯車となれ』なのです」

「へえ……」

なんというか、いくつもの意味に捉えられそうなメッセージだつた。

「——それでは、リキ。私にもお願ひするのです」

……え？

「な、なんだつて？」

僕が驚いている間にも、クドは静かに上着を脱いでいく。途中で響いたぶち、という音は下着のホックだろうか——ってそう言う問題じやなくて！

「く、クドもするの？」

「はい。そうなのです」

脱いだ服を身体の前に当てて、クドは少し恥ずかしそうにそう答えた。

「でも、僕の紋様なんて無いよ？」

「それは、リキの思うままに描けばいいのです。そうすれば、それがリキオリジナルの紋様となるのですから」

そういうことならば、僕には異存はない。

「そ、それじゃ——失礼します」

「は、はいなのです……」

思わず敬語になりながら、クドの小さな白い背中に、そつと指を這わせる。

「んっ——」

くすぐつたいのか恥ずかしいのか、クドがそんな声を上げる。けれど、僕の描く紋様がずれないようにするためか、その身体はぴくりとも動かなかつた。

そんなクドの身体に、僕はおつかなびつくりで紋様を描いていく。最初は戸惑つたけれど、自分の思うとおりにというクドの言葉を思い起こすと、不思議と指は止まることがなかつた。やがて、紋様を描き終える。実際には三十分もかからなかつたのだろうけど、僕にとつては数時間はかかつたような気がした。

「終わったよ、クド」

「——ありがとうございます。リキ」

小さく息をついて、クドが自分の二の腕を見る。

「リキの紋は、なんだかとてもおおきな樹みたいなのです」「そ、そうかな？」

感覚だけで描いたものであるから、そう言われるとちょっとぴり照れくさい。

「リキ、実はこの儀式はですね——お互いが好きな者同士が、どちらかの誕生日の夜にしか行えないものなのです」

星灯りに照らし出されたクドが、淡々とそう言う。その様子はまるで、星空からやつてきた妖精のようだつた。

「この儀式で描かれた紋様は、たとえすぐに洗い落としたとしても、その意味は失われず、お互いが描いたことによりふたつの紋は対となつて——その絆は、永遠に失われないそうです」

それはつまり、僕にも『世界の良き歯車となれ』というメッセージが込められたということ

になる。だとすると——。

「困ったな。僕の紋様、特に意味を考えないで描いちゃつた……」
「きつといつか、その意味がわかるときがくるのです」

リキが描いた、リキだけの紋様なのですから。とクドが慰めてくれる。
「リキ、テヴァの島々はですね……元は神様だったのです」

「——え？」

「テヴァの伝承なのです。むかしむかしの大昔には海しかなくて、人々は住む場所に困つてい
たそうです。それを見かねた神様が、自分の身体をバラバラにしてテヴァの島々となつたので
す。こうして住む場所を得た人たちは、その神様のことを忘れないよう、その名前を紋様とし
て残し、子孫に伝えることにしました。それが……この儀式の元となつたのですよ」
歌い上げるよう、クドは伝承を教えてくれた。

人々のために自らの身を犠牲にした神様。それがクドの紋様の大本になつたのだとしたら、
僕の描いた紋様はますます場違いにならないだろうか。そう思つてクドに訊くと、

「大丈夫なのです。私の紋様も先ほどお伝えした意味しかありませんから。きっと、紋様その
ものが神様のことを忘れないというめつせーじになつてているのです。だからリキの紋様自体が、
神様のことを忘れないということに繋がつていています」
なるほど。それなら——それはとても良いことだと思う。」

「それとリキ、リキだけにお伝えしたいことがあります」

「うん、なに?」

僕がそう訊くと、クドは今まで見たことがない大人びた顔で、

「それは向こうでの私の名前なのです。どうか、覚えていてください。私のもうひとつのお名前——クドリヤフカ・アナトリエヴナ・ストルガツカヤを……」

「——綺麗な名前だね」

「ありがとうございます……なのです」

どちらからともなく寄り添い、深く、長く、口づけを交わす。

その際に、クドが胸に抱えていたシャツを落としてしまい、僕は真正面から全部見てしまつたのだけれど……まあ、そこはそれというやつだろう。

「星の綺麗な夜なのです」

「うん、そうだね」

僕は裏庭のひらけた場所であぐらをかき、クドはその上にちょこんと座っていた。クドは、脱いだブラウスを手に前を隠しているだけだった。どうも僕が描いた紋様の上に服を着たくないらしい。かく言う僕も同じ気持ちで、上半身裸のままであつたのだけれど。

「ここからは……ポラリス——北極星が見えるのですね」

クドが夜空の一点を指さす。

あいにく、星座には詳しくないのでどれが北極星なのが、僕にはわからなかつた。

「わふつ、おおぐま座もこぐま座も、カシオペア座もよく見えるのです！」

僕の膝の上から身を乗り出し、夜空のあちこちを指さすクド。

「クドは、どんな星座が好きなの？」

僕がそう訊くと、クドは僕の方を振り向いて、

「わたしですか？ わたしは……みなみじゅうじ座が好きなのです！」

はきはきと、そう答えた。

「それつてたしか……南十字星だつけ？」

「はい。ここからは見えませんが、テヴァアからだとよく見えるのです」

「へえ……」

「アカルツクス、ベカルツクス、ガカルツクスにデカルツクス……。小さな星座ですけど、とても綺麗なのです」

「そなんだけ……見てみたいな」

「日本だと、沖縄とかでも見られるそうですけど……テヴァアだと、特に綺麗に見えるのです」海の真ん中で灯りが少ないから、とても綺麗に見えるんですよ。と、クドは続けてくれた。



「それは是非とも見てみたいね。……そうだ。いつかテヴァに行こう、クド。卒業旅行でもなんでもいいから——ね」

「そうですね……リキに色々案内したいです」

海と自然とロケットの発射基地ぐらいしか案内できないんですけど……と、笑つてクド。僕は、そんなクドに笑顔を返して、その長くて淡い亜麻色の髪を手に取った。

「あ……」

クドが声を上げる中、その髪を出来る優しく手でくしけづる。

「リキは——」

どこか心配そうな声で、クドが声を上げる。

「リキは、黒くない髪でも好きですか？」

「うん、好きだよ」

その質問の意味を察して、僕は即答した。

「特にクドの髪は、ね」

「わ、わふー……」

照れたように、クドがそんな声を上げる。

僕はそんなクドに満足して、静かにその髪を手で梳き続けた。

第四章 50ノーティカルマイルの、空



「……わふー」

その日、クドは朝から落ち込み気味だつた。

実力試験も終わり、その結果も悪いものではなかつたというのに、どこか晴れない顔で、時々ため息をついている。

「なにか悩み事？」

それがお昼の家庭科部部室にまで尾を引いていたので、僕はそう訊いていた。

「え？ ええと、悩み事といいますかその……わふー」

いまの今まで、自分が落ち込んでいるように見えることに気づかなかつたらしい。慌てた

かのようすに氣丈に微笑んでみせるクドだけれど、それはどこか浮かない顔だつた。

「クド、困つてゐるようなら僕に相談してみて。だつて、僕はクドの——」

途中で言葉に詰まつてしまふ。どうも『恋人だから』という言葉が氣恥ずかしい僕だつた。けれど、その意味は伝わつたらしい。クドは急に赤くなると、

「そ、それはとても嬉しいのです……」

照れた様子で、そう言つてくれた。

「それで、なにがあつたの？」

姿勢を正して、僕は訊く。するとクドもぴんと背筋を張つて、

「実は、そろそろテヴァアで打ち上げがあるので」

「打ち上げ？」

「はい。新型の燃料と、同じく新型のエンジンを搭載した最新鋭のロケットなのです」

「へえ……」

「搭載されるのも、新世代の実験炉なのです。なんでも、『ぱいおにあ』や『ぼいじやー』そして『にゅー・ほらいぞんず』以上の太陽系外探査が出来るように開発されたとか」

「それは……すごいね」

恥ずかしい話だけど、太陽系外と言われてもぴんとこない僕だつた。けれども、クドにとつてはそうではないのだろう。その青い目を、希望と期待で輝かせてい

る。

「そしてなにより、今回のロケットに乗る宇宙飛行士は、私のおかさんなのですっ！」

「へえ、それもすご……なんだつて!?」

思わずそう聞き返してします。、

「私のおかさんなのですよ」

対するクドは、すごく誇らしげだつた。

「おめでとうつて、言つてあげた？」

そう僕が訊くと、クドは一瞬でしゅんとなつて、

「その……言つていないのです」

申し訳なさそうに、そう答えたのだつた。

「もしかして、何も連絡していないので？」

「はい。だから、連絡しようかどうか悩んでいるんですけど……」

「どうして？」

「その、打ち上げで忙しいときに邪魔をしては悪いかと思いまして——それに、私は——」

クドの声が、徐々に小さくなる。

「そんなことは、ないとと思うけどな……」

頻繁に連絡を取り合っているのならともかく、ごく時たまというのなら、むしろ嬉しいので

はないかと思う。

「そうだ、一度電話してみたらどうかな」

「電話……ですか？」

「うん。せつから直接話し合えるんだから、お互の意見を伝え合つた方がいいと思うんだ。
……僕にはもう、それが出来ないからね」

最後のは、不用意な発言だつた。その証拠にクドが、はつとした顔で僕を見る。
「ご……ごめんなさいなのです。リキ」

「ううん、僕が言い出したことなんだから、気にしないで」

本来謝るのは、僕の方だ。僕の両親のこととで、クドに気を遣わせてしまつたのだから。
「まあとにかく、連絡してみなよ。たぶん、喜ぶと思うから」

「……わかりました！ 行つてくるのです！」

そう言つて、クドは女子寮へと戻つていつた。なんでも、そういつたときの施設と通信費は、
学校側が負担してくれるらしい。

その夜の消灯後、クドからのメールをもらつて僕は家庭科部の部室に忍び込んでいた。
灯りを点けてしまえば外から丸見えなので、携帯電話のランプ機能を頼りに、要所要所を照

らし出して音を立てないように進む。

さて、先にクドが着いていることだつたんだけど……ちょっとだけ心配しながら、部室の戸をそつと三回ノックする。すると——。

「合い言葉なのです……『ヴエルカ』」

「——『ストレルカ』」

途端、部室の戸が静かに開け放たれた。

「良かつた、リキなのです！」

ここで『筋肉筋肉う！』とか応えていたら、クドはどんなリアクションをするのか、ちょっと気になつてしまふ僕だつた。

「リキ、おかあさんと直接話せたのです！」

どこか迷いの晴れた顔で、クドは嬉しそうにそう言つた。

「打ち上げの中継を見てくれれば、それでいいって言つてくれました！ わふー！」

「そうか……それはよかつたね。クド」

「はい！ リキのおかげなのです」

「そんな……」

僕はただ、クドの背中を押してあげただけだ。

「それで、打ち上げの時刻は？」

「はい。こちらの時間で、明日の午後の——」

「待つて、誰かくる！」

部室の明かりを点けないでいて良かった。僕はクドを抱きかかえて、息をこらす。

足音は複数。そして懐中電灯とおぼしき光が左右に揺れている。

これはもう間違いない。風紀委員の巡回だった。

僕はクドを抱えたまま後ずさりをして、懐中電灯の死角に移動する。

直後、部室の中を懐中電灯の光が照らし出した。風紀委員のひとりが、家庭科部の部室をチェックしているのだ。懐中電灯の光が、事務的かつ的確に、照らすべき場所を照らし出す。その動作には、いつさいの無駄が無かつた。

——この動作は、もしかして。

僕の推測は、懐中電灯のわずかな照り返しで証明された。間違いない、二木さんだ。

二木さんは、怪訝な顔で暗闇をのぞき込んでいる。僕らが隠れる、死角の中を、じつと。ここで見つかった場合、クドはともかくとして、僕の立場は非常にまずいものになる。故に睡すら飲み込めず、ずっと息を潜めて居たのだけれど……。

「異常、無しね」

僕らの隠れる方向へ懐中電灯を照らさずに、二木さんは引き上げた。

「……なにか物音がしませんでした？」

「そう？ 私には何も聞こえなかつたわ」

そんなやりとりも、次第に遠ざかっていく。

そして足音が完全に消えたところでやつと、僕らは息をついた。

「もう大丈夫かな？」

クドに、そう囁く。

「それはもう大丈夫だと思うのです。ただ……」

「ただ？」

「あの、その……手がですね」

「……え？ うわっ、ごめん！」

今になつて、手に緩やかな膨らみが伝わつてきた。

そう、僕はクドを抱き抱えた際、ことあるうちに胸に手を当ててしまつていたのだ。

「ごめん、本当に——」

「い、いえその……ぞ、存分に堪能くださいつ……！」

いやいや。いやいやいや！

僕は慌てて手を離そうとしたけれど——その上に、クドの手が重なつて、動けなくなつた。

「クド……？」

一体どうして……と言う前に、クドは優しい声音で、

「リキの手、暖かいのです」

「く、クドのも暖かいよ?」

クドの胸を通して、心臓の鼓動が伝わってくる。

それはとくとくと、少し早めに鼓動していた。

「できれば、もう少しこのままでお願いしたいのです」

「う、うん……」

もし風紀委員が赤外線探知機でも持つていたら、僕らは即座に居場所を特定されていたに違いない。

それほど、僕らは赤面し続けていた。

翌日、お昼休み。

朝は僕もクドもお互い夜のことを思い出して真っ当に会話が出来なかつたけれど、お昼になるとどうにか普通に会話できるようになつていた。

「いよいよだね」

「はい。たのしみなのですっ！」

「それで、中継はいつから?」

「えつとですね、向こうとこっちの時差を調整するとですね——わふ！ もうちょっとで始まりそうなのですっ！」

「よし、それじゃすぐに移動しよう」

僕らは食堂へと向かつた。あそこであれば、割と自由にテレビを見ることができるのだ。

その食堂に入つてみると、いつも通りに混んでいた。

「ごめん、チャンネル変えてもいいかな？」

テレビを流し見していた後輩とおぼしき男子生徒に、そう頼み込んでみる。

「あ、はい。構いませんけど……」

「ありがとう」

その生徒と、画面の中のサングラスで有名な司会者に内心謝りながら、チャンネルを変える。こここの食堂は地上波デジタルだけでなく、ケーブルテレビや衛星放送も繋がるのが強みなのだ。さてと、チャンネルはこれであつてはいるはず——。

「……あれ？」

テレビ画面を見つめていたクドが、首を傾げた。

——変だ。映らない。僕の脳裏にも、そんな疑問符が浮かぶ。

なにやら複雑な英語の長文が書かれた半透明のプレートが、わずかながらも上下に揺れているだけだ。

ええと……『現在、中継現場は打ち上げ失——』

「クドリヤフカ！」

その声に僕らは絶句した。それだけ声の主である二木さんの声が大きかつたというのもあるけれど、それ以上に鬼気迫る二木さんの表情を見たのが、初めてであつたからだ。

「ど、どうかいましたか、二木さん」

驚いた様子で、クドがそう訊く。

「その様子じや、まだなにも知らないのね……」

今度は顔を青ざめて、二木さんはそう呟く。

「いい、落ち着いてよく聞いて。テヴァのノーヴィ・バイコヌール基地からの通信が途絶したの。つい、さつきよ
え、それつて——」

僕が何かを言う前に、クドが国際ニュースの専門チャンネルに回していた。

画面の中には『LIVE』の文字がどこにもないから録画なのだろう。画面中央に、噴煙を上げ始めたロケットが映つている。だが、なぜか音がいつさい聞こえない。そんな中で、アナウンサーがヒステリックな声を上げる。

——なんということでしょう。

——最悪の展開となりました。

——このような事態になると、一体誰が予測しえたでしょうか。

……なんだ、なにが起きた？

どうも、いやな予感がする。

僕の懸念をよそに、無音の中ロケットは打ち上がったかと思うと、30秒もしないうちにその機体を傾けた。ロケットの噴炎が一瞬途切れ——機体のあちこちで小爆発が起こる。そしてロケットは絶望的な角度にまで傾くと——あろうことか、墜落した。

その直前、ロケットの先端が分離したかのように飛び出したように見えたけれど、直後に轟音と閃光、そして爆煙が立ちこめ、テレビ画面からは何がなんだかわからなくなる。中の宇宙飛行士は、無事だろうか。

……いや、待て。

今このロケットに、乗っていたのは、いつたい誰だ？

とてもなく嫌な予感が、僕の背筋を走つた。

事前に聞いていた話では、あのロケットに乗つていたのは——。

僕はおそるおそる、隣を見る。

さつきまで一緒に、中継を楽しみにしていたクドは——時間が停止したかのように、目を

見開いたまま画面を凝視していた。

「あ、ああ、あああ……！」

クドの膝から全身へ、震えが走った。

「おかあさんっ！」

その一言で、食堂にいた全員が、クドを見た。

今更確かめるまでもない。クドは、一部始終を見てしまつたのだ。

「なあ、いま『おかあさん』って——」

「確かあの子つて——」

「そういうや今テレビに映つっていた打ち上げ——」

真つ先に動いたのは、二木さんだつた。

スカートのポケットから使い古されたシンプルな携帯電話を引つ張り出したかと思うと、現在動ける風紀委員は至急食堂へ！ テレビ中継で校内関係者が事故に巻き込まれた報道があつたわ。混乱が起こる前に收拾をはかるわよ。……直枝！』

いきなり声をかけられたのと同時に僕に向かつて放り投げられたのは、鍵だつた。

「これつて……家庭科部の？」

なんで二木さんが持つて——。

「クドリヤフカに誘われていたのよ。それよりも早く連れて行つてあげて。……彼女のこと、

頼んだわよ」

「うん、わかつたよ」

全身を大きく震わせたままのクドを、抱えるように引っ張り出す。

「クド、こっちへ」

「でも……でも……！」

「いいからっ！」

むりやり、クドを引っ張り出す。頭のどこかが冷静なまゝなのが、逆に悔しかつた。
けど、その間にも騒ぎを聞きつけた生徒たちが押し寄せてくる。おそらく、携帯電話やインターネットでニュースを知つたのだろう。このままでは、食堂から出ることすらまゝならない。

「くつ——！」

頼むから、僕らに構わないでくれ。唇をかみしめながら、そう思つたときだつた。

「——やつちやつていいですね？ 姉御」

「——ああ、構わん」

本来なら場をかき回す人と、問答無用で粉碎する人の声が、同時に響いた。

「結果として風紀委員の手伝いをしている気がして癪だけど、あくまでクド公の為なんだからまあしかたないやファイヤー！」

そういうて、スカートのポケットから大量のロケット花火——導火線とかがないから、この前の爆薬と同じく来ヶ谷さん特製なのだろう。たぶん——を放り投げる葉留佳さん。直後、食堂の中は閃光と轟音に包まれる。

「理樹君、いまのうち！」

「クド、こつちだ！」

小穂さんと鈴の手が伸びた。ふたりとも、助けに来てくれたのだ。

小穂さんが僕の手を握り、鈴がクドの手を握る。

「間に合って、よかつたよ」

「ありがとう、小穂さん」

そのまま四人で、どうにか食堂の外に出ることができた。けれども、めざとい幾人かの生徒が僕らを見つけ、追いかけようとする。すると――。

「おふたりが食堂から出ました。宮沢さん、井ノ原さん、いまです」

「心得た！」

「あいよ！ 筋肉が通りまーす！ ご注意くださいーい！」

僕らを追つかけようとした生徒たちは、西園さんの指示の許、謙吾と真人によつて完全にブロックされていた。

「お前ら、こつちだ！」

廊下が待機していたのだろう。恭介が大きく手を振る。

「ようし、ここまでくれば、だいじょーぶ」

そこで、小穂さんと鈴の足が止まつた。

「私達は、食堂からそつちに人が行かないようにするから」

「おまえら、全力で行くぞ」

鈴が足下に向かつて号令をとばす。いつの間にか、鈴の足下には猫達が集まりつつあつたのだ。

「小毬さん……鈴も……」

「理樹君、ファイトですよ」

「クドのこと、まかせた」

「うん。ふたりとも、ありがとう」

僕は深く頭を下げた。

「能美のこと、頼んだぞ」

最後に恭介が、僕の肩をぽんと叩く。

「うん。頑張るよ、恭介。クド、行こう」

未だ無反応のクドの手を引き、廊下を走り出す。

直後、背後で恭介のものとおぼしき煙幕が派手に炸裂した。

おそらく、僕とクドがどこに行つたかわからなくさせるように、文字通り煙に巻いてくれたのだろう。

半ば転げ込むように、僕らは家庭科部の部室にたどり着いた。

「ふう……」

制服のネクタイを緩める。

「クド——大丈夫？」

クドは、何も喋らなかつた。

「座つてて。お茶、僕が淹れるから」

なおも、クドは喋らなかつた。まるで、最初に出会つたときのように。

ほど時は経つていないので、まるで大昔のことのようだつた。

さて、これからどうしようか……。

そう思いながらお湯を沸かし、ふたり分のお茶を淹れる。

「クド、お茶が入つたよ」

クドの前に、お茶を置いてあげる。それでも、クドは無反応だつた。

「クド……」

「……罰が当たつてしましました」

クドがぽつりと——ただし絞り出すように——そう呟いた。

「罰？」

「そうです……あそこに、私が……私が行かなかつたから……！」

「落ち着いて、クド」

震え出すクドの肩をそつと抱いて、僕。

「自分を責めちゃ駄目だ。あの事故は……クドのせいじゃない」「でも……でも……！」

「それでも、クドのせいじゃないんだ」

クドの目をしつかりとみつめて、僕はそう言つた。

「でも、私はおかあさんにひどいことをしました……」

「ひどいことつて……。連絡しなかつた件なら、電話をして話し合えたじやないか」

「それだけじやないんです」

悲愴な表情で、クドは続ける。

「実は、随分前におかあさんから打ち上げを見学しないかという連絡があつたのです……」

「そうだつたんだ……」

「それを私は断つてしまつたのです。それも返事が遅れるように、手紙で……」

あのエアメールか——。

少し前にクドが用意し、そして郵便局へ持つていたものを思い出す。

「だから、罰が当たつたのです」

「そんなことはないよ。絶対に」
クドの肩を抱いて、そう断言する。

「リキ、私は……どうしたらいいのでしょうか」
情けないことに、僕は即答が出来なかつた。

夜、学生食堂。その一角——。

「……うむ。周囲に生徒がいないのを確認した」

「こつちもだ」

来ヶ谷さんと恭介が、ほぼ同時にそう言つた。

昼間はあの騒ぎでしつちやかめつちやかになつたそ�だけど、その直後に風紀委員が集団で現場に到着。二木さんの指揮の許、瞬く間に事態を收拾して、ついでに清掃も行つていつたらしい。

そのため、夜の学食はすごく綺麗になつていた。

「それで、人払いをかけてまで相談とは、一体なにかね？」

恭介から司会を任された来ヶ谷さんが、そう訊く。

「それは——」

僕は、クドと僕自身の葛藤をみんなに告げた。

「ふむ、想定通りと言いたいところだがこれは……」

さしもの来ヶ谷さんも、黙り込む。恭介の方に目を向けてみると、腕を組んだまま両目を瞑つていた。その様子から察するに、今回は自分から動かないという意思表示なのだろう。

「……えつと、いいかな？」

一番最初に意思表示をしたのは、葉留佳さんだつた。

「私は……クド公がここにいた方が良いと思う」

真面目な表情で、葉留佳さんはそう言つた。

「だつて、危ないんでしょう？ いくら家族が居るからつてそんなところにクド公を行かせるなんておかしいぢやない」

「まあ、現地における住民の感情は良くないだろうな」

来ヶ谷さんが断言する。

「いやだなあ。当事者の身内だからつて子供まで嫌うの、すつごく嫌なんだよね……！」

珍しいことに、嫌悪感をむき出しにする葉留佳さんだつた。

ただその気持ち、わからなくもない。

僕だつて、クドが上級生に珍しがられただけで不快感を覚えたのだ。

クドが忌み嫌われるのを目の当たりにしたら、きっとすごく嫌な気分になるだろう。

「私は、帰つた方がいいと思うな」

沈黙の合間を縫つて淡々とそう言つたのは、小毬さんだつた。

「……こまりん！」

信じられないでも言うように葉留佳さんが声を上げて立ち上がり——来ヶ谷さんの合図と視線に気付いて、静かに座り直す。

「はるちゃんの言いたいこともよくわかるよ。でも、そうしないとクーちゃん、ずっと後悔しそうだから」

淡々と話すけれど、その顔は今まで見たことがない沈痛そうな表情の小毬さんだつた。

「——後悔し続けるつて、すごくつらいものだからね」

「そうか……そういう見方もあるのか。」

「ふむ、正反対の意見が出たな」

「姉御はどうなんですか？」

やるせないといった表情で、葉留佳さんが来ヶ谷さんに訊く。

「私か？ 私は……個人の感情的には、クドリヤフカ君には残つていてもらいたい。だが、状況的には帰つた方がいいだろう」

来ヶ谷さんは、真顔でそう言つた。おそらくそれは、何度も何度も考へた上での発言であつたのだろう。迷いも何もない、簡潔な一言だつた。

「西園女史はどうかね？」

「……わたしは、能美さんがテヴァに帰ることに反対です」

淡々と、西園さんが言う。

「おそらくこの一件で、島の治安状況は悪化するでしょう。おそらく能美さんにはそれ相応の警備がつくものと思いますが、それでも危険なことには代わりがありません」

西園さんの、的確な指摘だった。

「でもよ、クー公の家族は向こうなんだろ？ だつたら帰つた方がいいと思うぜ、オレは」

真人が横からそう言つた。

「できりや、オレ達がクー公を守れるよう一緒に行つてやれりやいいんだけどよ……」

すごく悔しそうに、顔をしかめてそう続ける。

確かに、真人の言うことがすごく理想的に思える。

クドをこの手で守る。それが出来れば、どんなに良いだろう。

「俺は反対だがな。家族が危険というのはわかるが、それならなおさら能美だけでも安全な場所にいた方がいいだろう」

真人の意見に対し、謙吾が異議を挟んだ。

「ああ、そいつもわかつてんだがよ……」

普段ならここで謙吾の言葉にくつてかかるところだけれど、真人はにぎりきつた顔でそう答

えるだけだつた。

「恭介よ、お前はどうなんだ……？」

謙吾の言葉に、全員が話を振られた先の恭介を凝視した。その視線を受けて、先ほどから場の推移を見定めている様子だった恭介は深く息をついてみんなを見回すと、

「……そうだな。あくまで俺の意見だが、能美は帰るべきだと思う。ただし、ある程度時間を置いて、テヴァが安定したら——という条件付きだがな」
はつきりと、そう言つた。

「でも恭介くん。さつきみおちゃんが言つていたように、テヴァつて今どんどん治安が悪化しちやつているんじやないですか？」

葉留佳さんが、そう指摘する。

「ああ、三枝の言う通りだ。俺の見立てでは後もう少しでテヴァに入国できなくなると思う。そしてそれが解除されるのがいつかは——残念ながら、不確定要素が多くて判断出来ない」
僕は来ヶ谷さんを横目で見た。

それだけで全てを察した来ヶ谷さんは、静かに首を縦に振る。つまり、恭介の推論に誤りはないということなのだろう。

あの恭介と来ヶ谷さんをもつてしても判断できないということなら、テヴァが安定を取り戻

すのは相当先なのだろう。

つまり、ごく短期間のうちに帰らなければ、クドはいつまで経つても帰れない訳だ。

全員が、沈黙した。

葉留佳さん達の主張もわかる。むしろそうすれば、僕はクドとずっと一緒にいられるわけだ。
……おそらくそれは、誰もが気づいているのだろう。けれど、それを言わないでいてくれると
いうのは——とてもありがたいことだつた。

対して、小毬さん達の主張も間違いでないことはわかつてゐる。クドの家族は向こうだ。
であれば、もし何かがあつたとき、クドはひとりぼっちに——かつての、僕のように——なつ
てしまふ。

沈黙は、続いていた。

言つてみればこれは、結論が出ない議論なのかもしれない。そう思つてしまつたとき——。
「りんちゃんは、どう？」

小毬さんが静かに、鈴にそう訊いた。

「あたし……か？」

話を振られると思わなかつたのだろう。自分を指さして、鈴は驚いたかのようにならうと言つ
た。それは、ちよつと前だつたらそのまま逃げ出しかねない状況だつた。けれど……。
「あたしは——」

みんなの視線が集まる中、鈴は物怖じせずに、「あたしは……理樹がしたいようにすれば良いと思う」はつきりと、そう言った。

「僕……が？」

今度は僕が、自分自身を指さす。

「うん、そうだ。きっとそうした方がいいと思う。理由はよく、わからないけれど」「そうか……」

「ごめん、理樹。なんの参考にもならなかつたかも」

「いや、ありがとう。参考になつたよ。あと、みんなもありがとうございます」みんなのおかげで、僕の肚は決まりつつあつた。

「ごめんね、急に呼び出して」

「いえ……」

それでも、僕の呼びかけに答えてくれて嬉しく思う。

真夜中の、家庭科部の部室。

僕らがふたりきりになれる場所は、もはやここしかなかつたのだ。

「クドは、あれから考えた？ その、テヴアに帰るかどうかを」

「……いえ、まだ考へてゐるのです」

「数日前だつたら考へられないほど弱々しい声で、クドはそう答えた。
「リキ、私はどうすればいいのでしょうか？」

こんなに参つてゐるクドに言つてもいいのだろうか。一瞬だけ迷つてしまふ。けれど、このままクドを立ち止まらせるわけにはいかない。それが一番悪いことだというのは、わかつているのだから。

「……それじや、僕の考えを伝えるよ。クド」

だから僕は、はつきりと考へることにした。

「はい……」

クドが息を飲む。僕はそんなクドに出来るだけ声音を優しくして、

「僕が思うに——帰るべきだよ、クド」

その言葉に、クドの肩が小さく震えた。

「そんな……だつてリキは——！」

クドが、僕を見上げる。その瞳は、怯える子犬のように揺れ動いていた。

「うん、わかっている。わかっているんだ……」

僕だつて、クドにそばにいて欲しい。それは偽らざる自分の気持ちそのものだつた。

だけど、こうも思うのだ。もし僕という存在がいなければ、クドは真っ先に帰っていたのではないか——と。

「もし帰つたとしても、現地は混乱しています。おそらく、日本にはそう簡単に戻ることが出来ません」

「うん、そうだろうね……」

「それでも……それでもリキは、私に帰れと言いますか？」

「……うん」

出来るだけ感情を押し殺して、そう断言する。出ないと、僕が叫び出してしまいそうになるからだつた。

「ねえクド、僕には親がもういない。ずるい言い方だつてよくわかっているんだけど……それでも言うよ。無くしたら、二度と取り戻せないものは、確かにあるんだ」

「リキ——」

クドが、鋭く息を飲んだ。

「だから、ね」

僕は、どんな顔をしているのだろう。それがわからないほど、今の僕に余裕はなかつた。

けれど、それをクドに気取られることだけはあつてはならない。

内心で歯を食いしばつて、僕は笑つてみせる。

「だからクド、僕のことは気にならないで」

「はい……わかりました、リキ。こちらに戻るのは、いつになるかわかりませんけど……」
そう答えるクドだけど、その瞳はどこか虚ろで——痛ましかつた。

それからは、僕の周りは穏やかな日々であつたけれど、クドの周りは急激に物事が進んでいた。まず、校内を黒服のいかつい男達がうろつくようになつた。そして、クドは彼らと何らかのやりとりをしているようだつた。

「大使館か、外務省の人間だろうな」と、恭介が言う。

「それと、その黒服が能美に飛行機のチケットを渡しているのを見た。もしかすると、俺たちの想像するより、能美はここを発つのが早いのかもしれないな……」

「ありがとう恭介、色々教えてくれて」

「気にするな……」

僕の肩を優しくたたいて、恭介はそう言う。

「お前も、辛うだからな」

「……え？」

「能美だけじゃないだろう。理樹、お前も辛いはずだ」

「そんな、僕は……」

「あまり無理はするな。鈴も言っていたが、今はお前のやりたいことをしたほうがいい」

「……そうだね。そうするよ」

僕が今やりたいこと。

それはもちろん、クドと会うことだつた。

「はい。確かにテヴァへの航空券をいただいたのです」

あつさりと、クドはそう言つた。

「それじゃ……」

「はい。近いうちにテヴァに帰ることになると思います。決まつたらリキには伝えますので」

「う、うん……」

「なんだろう。どことなくクドのしていることに、寂しさよりも冷たさを覚える僕だつた。

「それとリキ、まだお伝えしていなかつたのですが——」

「た、た、退学だあ!?」

クドから伝えられた事実を告げると、真人はそんな素つ頓狂な声を上げた。
「能美らしくない極端な手に出たな……休学というのもあつたんじやないか?
謙吾が、心配そうに言う。

「休学だと最大半年なんだ。それ以降だと留年するんだよ」

「いつ帰れるのかわからない。それならば——というのが、クドの決断だつた。
『それってつまり、オレ達と同じ学年でないと嫌だつてことか?』

「正確には、理樹と同じ学年でないと——ということだろうな」

恭介がそう注釈を入れて、謙吾が同意するように頷く。

「理樹が、後悔しないのならいい」

鈴の言葉が、今は重かつた。

——そして。

「本当に、いいの?」

クドの前には、僕ひとりだけがいた。

クドから、突然メールで呼び出されたのだ。

『明日の午前中、テヴァに帰ります。このことは誰にも伝えないでください』
——と。

事前にリキには伝えますので、とクドは言つていた。

それは逆に言えば、僕以外には教えたくないということだつたのだ。
「今、みなさんとお会いすると……決心が揺らいでしまいますから」

どこか乾いた表情で小さく笑つて、クド。

「だから、リキだけなのです。みなさんには申し訳ないですけど、よろしくお伝えください」
「……うん、わかつた」

本来なら到底頷けない頼みであつたけれど、僕は深く頷いた。

他の誰でもない、僕自身がクドに帰るよう言つたのだから。

「リキ、これを——」

そう言つてクドが渡したのは、クドの帽子についていたボタンだつた

「これつて——」

「おじいさまのお友達が大昔にしていたことだそうです。旅や——打ち上げの無事を祈るためにしていましたそうです」

「なんだ……」

クドからもらつたボタンを、握りしめる。

その手が、鉄の塊を持つたかのように重たかつた。

そのボタンは何の変哲もないプラスティック製のボタンであつたけれど、僕にとつてはすごく重いものに感じられたのだ。

「それでは——お願ひします」

黒服の男はそれだけでわかつたのか、車のトランクから一脚の折りたたみ椅子を取り出すと、それを展開させてクドの側に置いた。

クドはそれに座り、大きく息をつく。

「昔の、風習なのです」

どこか遠くを見るような目で、クドはそう言う。

そこには、氣負いも悲壯もない、ただひとりの少女が座つてゐるだけの風景だつた。

「あ、そうでした。私の部屋の荷物、捨てきれないものがあつたので処分してほしいのです」

「いいよ。それくらいなら任せて」

「ありがとうございます。リキ」

クドが、大きく頭を下げる。

「それでは、今度こそ——」

「そのとき、背後から鋭く吠えられた。

「ヴエルカ、ストレルカ……！」

クドが息を飲む。

「今はお仕事の時間のはずですよ。戻ります……」

クドがそういつても、二頭の犬は僕の隣でお座りをしたまま、ぴくりとも動かなかつた。

「お見送りに来てくれたのですか？」

クドの質問に、ヴエルカもストレルカも答えない。しつぽすら動かさない。

「——まさか、一緒に行きたいのですか？」

途端、二頭とも立ち上がり、しつぽをちぎれんばかりに振つた。

クドについて行く気なのだ、彼らは。

「駄目……駄目なのです、ヴエルカもストレルカも連れていけないので。——連れて行くわけには、いかないので」

今まで以上に、悲痛な表情のクドだつた。

「お願いです。戻つてください、ヴエルカ……ストレルカ……でないと、でないと泣いてしまうのです。泣いてしまつたら——私は、テヴァに帰れなくなつてしまふのです……」

その言葉に、二頭は耳を前向きに倒した。そしてそろそろと後ずさり——再び僕の立つ位置まで下がつたところで、おswariをする。

……クドを見送ることに、決めたのだろう。

「ありがとうございます。ヴエルカ、ストレルカ」

帽子を目深に被つて、クドはそう言つた。そしてもう振り返らずに車に乗り込む。ややあつて、後部座席の窓が開いた。

「それでは、さようならなのです。リキ」

「……うん。元氣で、クド」

「リキ、にぶーか・にペーら」

クドに告白されたときから少しづつロシアの言葉を勉強していたおかげで、その意味はすぐわかつた。

その言葉は、『幸運を祈ります』という意味だつた。

でも僕が返事を返す前に車の窓は閉まり、発車してしまつた。

ストレス力が小さく、鼻で鳴く。

幸運を祈ります——その言葉は、僕が言うべきだつたのではないだろうか。

その日から、僕の日常は大きく変わつた。

あの家庭科部の部室は、テヴァアのことを調べる部屋となつた。

もちろんそれだけでなく、家庭科部の活動も、継続して行つてゐる。女子寮の寮長さんは別に引き受けなくても構わないと言つたのだが、僕が無理を頼んで引き継いだのだ。

テヴアの情勢は、日に日に悪くなつていった。

事故による被害だけではない。その地理故になかなか踏み込めない救助隊に業を煮やした一部の現地民が暴動を起こしてしまつたのだ。

彼らはまず、ことの原因となつた打ち上げ基地になだれ込み、こともあろうにスタッフを私的に処刑。ついで空港を占拠して国内外の経路を断ち切つた。

ここで、各国の救助隊は軍隊へと置き換わることになつた。

けれども、戦争をするわけではないからお互いの国が足を引っ張り合う形になつて、事態は泥沼化。どの国も、率先して突入しようとしない。

改めて思う。クドに帰るよう言つたのは、正しいことだつたのだろうか。

そんな僕の葛藤をよそに、テヴアの情勢はさらに悪化していく。

暴動はもう内乱に近いものとなり、組織力のない国の組織やボランティアは次々に撤退、各國の海軍によりテヴアを離れていった。

そして僕はそのニュースに絶句することになる。

テヴアの暴徒、わずかに踏みとどまつていたボランティアのキャンプを襲う――。

これが決定的となつて現地からの報道は極端に減り、同時にニュースの質も量も、目に見えて悪くなつていった。

僕は、間違つていたのだろうか。

今更ながら、そう思つてしまふ。

携帯電話は、通じない。

クドの携帯電話は国際通話に対応していると聞いていたので駄目もとで何度かかけたけど、そのたびに帰つてくるのは、

『この携帯電話は、電波の無い地域にあるか、電源が切られています……』
というおなじみのメッセージだけであつたのだ。

だから、ボランティアのキャンプが襲われたというニュースの直後にクドから着信があつて、僕は心底驚いた。

慌てて、自室の勉強机の上に置いてあつた携帯電話をひつたくるようにして取り上げ、通話ボタンを押す。

「もしもし、クド!?」

ノイズがひどい。向こうの電波状態はかなり悪いみたいだ。

——そしてかすかに、聞きたくもない銃撃音が響いていた。

『……ああ、よかつた……最後にリキと話せて、良かつたです』

電話から漏れ出るよう伝わるクドの声は、ひどく疲れていた。

「クド！ クド？ 今どこにいるの？ ボランティアのキャンプが襲われたって聞いたけど、

そつちは無事？」

無事なわけがない。現に今も、受話器を通して明らかに銃声とおぼしき音が続いている。
それでも僕は、一縷の望みを託して聞かざるをえなかつた。

『——私たちも、ついさつき襲われたのです』

それを証明するように、ひときわ大きな爆発音が響く。

『リキ、ごめんなさいです。テヴアに帰ると決めたとき、そして実際に帰つたとき、二重に決めていたことなのに、私は自分への誓いを破つてしましました。リキには決して連絡しないと決めていたのに、破つてしまつたのです……』

「そんなことどうでもいいから！ ねえクド、無事だつたら今すぐ逃げて！」

『もう無理なのです。私たちのキャンプは完全に包囲されていました。おじいさまが突破口を開けてくださいましたが、そこを抜けられたのは私だけなのです。いくら暴徒といえども、こんな私ひとりを、みすみす見逃すはずがありません』

『そんなことはないよ！ クドはリトルバスターズの練習でがんばつていたじゃないか！ だから——だから！』

一瞬の間があつた。クドが小さく息を飲んだのだ。

『リトルバスターズ……懐かしい名前を聞いた気がします。——あの頃はとても楽しかつたのです……。出来うことなら、もう一度皆さんとお会いしたかつた……もちろん、リキともです』

「もう一度なんて言わないで！ 僕らは必ずあえる！ だからクド、逃げて！」

『もう無理なのです。私はもう一步も動けません。そして、追つ手の足音が聞こえるのです』

「そんな……何か手があるはずだ！ なにか——！」

『私もそう思いたいです。でも、足音はこつちにまつすぐ向かっているのです。私は廃屋の中

……もう逃げられません』

「そんな……！」

『リキ、リキ……ごめんなさい。ごめんなさい。こんなことを言つてもリキの重荷にしかならないつて気づいているのに、それでも言わざるを得ないです』

『ごめんなんて、そんなことはない！ そんなことはないんだよ、クド！』

『いえ、これはリキには出来ないことです。なのに私は、それを望んでしまうのです——ああ、

扉が開いてしまいました。もう、おしまいのようです』

『クド、おねがいだから逃げて……なんとしてでも逃げて！』

思わず、そこにあつた壁を拳で殴つて僕はそう叫んでいた。

『駄目なのです。もう見つかってしました。リキ、ごめんなさい。本当にごめんなさい……！』

リキの重荷に、リキのトゲに、リキの傷になつてしまふのに、本当にごめんなさい……！』

電話越しに、直ぐ近くで誰かの足音がした。

『……リキ、助けて』

直後に、ブツリという音。

それを最後に、クドからの通信は途絶えた。

「クド！ クド！」

自分の携帯電話に向かつて、叫ぶ。けれども帰つてくるのは無慈悲なブザー音だけだ。

「くそ——！ 繋がれ、繋がれっ！」

リダイレクト機能を使って、クドの携帯電話を呼び出す。

『この携帯電話は、電波の無い地域にあるか、電源が切られています……』

思わず、携帯電話を床に投げつけそうになつた。かろうじて押しとどまつたのは、電話が使えなくなつたらクドが連絡手段を失うぞと、頭のどこかで声が囁いたからにすぎない。
「なんでクドを襲うんだよ……クドが何をしたっていうんだ……！」

僕の声が、虚しく響く。

この電話を境に、クドからの連絡は完全に途絶えた。

そしてテヴァの情勢も、最悪に近い状態となつた。

確かに今の僕にはクドを救うことが出来ない。それはクドも、そして僕自身もよくわかつている。

それでも、僕は情報収集を続けていた。

ある時は恭介に、またあるときは来ヶ谷さんに手伝つてもらうこと也有つた。ふたりとも事情をよく知つていたから本当に力になつてくれた。それは、とてもありがたいことだつた。

それでも情報は日に日に減つていき、とうとう何もわからなくなる日が出てきた。逆に増えてきたのは無責任なデマで、それを選別する方がより時間を割かれるようになつていたくらいだ。

やれ、島は疫病が蔓延して生きている人はいない。

曰く、内戦が激化して生き残つている人はごく少数。

その筋の話によれば、ロケットの積み荷が原因で植物が異常繁殖……等々。

同じデマならもつと明るい話題をでつちあげて欲しいと思う。

それでも僕は諦めずに情報収集を続け――。

とうとう国連が軍事介入を決定したことを知つた。

暴徒に連れ去られたボランティアや各国関係者を救助するため、本格的に動き始めたのだ。

けれども、クドの情報はまつたくもつて入つてこない。

そんなある日、僕の部屋を訪れた人がいた。

クドの元ルームメイトの、二木さんだつた。

「直枝理樹？ 貴方にお願いがあるのだけど」

「無言を肯定と理解したのだろう。二木さんは小さく息を吸うと、

「クドリヤフカの部屋にね、貴方に処分して貰いたいって頼まれた小包があるのよ」

「そういえば、クドがそう言つていたのを思い出す。

「もうそろそろあの部屋に新しい生徒が入るから、回収してもらえないかしら」

「あ、うん。そうだよね……」

いつまでも空き部屋になつていて欲しいと思つていたけれど、女子寮も男子寮と同じく、常に人の移り変わりがあるのだ。それは仕方のないことだと思う。

「今からで、いいの？」

「ええ、寮長の許可は取つておいたわ。部屋までついてきて」

「うん、わかつたよ」

そう言えど、いつもクドの部屋に行くときはそんなもの無しに行つていたことを思い出す。よく考えてみたら、今までよく見つからなかつたものだ。

「久々に、笑つたわね」

「……え？」

「笑顔。無意識だつたみたいだけど、今確かに笑つていたわよ」

「そういえば、クドと別れてから笑つた記憶がない。」

その事実に内心驚いているうちに、僕らは元クドの部屋に到着した。

「これは——」

部屋の中には何もなかつた。なんでも、これを期に二木さんも元の部屋に戻るらしい。

「随分殺風景になつたね……」

「そうね」

「あれ？ 家具は？」

あれだけあつたのに、何ひとつ残つていない。

「家具部の倉庫に戻したそよ」

「戻したつて——どうやつて？」

少なくとも、クドひとりでは決して出来ないはずだ。

「例の黒服の集団が運んでいつたわよ」

両腕を組んで、二木さんが淡々と言う。

「そんな、僕らに声をかけてくれれば良かつたのに」

「……それは、クドリヤフカにはできないわよ」

一段声を低くして、二木さんはそう答えた。

「考えてみなさい、直枝理樹。自分たちで造つたものを自分たちで壊す。それがどれだけ辛い

「それは……」
言葉に詰まつた。

クドは、この部屋をバスターZのみんなに見て欲しくなかつたのだろうか。
だとしたらそれは……すごく切なかつた。

「さて、いつまでも立ち話していると時間の無駄ね」

そう言つて、二木さんは部屋の隅に置いてあつた小さな段ボールの小包を手にとつた。

「ほら、これよ」

と、わざわざ僕のところに持つてきてくれる。

「うん。ありがとう……」

想像以上に軽いその小包を受け取る。それを黙つて見つめていると、二木さんはふいに、

「ねえ、直枝理樹」

「うん、なにかな？」

「クドリヤフカは、なんでこの荷物を貴方に処分してもらいたいと思つたのかしらね」

「……え？」

たしか、クドは捨てきれなかつたと言つていた。でも……。

「奇妙だと思わないの？ あれだけの家具を元の場所に戻す余裕があつたのに？」
「あ……」

確かに、そうだ。こんな小さな包み、そのまま焼却炉に放り込んでしまえばそのまま終わる。なのになぜ、クドはこれを僕に処分するように頼んだのだろう？

「二木さんは、この荷物がなんなのか、知っているの？」

「馬鹿言わないで。私にそんなことがわかるわけないでしよう。超能力者か何かじやあるまいし」

確かに、言われるまでもないことだった。

「……でも、推測は出来るわ」

「え？」

「クドリヤフカはこれを、自分の手で捨てることが出来なかつたのよ。けれど、それをあの黒服達に捨ててもらうことも出来なかつた。それは何故か。多分、自分が信用できる人以外に捨ててもらいたくなかつたのでしょうね」

「それって——」

「私に皆まで言わせないで、直枝理樹」

ぴしやりと、二木さんはそう言つた。

「確かにそれを渡したわよ。そしてそれを手にしたのだから——後は貴方の思うとおりにやつてみなさい」

二木さんと別れ、自室に戻る。クドから託された荷物をすぐ開封する気にもならず、気が付ければ夜になっていた。

——いや、正確には。

僕がひとりになる時間を、待つていたのかもしれない。

クドは、この荷物を僕に処分して欲しいと頼んでいた。

ということは、この中身を僕以外の人に見せたくないということなんじやないかと思う。

厳重に、まるで封印するかのように梱包されていた小包の中に入っていたのは、いくつかのエアメールと宇宙に関するテキストだった。

「これは——」

テキストを開けてみると、ついこの間の実力テストのようにあちこちにマーカーが引いてあり、余白という余白には細かい字で注釈やメモが書き込まれていた。

「クドは、宇宙飛行士の勉強をしていたんだ……」

なんとなく、クドが打ち上げを——それも自分の母親が乗るロケットの——を避けていた理由がわかつたような気がする。

それは、見上げるのには高すぎる目標だつたのだろう。つい最近、お互いがわかりあえるまでは。

あの事故さえなければ、それは今も続いていたはずなのに。
やりきれなくなつて、テキストを閉じようとする。

「……ん？」

その際、テキストに挟み込まれていた何かが床に落ちた。僕は、それを拾い上げてみる。
——それは、一枚の絵はがきだつた。
写真だらうか。そこに描かれているのは——。

不思議な空だつた。

あえて言うなら、夜の空と昼の空が隣り合つてゐる。

でもそれは明け方とか夕方ではなくて、夜の黒と、昼の青が隣り合つてゐるのだ。
これはいつたい、何なのだろう。

そう思つて絵はがきを裏返したところで、僕は息を飲んだ。

『——いつか一緒に、50ノーティカルマイルの空に行こうね』
たどたどしい筆跡の日本語。そしてサインには綺麗なキリル文字。
誰のメッセージなのか、一目でわかつた。

「駄目だよクド……」

握りしめないよう注意しながら、絵はがきを持つ手に力を込め、僕は噛みしめるように呟く。

「これを処分しちゃ、駄目だ……」

この絵はがきを、処分する訳にはいかなかつた。

クドだつて、わかっているはずなのだ。

クドは、捨てきれなかつた荷物があると言つていた。

それは、ただ単に手間暇を惜しんだわけではない。

自分では、捨てようにも捨てられなかつたのだ。

ふと、背中が熱を帯びたような気がした。

「クド……」

それに構わず、祈る。

……一体、何に？

『リキ、テヴアの島々はですね……』

クドの話を思い出す。

なら、テヴアの神様に。

テヴアの島々となつた神様に――。

なんだろう――背中が……熱い？

○

……テヴアに帰つてからは、毎日が大変でした。

まず、私が乗つてきた飛行機が帰途についた直後、空港は民衆が起こした暴動により、不法占拠されてしまいました。

つまり、私は日本に行く手段を失いました。

それから迎えに来てくれたおじいさまと、おじいさまの『お友達』の方々と一緒に、簡単な仕事のお手伝いをしたりしていました。もつとも、その内容は私にはさっぱりわかりませんでしたが。

そんな中、たつたひとつだけ良いことがありました。

「——そうか、脱出口ケットは無事に作動していたか……回収は？」

「米海軍が。宇宙飛行士たちの安否はまだ不明ですが——どちらにせよ、彼らに借りを作つてしまつたことになりますね」

「構わん。本国がここまで来ることは事実上不可能であるし、暴徒に捕まつて——されるよりよっぽどましだ。そういう意味で、管制塔に残つたスタッフには気の毒なことをした……」

「……お気になさらず。皆、覚悟の上で臨んでいたことですから」

「——最後まで、データを本国に送信していたようだな」

「はい。ご存じであると思ひますが、打ち上げや飛行、そして再突入のデータは、蓄積してこそ意味がありますので。……彼らの努力によつて、その損失は最小限で済みました」「そうか、わかつた……。とにかく今は、チルーシャたちの生存確率が上がつたことをよしとすべきなのだな——」

おじいさまと『お友達の方』の会話は私に知らされることはありませんでしたが（おそらくおかあさんの生死が確定していなかつたからでしょう）、それでもそれを立ち聞きしてしまつた私は、おおいに勇気づけられました。

——でも、本当にそれだけでした。

あれだけ綺麗だつたテヴアの空に黒煙が上がらない日は一日とてなく、南国の鳥特有の変わつた鳴き声の代わりに響くのは耳を塞ぎたくなるような銃声で、それは黒煙と同じくいつもいつも、遠くから響き続けていました。

そしてその黒煙も銃声も、徐々にこちら側に近付いて——。

「同志イワン、お逃げ下さい！」

「なにがあつた！」

「暴徒です。暴徒がここを嗅ぎつけました！——処刑する前に、管制のスタッフを拷問に

かけていたんです！」

「なんということを……」

——ついに、ここまで来てしまったのです。

「クーニャ、待避の準備をしなさい！ クーニャ！」

おじいさまと『お友達の方』たちの動きは、迅速でした。速やかに不要なものを焼却し、荷物は最小限。そして書き物机の鍵が付いていた引き出しから——。

「クーニャ。使い方は、わかるね？」

そう言つておじいさまから手渡されたのは、おじいさまお手製の安全装置が追加された、拳銃でした。

「いざとなつたら引き金を引きなさい。今は、自分が助かることを考へるんだ」

「でも……でも……」

私でも使いやすいようにと考慮したものなのでしょう。その鉄の塊は古いものではありますたが、私の手に程良くあう大きさでした。

「いいかね、クーニャ。今は生き残ることを考えなさい。お前が捕まつたら——まず助からないのだから。だから、ためらわずに引き金を引きなさい。いいね？」

「はい、おじいさま……」

両手で銃のグリップを握りしめ、私はそう答へました。その間にも騒ぎはどんどん近づいています。

「いいかね？ 私と他数名が陽動に出る。そうしたらお前は他の者と一緒に反対側から海を目

指しなさい。海岸まで出れば、我々の同志が待っている。後は彼らの言うことをよく聞けばいい。わかつたかね？」

「はい、おじいさま……」

震える指先をポケットの中に入れることでごまかしながら、私はそう答えました。

「行きなさい、クーニャ！」

玄関口でおじいさまと別れ、そのまま裏口へ——と思つたら、何の変哲もない壁の前へと來ました。どうするのですかと私が訊くまでもなく、おじいさまのご友人のひとり——『ご友人』ではありますがリキよりふたつみつつ年上ぐらい——が壁の四方を軽く押します。すると、まるで襖か障子のように壁が横に開いたのでした。

「地下通路を用意しておけば、こういうことはならなかつたんですがね……」

そう呟くご友人方と一緒に外に出ます。

「後は、海にさえ出れば——！」

まるで抱き抱えられるかのように、地に伏せられました。何事かと思うまもなく、小さな舌打ちが響き、

「まずいな、まだいたのか……」

そうなのです。おじいさまたちの予想よりも、暴徒は多かつたのでした。

「——だとしたら、やることはひとつだけか」

「——そうなるな」

ご友人方はそう呟いて頷き合い、拳銃を引き抜きました。そして、先ほど隠し扉を開けた方が私の前に屈むと、

「我々も陽動に回ります。……どうか、お達者で」

「え？」

思わず聞き返します。するとご友人の方はリキのような笑顔を浮かべて、「これもお役目です。どうかお気になさいませんよう……それでは！」

こうして、私はひとりになりました。

「海へ行けば、海まで行けばどうにか……」

呪文のように呟いて、私は歩きました。ここで立ち止まつていては、おじいさまたちのしてきたことが、無駄になつてしまふからです。

海まで行けば、どうにかなります。そう固く信じて足を速めたとき——。

ひときわ大きな炸裂音と共に——真っ黒な煙が前方から立ち上つてきました。

「……そんな」

思わず立ちすくんだ次の瞬間、近くで足音がしました。

暴徒でしょうか、その顔立ちはテヴァの人です。手には小銃を持っていますが——こちらには、まだ気付いていません。

見張りなのでしょうか。こちらに背を向けて、海への道を見張っています。私が隠れた物陰からの距離は……10メートルもありません。

——いま、ここからならば、相手に気付かれずに発砲できる……消音装置は付いていませんが、これだけの銃声です。誰も不思議に思わないでしょう。

震える手で、銃を構えます。後は、引き金を引くだけで撃つことが——。

「おじいさま、ごめんなさいですっ！」

私は銃を投げ捨てました。どうしても、撃てなかつたのです。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！」

そのまま私は、でたらめな方向に走り出しました。

後から思えば、それはどう考へても愚かしい行為でした。たとえ捕まる可能性が高くなつても、私はその場にとどまるべきだつたのです。そうすれば捕まる可能性以上に、おじいさまやご友人の方たちと合流できる可能性は上がつていたのですから。

でも、そのときの私はそんなことをまるつきり考へていませんでした。

もちろん、そのつけは回つてきました。走れなくなつた私は廃屋に隠れたものの、すぐに包囲されてしまつたのです。

そして——よせばいいのに、私は携帯電話を手に取つてしまつたのでした。ダイヤルしたのは、リキの番号です。

私にとつても、なによりリキにとつても、それは良いことではありません。それでも私は携帯電話の電源を入れて、決して言つてはいけないことを言つてしまつたのです。

「リキ、助けて——」

そこで、私は暴徒に捕まりました。

……なんて罰当たりなのでしょう。そう思います。

私を好きだと言つてくれた人に、私は何を返しているのでしょうか。

ただ、傷つけているだけに過ぎないのではないでしようか。

そう自己嫌悪に陥つている間に、私はこづき回され、鎖でかんじがらめにされたかと思うと、暗い洞窟の中につるし上げられました。

この時点で、辱めを受ける覚悟は出来ていました。

けれども、実際に自分の衣服をはぎ取られたときに沸き上がってきた感情は、恐怖以外にありませんでした。

「お願い、マントと帽子だけは——」

そう言つても通じる訳がありません。けれど、そのふたつにすがりつく私に、だいたいの意味を察したのでしよう。

彼らは、にやにやと笑いだしました。

——わかつていたことなのです。そんなことをしても、嗜虐心を煽るだけなのに。

果たして、彼らはにやにやと笑つたまま、私のマントを引き裂かんと、両手で掴みました。同時に、数人が私の脚をむりやり開こうと手を伸ばし——。

「やめてつ……！」

私が叫んだ直後、天井から轟音が鳴り響き、直後に洞窟全体がわずかに揺れました。たつたそれだけで、私を襲おうとしていた暴徒たちは、一目散に逃げ去りました。

——鎖に吊されたままの、私を残して。

おそらく、何者かがこの洞窟の近く——あるいは天井そのものを空爆したのでしよう。

「このまま待つていれば……このまま待つていれば……！」

そう。このまま待つていれば救けが来るはずです。空爆したのがどこの国なのかはわかりませんが、少なくとも暴徒であるはずがありません。

なら、必ず捜索されるはず。

最初の数時間は、そう信じていました。

「出して！ ここから出してください！」

次の数時間は、叫ぶばかりでした。

下手に訓練を受けていたのが、私が正気をなくすのを先延ばしにしていました。

ただそれは、苦しみを長引かせるものでもありました。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

さらに次の数時間、私はひたすら謝り続けていました。

おじいさまのいいつけを破つてしまつたことを、リトルバスターZのみなさんに黙つて出て行つてしまつたことを、おかあさんの打ち上げを直接見にいかなかつたことを、その打ち上げの事故でテヴァアがひどいことになつてしまつたことを。——そして、助けられるはずがないのに助けを求めてしまつたことを、リキに。

もちろん、誰も聞いていません。

それでも私は、謝り続けました。

「……」

——そして。

次の数時間が、今でした。

随分と思い出すのに時間がかかつてしましましたが、そういう顛末なのです。

つい先ほどまで、ここを宇宙と勘違いしていたくらいですから、私の神経はよつぱど参つているのでしょう。

でも、それでいいのです。苦しみ抜くよりはよつぱどましなのです。

後はこのまま、心も身体もこの暗闇に飲まれてしまえばいいのです。
なぜなら、最後の最後で、私はリキを傷つけてしまいました。

それが、この報いなのでしょう。

こうなるのは、なかばわかつてていたことなのです。

あの日、テヴァにロケットが落ちたとき。

あの日、私がテヴァに帰ると決めたとき。

あの日、暴徒に捕まりここにつれてこられたとき。

三度も覚悟を決めていたというのに、私はなんて見苦しいのでしょうか。

もう、この今までいいのです。そうすれば、私の望んだ結末を迎えることが出来るのです。

心残りなど、なにひとつありません。

——あ、いえ。ひとつだけありました。リキです。

リキには、本当に悪いことをしてしまいました。どうか私のことなど忘れて、素敵な人と出
会つてほし——。

……ド。

——え?

とうとう、限界を越えてしまったのでしょうか。
今、リキの声が聞こえたようだ。



……クド。

ああ、やつぱり聞こえてしまします。幻とはいえ最後の最後でリキの声を聞けるなんて、喜ぶべきなのでしょうか。悲しむべきなのでしょうか。

それとも、なんて私は罰当たりなのだろうと嘆くべきなのでしょうか——。

「あきらめちゃ駄目だ、クド！」

すぐそばで、リキの声が響きわたりました。

ぼうつとしていた頭が少しだけ醒めます。

そして——目の前に、リキがいました。

「……リキ？ そんな……」

とうとう幻覚が見えるようになつてしまつたのでしょうか。

「違うよ、クド。幻なんかじやない」

そう言つて、リキは着ていたシャツを脱ぎ捨てました。そこにあつたのは——。

「ストルガツキー・オリジナル……」

「そう、クドが描いてくれた紋だよ。ほら、クドにも」
そう言つて、気がつきました。私の背中にも二の腕にも、リキが描いてくれた紋が浮かんでいます。

「テヴァーの伝承は、本当だつたんだね。僕らの絆は消えなかつたんだ」

そう言つて微笑むリキに、私は泣きそうになりながらも頷きます。

「クド、帰ろう」

鎖を掴んで、リキ。

「でもリキ、私は……『世界の良き歯車となれ』と——」

「駄目だよ。これがそんなことだなんて僕は認めない！」

赤錆だらけの鎖を引きちぎるように解きながら、リキはそう叫びました。

「リキ……」

「僕とクドの紋が対になつたのなら、僕は『世界の良き歯車』としてクドを助けるよ。そして——僕の紋の意味はたつた今決まつたんだ。『何があつても、生きろ！』」

「——何があつても、生きろ。その言葉が胸に浸透するのと同時に、リキが語りかけます。

「……忘れないで。僕はクドが帰つてくるのを待つてゐるから。だからクド、必ず帰つてきて」
それはある意味、もつとも厳しい言葉でした。今の算段で、テヴァを出るなどとてもではな
いけど出来ないことでしたから。

「わ、わかりました……リキ」

でも私はそう答えました。私の紋とリキの紋は、もはや対になつてゐるのですから——。

「待つてゐるからね、クド」

「……はい。必ず、帰る……のです。」

私はごく間近でリキと頷きあい——。

次の瞬間、真下の水たまりに落下したのでした。

「がばつ……ごほつ……！」

もがきながらも、慌てて水面に上がります。幸いにして、マントと帽子は鎖に引っかかつて落ちていませんでした。それを身につけて大きく息を吐きます。

「帰らなきや……」

自然とその言葉が、口からこぼれ出ました。リキとの約束を、果たさねばなりません。

とはいって、出口がわかりません。天井にあるいくつかの隙間から、からうじて明かりが漏れていますので暗闇ということはありませんでしたが……。

「考えなきや……帰る方法を……！」

そのとき、かすかな風が頬を撫でていきました。

「これ、は——」

勉強していた内容が、脳裏をかすめます。

もし、宇宙船の中で風が吹いた場合は空気漏れ。吹いていく先から空気が抜けていく穴を捜し出して、直ちに塞がなくてはなりません。では、もしそれが洞窟のような環境なら……？
それは、出口です。

吹いてくる風の源に、出口があるはずなのです。

「帰らなきや……いえ、帰るのであります！」

引きずるように足を動かして、私は出口を目指し歩き始めました。もつとも、長い時間吊されていましたが、足がもつれて、違うよりはましといった程度でしたが……。

「待っているんです——リキが待っているんです！」

頭の中のどこか冷静な部分が、しゃべらない方がいい、それよりも体力を温存した方がいいと、ささやきかけます。それでも、私は言葉を発することを止められませんでした。

「リキが待ってくれるのなら、私は帰らなきやならない……のです！」

目の前に、強い光が見えました。

私は歯を食いしばって、前に進みます。

もう岩盤の冷たさも、その固さからくる痛みも感じません。

それでも私はその光に向かって突き進み——ついに、外に出ることが出来たのでした。大きく息を吐き、次いで咳こみながらも、どうにか倒れないように気を保ちます。

「リキ……リキ……待っていて、くださいね」

明け方、太陽が昇り始めた空が、そこにありました。

もう黒煙も、銃声もありません。

見上げる先は、何処までも青く澄んでいて……そのまま宇宙へと飛び立てそうな空でした。

○

目を、開ける。

そこは間違いなく僕の自室で、傍らにはあの絵はがきが置いてある。数時間も経つていたような気がしていたのに、時計の針は、あまり進んでいなかつた。

ただ、身体を包んでいた熱さは消えていた。

そして同時に、僕の両手が赤錆に汚れていた。

つまり、僕は本当に解けたのだ。クドを縛つっていた戒めを。

それならば、クドは——。

「どうした理樹、眠れねえのか」

寝ていた真人が、ごそごそと起き出した。そして僕の手を見るとぎよつとして、

「——うおつ、お前どうしたんだよその手！」

「心配しないで、これ血とかじやなくて赤錆だから」

「赤錆だ？ 鉄棒でも使つて鍛えていたのか？」

そんなことを言う真人に、僕は笑つてごまかした。

クドは、帰つてくる。

必ず、僕の許に。



エピローグ



帰国するにあたって、ひとつ問題がありました。

私はもはや、あの学校の生徒ではないということです。

退学届けを出してしまった以上、あそこに戻るというのも変な話ですし、どこか落ち着けるところを探さなくちゃ——と考えていたところで、電話が入りました。

電話の主は、おじいさまのご友人で、あの学校の理事会にいらっしゃる方でした。

形式通りの挨拶を交わしてから、その方の言葉に、私は文字通り飛び上りました。

学校側の手違いにより、私の退学届けは受理されていなかつたというのです。

なので、もしよかつたら——というお話をでした。

そんなわけで……私に、帰るところができました。



(どある通信社の、多国籍軍に対するインタビュー。その抜粋より)

——彼女は意外なところで見つかったそうですが。

「ああそうだ。彼女は現地で言う祭壇で見つかったんだ」

——祭壇……ですか？

「ああ、天然の洞窟を利用したものでね。なんでも現地の人間があちらの神に祈りを捧げると
きに使うものらしい。だが、今回の混乱ですっかり荒らされていてね。だから最初は洞窟を利
用したゴミ捨て場だと思ったんだ。だから俺達は一旦そこを探索を見送っていた」

——けれど、そこにいた。

「そう。だから死ぬほど驚いたよ。その入り口から少し離れたところにボロボロの女の子が佇
んでいたんだからさ」

——再探索となるきっかけは？

「どうしてゴミ捨て場に再度向かっていったかってことかい？……それはちょっと難しい話
になるんだが、搜索を行っていた俺達の前に、不思議な少年が現れて、何も言わずに例の洞窟
の方を指さしたんだ。——なんで不思議なのかだつて？そりやだつて、テヴァアじやまず見か
けない日本人顔だつたし、服装も所謂スクールボーイみたいな格好だつたからさ。そしてなに
より——まあ信じても信じてくれなくてもいいんだが——俺達が話しかけようとした次の瞬間、

煙のようく消えてしまったんだよ」

——それは、にわかには信じられない話ですね。

「それで構わないさ。ただ俺達が発見しなかつたら……女の子は、危なかつたろうね。そういう意味で、あの不思議な少年には感謝しているよ」

——取り寄せてもらつた英字新聞の記事をから顔を上げ、二木佳奈多はため息をついた。

ようやくにして、テヴア共和国に安定がもたらされようとしている。

暴徒も各国より調停のための特使とそれを実行するための軍隊が送られ、ようやくにしておとなしくなつたそうだ。

もつとも知名度がまつたくないこの国では例の事故以来報道はぱたりとやんでいたため、佳奈多はこうして英字新聞に頼らざるを得なかつたわけだが。

そういうえば、そろそろだろうか。

英字新聞の日付を指でなぞりながら、そう思う。

そこでマナーモードにしていた彼女の携帯電話が鋭く震え、佳奈多は思わず飛びあがりそうになつた。

はやる心を押し殺して、携帯電話の通話ボタンを押す。

「もしもし」

相手は、想像通り佳奈多もよく知る人物であつた。

「……あのね、私に相談したい気持ちはわかるけど、最初に連絡すべき相手がいるでしょ？」

電話口の向こうで、相手は動搖しているようだつた。

「——そうね。もう電話してきてしまつたのだから、仕方のないことを言つたわ。……素直に、思つた通りのことを話しなさい。私にはもう、それしか言えないわ」

それでも、その相談相手にとつては助かつたらしい。何度も礼を言つてくる。

「それは彼にも言つてあげなさい。こここのところ、ずっとテヴァを調べ続けていたのだから」その一言が効いたらしい。電話の相手はもう一度だけ礼を言うと、電話を切つた。

「まつたく……」

携帯電話を置いて、佳奈多はため息をつく。今し方電話をしてきた相手にではない。自分自身に対してもだ。

「素直に思つた通りのことを話しなさい、か——」

まつたく、自分で出来ないことをアドバイスするなんて、ひどい風紀委員もいたものね……と、彼女は自嘲する。

「今からでも、遅くはないのかしら」

そう言つて窓から外を見ると、濃い緑色の葉が茂つた木々が目に入つた。

季節は、夏になろうとしている。



「ほら、たまには外に出るのもいいもんだろ？」

「うん……」

僕は、久々に外を歩いていた。

こここのところこもりがちだつた僕を見かねたのか、真人が外に連れ出してくれたのだ。隣には謙吾と恭介もいてくれて、僕は色々な人に心配してもらつてることを改めて感じる。それは、とても嬉しいことだつた。

「やつぱりよ、外に出て、身体を動かして、筋肉をつけねえとな！」

「あはは……そうだね」

出来るだけ笑顔を浮かべるように努力しながら、僕はそう答えた。

「——クー公が気になるのか、理樹」

鋭い。僕は舌を巻きながらそう思う。

「最近、情報が少なくてね……」

あの事故から暴動に発展し、そして鎮圧されてから時が経つにつれ、こちらに入つてくる情

報は日に日に少なくなつていたのだ。

「せめて、無事かどうかがわかれればな」と、謙吾。

「あ、無事であることはわかるんだ」

「ほう？」

「その、なんとなくなんだけどね。ただ、今クドがどこにいるのかまつたくわからないから」
そう。それだけはわからない。

——クドは今、どこにいるのだろう？ もうそろそろ、戻つてきてもおかしくないのだけど
……。

そう思つた次の瞬間、身体に刺激が走つた。

なんだろう、二の腕が……熱い？

この感覚には、おぼえがある……そう、あのときの！

気が付いたら、僕は駆けだしていた。

「どうした、理樹！」

真人が慌てた様子で声をかける。

「ごめん、僕戻るよ！」

「理樹、一体どうし——そういうことか」

謙吾が何かを悟つた。そして恭介にいたつては——、「全員いるんだな？ そうか。それなら都合がいい。——ああ、そうだ。バスターZ全員集合。至急校門の近くに集まるように！」

みんな、本当にありがとう。

心の中で礼を言つて、僕は駆けだした。

校門の前に、たどり着く。

僕が校門の前に辿り着いて肩で大きく息をはくのと、黒塗りの自動車が一台、校門の前で停まつたのは、ほぼ同時だつた。

車の後部座席から、誰かが降りてくる。その姿は、逆光になつていてよく見えない。でも、でもその小柄な人影を、僕が見間違えるわけがなかつた。

「……リキ」

はたしてその声の主は——汚れた帽子を被り、マントを手にしたクドだつた。

「おかげり、クド」

かろうじて息を整え、僕はそう言つた。

「ただいまです、リキ」

どちらかというわけでもなく近寄つて……僕はそつとクドの肩を抱き寄せた。

両手でクドの身体を包んで、初めて気付く。

クドは、少しやせているようだつた。

「……大丈夫、だよね？」

「ちょっとしたダイエットなのです」

氣丈にも笑つて、クド。

「それよりも、ずいぶんお待たせしちゃいました」

申し訳なさそうに、そう言う。

「ううん、帰つてくるつて信じていたら、気にならなかつたよ」

そのあとに続く言葉がうまく出てこない。その代わりに、僕はよりいつそうクドを抱きしめる。

「ごめんクド、今僕は嘘を言つたよ」

「え……？」

「クドのこと、心配だつたんだ。ずっと

「リキ……」

一瞬クドは泣きそうな顔になつた。けれども、ぐつとこらえて、「もう私は、どこにも行かないのです」



「うん……うん……！」

「クドの方がよっぽど辛い目にあつたはずなのに、僕は涙をこらえるのに必死だつた。
「リキ、これを。かさばりますけど」

「そう言つてクドは汚れてぼろぼろになつた帽子とマントを僕に渡してくれる。
「それならクド、僕からも。ほら」

「そう言つて、あの絵はがき——ここのこところずつと上着のポケットにお守り代わりに入れて
いたもの——をクドに手渡した。

「これは……50ノーティカルマイルの空……捨ててなかつたんですね、リキ」

「うん。クドには、これを持つていて欲しかつたんだ。クドはこの空を見たいんじゃないかつ

て」

「懐かしいのです。あのときは、ちゃんと見ていましたが——！」

クドの目が、大きく見開かれる。

「……リキ、私はこの空と同じ空を、見ました」

「え？」

「リキに助けてもらつたあのとき、50ノーティカルマイルの空が見えたんです」

空を見上げるクド。僕もそれにあわせるように空を見る。

そこは何の変哲もない夏の始まりの空。大きな雲が低いところをいくつか浮いている、いつ

もの光景だ。

けれど、僕には——そしておそらくクドも——その空の先が見えた。空の青がどんどん濃くなつていき、ついに黒一色となる世界。

月が、太陽が、そして地球が、他の星と対等にあるところ。

クドは、そこが見えたと言つた。

ならば、きっと、その次には——。

背後から、賑やかな声が響いていた。

学校の内外から、リトルバスターズの面々が集まつてきたのだ。

「さあクド、行こう」

「はい……なのです！」

僕の手をしつかりと握つて、クドがそう答えてくれる。

「リキ、リキ、私は目指します」

そして、僕のすぐ隣で言う。

「私は今度こそ目指します。おかあさんが見た風景を見に行くのです……。——そう

そう……いつか、50ノーティカルマイルの空へ。

大空の彼方にある、星々の世界。そしてクドがめざす——宇宙へ。

「こすもなーふとに、なるのです！」



Fin.

あとがき

こんにちは、小椋正雪です。

「今日は、リトルバスターズでお願いいたします」

という第一報をいただいて、以前のアンソロジーを思い出した私は先回りした気になつて『**マンティック大統領対筋肉大将軍　～とどけ！俺の純☆愛★ブレード！！～**

』というお話を用意していたところ、

「いえ……クドシナリオのノベライズをお願いします」

という第二報をいただき、目が点になつてしまつたのでした。

リトルバスターズの、ノベライズ。これは元々ファンとして（今もファンですが）Keyの作品を追いかけてきた私にとって、誇らしいものであると同時に、ものすごく緊張するものでして、ご期待に沿えるべく全身全霊で奮闘した結果、予定のページ数をオーバーしてしまい——こうして、あとがきのページ数がすごいことになつた次第です。

最後になりますが、イラストレイターの小路様、進行M様、そしてチエックしていただいたスタッフのみなさま、そしてこの本を手にとつてくださつたすべての方に、御礼申し上げます。ありがとうございました！

あとがき

はじめまして。小路あゆみです。

今回イラストを担当させて頂きました！

以前からkey作品には触れてきましたが
まさか自分がその一つに関わられるとは
思ってなかったですね。

「リトルバスターズ」に関しては
いろいろ思い入れがある作品です。
こっそりイラストコンテストに応募したり、
ひそり「VisualStyle」に掲載されてたり。
持っている方は探してみてください。
描いてるキャラはクドではないんですけど。

今回はキャラ別にノベライズする
という事でクドを描かせて頂きました。
描くのであればクドがいいな~と思っていたので
クド担当に決まった時は

「やったね！」という感じでした。
ですが嬉しい反面プレッシャーも大きかったです。
可愛く…描けてると思うのですがどうでしょうか…
クドはキャラを際立たせるパーティや小物が多いので
描くのが大変な反面、特徴を出すのも楽でした。
髪とめのコウモリがどっかに遊びに行ってたりね。

いろいろ大変でしたが多くの方に支えられて
無事完成までこぎつけました。

ありがとうございました！

そしてこの本を手に取っていただいた方
本当にありがとうございます！

いっぱい楽しんでくださいませ！

それではまたいつかどこかで
お会いできればとても嬉しいです！

ではではっ！

108
小路
あゆみ





VA文庫

リトルバスターズ！ 50ノーティカルマイルの、クドリヤフカ

2012年 9月28日 初版第1刷 発行

■著 者 小椋正雪
■イラスト 小路あゆむ
■原 作 Key
■製 作 株式会社パラダイム

発行人：馬場隆博
発行元：株式会社ビジュアルアーツ
〒531-0073
大阪府大阪市北区本庄西2-12-16
VA第一ビル
TEL 06-6377-3388

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。
落丁・乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示しております。

©MASAYUKI OGURA ©AYUMU SYOUJI ©VisualArt's/Key

Printed in Japan 2012

VA021

iOS対応 電子版情報

ビジュアルアーツマーケット for iPhone、iOS/iPad用コンテンツを販売するサービスサイトです。

ホーム カテゴリ サポート

Kine Book

宇宙のために、
私と付き合って下さい!

試の科学少女たちが繰り広げる、サイエンス・ラブコメディ!

だつて
甘ーい
ずきゅる

アンドロイド版ページへ

2012年7月27日
【新刊】だつてメーブルなせがを! ~お宇宙の科学と恋的冒険~ [KineBook]
リースしました。

2012年7月27日
【新刊】甘ざる! ~お宇宙の科学と恋的冒険~ [KineBook]
リースしました。

Visual Arts official magazine Visual Antenna
アンドロイド版ページの販売開始です!
お問い合わせはコチラ

iTunesでダウンロード!

ビジュアルアーツマーケット

<http://www.product.co.jp/iapp/>

Rewrite リライト

NOVEL・PARTH OF LEGACY ヘルアンソロジ

新刊ぞくぞく発売中!

各話とも
170円(税込)

キネブック

k!/nebook

電子版もAppStoreで好評発売中!



対応機種：iPhone 3GS、iPhone 4、iPhone 4S、iPod touch（第3世代）、iPod touch（第4世代）、および iPad に対応
※ iOS 4.3 以降が必要です



発売記念価格!
800円(税込)

だつて
甘くフル☆
甘すぎると
ぎる!

お子[チ]田の科学と姫約エンケージ
指輪

イラストはすべて、
完全カラーラー化!

音楽&演出強化で、
新しい読み応えの小説です!

ついに登場!
iPhoneでもiPadでも楽しめる、
もうひとつのVA文庫です!

好評発売中

キネティックノベル大賞
受賞者も続々参加中!



Rewrite

リライト

1

Rewrite
ノベルアンソロジー

VA文庫10
定価 590円(税込)



迷走する弾丸

文・飯山満 撏絵・館川まご



奪われた記憶

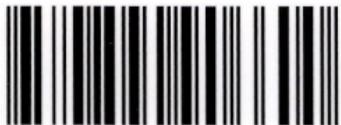
文・たねがしま鉄炮 撏絵・ころ



爆裂!
アームレスリング

文・桃山ふみか 撏絵・一真

シリーズ1~4巻が
好評発売中!



9784894906600



1920193006193

ISBN978-4-89490-660-0

C0193 ¥619E

定価：本体 619 円+税

発行：ビジュアルアーツ

発売：パラダイム



リトルバスターズ！ 50ノーティカルマイルの、クドリヤフカ

理樹の通う学園に、転校してきたクドリヤフカ。制服の上にマントを羽織った姿は小柄だけれど、元気の固まりで、いつも前向きな少女だった。理樹はそんな彼女を、幼なじみたちを中心としたグループ「リトルバスターズ！」の仲間へと誘う。すぐに打ち解けたクドは、誰からも好かれる愛くるしい性格だった。苦手なこともマイペースでがんばるクドの姿に、いつのまにか惹かれ始め、学園生活を応援してゆく理樹。不器用なふたりの関係を、仲間たちも見守ってくれるが……。

